

シルバー・ブレット

ダイコンナム・レンコーン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある時、ある場所で、化け物を狩る事を生業にした狩人が死んだ。しかし、その死後の世界は、人類とガストレア、そして「呪われた子供たち」と呼ばれる存在が居る世界だった。

子供たちとして生まれ変わったその者は、絶望と希望が渦巻く混沌の時代の中、黒の弾丸に紛れた銀の弾丸は、何を撃ち抜くのか。

目次

転がり込んだ銀弾	1
出会いの港	14
明日に向かって	24
失敗の中にある糸	36
首輪付き	48
新生活の洗礼	60
血の会議	71
目覚めの狩人	90
ひと時の平穩	108
銃口は何処に	119
舞台への階段	133
心は大人、身体は子供	147
笑顔と少女と幸せと	157
蓮とボウフラ	170
屍山血河の人魚姫	197

転がり込んだ銀弾

狩人は、死に際の走馬灯の中、夢を見た。

その夢の中で、何よりも煌めく黒い弾丸を見た、そして、古い憧憬を思い出した。

救いようのない世界で足掻く青年のその姿に。

迷いながらも己の正義を貫くその姿に。

見たかった。

触れたかった。

いつか、そうなりたかった。

……銀の弾に、己の名を刻む、夢の向こうに佇む"化け物"を射抜く為に、少しでも、夢の向こうに佇む"青年"の力になりたくて。

撃鉄を起こし、銀のリボルバーに同じ色の弾丸を詰め込む。

身体を包む倦怠感を振り払い、引き金を、引いた。

帰る事の無い矢は放たれた、すべてを振り切って。

地平を超えて。

次元を超えて。

突き進む。

目的地は、もうすぐそこだ。

??

「……俺は、どうなっちまったんだ？」

空は赤。

大地は黒。

おまけに夥しい死の匂いが辺りに撒き散らされている。

俺は死んだ、狩りの途中で死んだ筈だ、ここは森、死んだ場所も確かに森、と同じではあるが、奴を閉じ込める結界を紡ぐ為に木に掘り込んだ文字が見当たらない、間違い無く死んだ場所ではない。

「あーあー、おーい！ 誰か！ 他に誰か居ないのか！」

狩りの道具もない、塩も聖水も杭もりボルバーも、銀弾も。

……しかし、俺の声はこんな、甲高い、生娘のような声だっただろうか？

顔を下に、覗き込めば、そこにはなだらかな丘とピンク色の山頂があった。

……女への変態……悪魔の仕業か？ いや、妖精の悪戯と言う線もある…………最悪俺が悪魔の類になってしまった可能性も捨て切れない、何故なら。

頭に手を伸ばせば、グルリと渦を巻いて天を突く硬い角。

背中に手を伸ばせば、シルクのような触り心地と木綿のような強さを併せ持った蝙蝠の様な羽。

おまけに臀部には太く長く、硬い何かに覆われた尻尾があった。

……悪魔としては尻尾が過ぎるが、な。

だが、考えても答えは出ない、鏡の類が有ればより正確な判断を下せるが、無いもの強請りをしても仕方ない。

しかし、ここは何だ？ 少なくとも俺みたいなのが辺獄止まりな筈

はない、ここはもつと地獄の下層なのだろうか？

……俺は神を聖水やら浄めの札やらをくれる便利屋程度にしか礼賛してなかったのだ。地獄にぶち込まれるのが道理だろう。

しかしながら、地獄だとしても、警吏も拷問官も何も来ないのだから、俺は一先ず自らで断頭台にでも登らねばならないのだろうか。

少なくとも俺は地獄1回目だ、悪魔が槍を片手に来ようが勝手が分からぬ者を1人にした貴様らが悪いと言ってやろう。生憎地獄の事がよく分かるバイブルも死に際まで持っていなかったからな。

「……少しも笑えぬジョークだ」

少しこの森を歩いてみるか。

ペタ

ペタ

ペタ

素足に染みる水気を含んだ泥、小綺麗だった筈の足の爪には既に泥が所狭しと噛んでいた。

空気はやや冷たく、しかしながら、時にもつたりとした死の匂いと共に生温い風が吹き抜ける、そちらの方が慣れたものであり、悪寒よりも、寧ろ一瞬の安心と心地よい緊張を感じてしまうのは、狩人の性であり、業であろうか。

……しかし、奇妙な事に、これ程の死の匂いを醸しながら、死体が見受けられないのだ。

経験上、ここまで死臭が立ち込めている地域には凄惨な現場が広がっているのがある種のお決まりであるが、ここにはそれが無い、つまり、死体が食べられているパターンか死体が化け物の仲間入りしているパターンだ。

「ははは……」

思わず枯れた笑い声を出してしまう、こんな状況でも狩人としての業務を果たそうとする俺自身に。

ペタ

ペタ

ペタ

……見つけた。

真つ暗な森の中、ぬるりと煌めく粘液と、根源的な生理的嫌悪を催す腐敗臭。

折れた木の幹にもたれかかる様に斃れた死体が二つ。

一人は青年、胸に黒い金属製の杭が突き刺さっている、半開きの口に手を突っ込み口腔内を確認したが、鋭い牙は存在しなかった、片手には見慣れた回転式拳銃が握られている。空の薬莖が一つ、弾倉に残っていた。

もう一人は女の子、こめかみから脳天を射抜かれている、死後の硬直で固まった手には青年の胸に突き刺さる杭が握られている。

死体が背にした木の幹には血痕、そして黒い銃弾が埋まっていた、位置的に考えれば男の銃によるものだろう。

恋仲であったのだろうか。

兄妹であったのだろうか。

そんな下世話な空想が頭を過ぎったが、死人に口無し、降霊術の類をするには道具もないので、そんな思考に蓋をした。

気を入れ替え、こちらの女の子が「奴ら」かどうかを調べようとしたが、上顎をぶち抜いた際に頭蓋から溢れ出たであろう血が口腔内で固まり、まともに調べられなかった。その他に得られる情報も殆ど無

かった。

しかしながら、興味深い特徴を見つけた。

「これは……」

真つ赤な目、ルビーやガーネットにも負けんばかりの輝きと美しさだ、彼女がそのまま成長していれば、間違い無く男連中の目を惹く美女になっていた事だろう、惜しいものだ。

「これで全部か」

二人の死体の様子を確認すれば、大方死因は分かった。

胸に突き刺さった杭、脳天を撃ち抜いた弾丸。

恐らく、お互いの獲物なのだろう。

「概ね、心中、と言った所か」

仕事道具が無い以上、悪魔や妖精に唆されたのか、それとも痴情のもつれによるものなのか、それを判別する術はない。

だが、分かることはある。

お互いに迷いなく、急所を的確に破壊している。

例えば二人一緒に毒を飲んで自殺するよりも、お互いの頭蓋に銃を突きつけ、同じタイミングで引き金を引いて自殺する方が遥かに難しい、ましてや、獲物が違えば尚更に、だ。

どちらかが僅かに躊躇したり、早とちりすれば片方しか死なない。

互いに獲物を向ける心中とはある意味、お互いの覚悟を試される死に方だ。

その点で言えば、この二人は満点だろう、不謹慎ではあるが、お互いに想いあっていたのには間違いない。

……そしてもう一つわかる事がある。

彼らは、同業者だろう。

「化け物狩り」と言う意味でだ。

この黒い金属で出来た弾丸はともかく、杭は間違いなく特注だろう。

俺が使っていた、銀の弾丸を始めとした道具達の様だ。

心中の理由は結局分からず仕舞いだが、この世界でも化け物狩りが必要とされている現状に悲しむべきか喜ぶべきか、まるで分からない。

いや、ここは人として悲しむべきなのだろう、少なくとも、この青年と女の子はこんな場所にピクニックに来たという訳でもあるまいに、恐らくは「狩り」に出ているのだから。

「……いや、しかし、ならば何故こんな所で心中を？」

……ますます心中の理由が謎めいてしまった。

思考の海に溺れかけたその時。

ドガン！

森の全てが揺れた。

木の軋む音、葉が擦れる音、何かを砕く音。

空気の揺らぎ、強まる腐臭。

感じる視線。

その全てが余す事なく自身の身体に届く。

前の身体では到底想像もつかない「感覚」と言う情報の洪水に思わず酔ってしまう。

「おえ……うっ……」

情け無く空っぽの胃袋をひっくり返しても、当然ながら出てくるのは唯の胃液だけだった。

しかし、幾たびもの死線を越えてきた自分自身の直感に従い、女の子が持っていた杭と、男が持っていたベルトポーチとリボルバーを抜き取ると、裸一貫の我が身に装備した。

ベルトポーチのサイズが腰に合わず肩掛けにする。

こんな格好をする事になるとは……本に乗っていたアマゾネスの姿を馬鹿にしていた友人に言つてやりたいな、「案外気持ちいいぞ」とな、勿論冗談だが。

「……う？」

揺らぎが止まった。

……来る。

暗闇にさぞかし映えそうな銀の糸。

巨大な蜘蛛の化け物である事は瞬時に分かった、ならばやる事はただ一つ。

「……仕事の時間だ」

狩るか狩られるか。

化け物と狩人、そこにそれ以外の道理は存在しないのだから。

まずは身を翻す。

しかし、糸の回避の為に右に飛び退いた瞬間、馬車が衝突した様な衝撃に襲われた。

「くっ……なん、だ？ ……木？」

少なくとも右手側に木などは無かった筈だ、そう思い、自身が立っていた筈の位置を見た。

……クレーターだ。

クレーターがそこにはあつた。

奴の糸で？

……違う、一点集中ならまだしも、糸に拡散する爆発力などないだ

ろう。

他の奴が攻撃を？

……違う、感覚に一切引つかかっていない。隠形の類であっても、気配までは消せない。

幾つかの可能性を排除して行き、最後に残った可能性を選択する。

……これは、俺の仕業だ。

ならば何故、この様な芸当をその身一つで行えた？

答えを探す。

先程より倍も離れたであろう距離。

その先で佇むのは獲物に真摯な眼差しを向ける大蜘蛛。

その眼は、悍まじさと美しさを孕んだ"赤"であった。

………血の血族、吸血鬼絡みの仕事で嫌と言う程聞いた言葉だ。

血を分け与え、同族を増やす。

同意があるが無かろうが、それが行われたその先は大概悲劇しかなかった。

……人と、人であった化け物として、分かたれた者達を何度も見てきた。

……女の子の真つ赤な目が、その類である証拠であるならば、成る程、心中する心理も理解出来る。

しかしそれは死んだ理由であり、小柄な女の子が狩りの舞台に居る理由にはならない。

真つ赤な目、それが得られた情報の中で女の子と大蜘蛛を結ぶ一つのキーワード、そして、今、手に持っている黒い杭、この様な重い獲物を何故あんな女の子が持っていたのか、当然、万全に振るうには力が要だ。

つまり、裏返して考えれば、女の子には力があつた。

その力の源は？

恐らく、目の前の大蜘蛛に関連している筈だ。

同じ"赤い目"を持つ、あの存在に。

これは推理と言うより直感だ、長年の狩りの中で培つて来たものであり、ある程度信頼している。

そうして見つけられるのはきつと、あの様な女の子が狩りの舞台に居られる理由だ。

……今の俺も"同類"なのだろう、始末は自分で着けるとして、この大蜘蛛はまず始末しなければならぬ、ある程度狩れる可能性があるならば狩ると、昔からそうして来た。

……生きる為に狩っていた。

ポーチから弾を取り出し、6発、装填した。

撃鉄を起こし、引き金を引き、いくつかある目玉に1発。

奴の目玉は水風船の様に破裂する。

多少のけぞるが、有効打でない事は理解出来た。

どうやら怒らせてしまったのか大蜘蛛はこちらに猛進して来た。

本来、狩人として大柄の存在と戦うならば、罌の存在が不可欠だが、この身体ならば、問題はないだろう。

杭を地面に刺し、鋭敏になつた視覚の中、ゆっくり、ゆっくりと歩を進めている"様に"見えた大蜘蛛の右前足二本を早撃ちの要領で撃ち抜き、破壊する。

シングルアクションのリボルバーは昔使っていた事もあり、直ぐに手に馴染んだ。

急に支えを失った大蜘蛛の身体はこちらから見て左側に前のめりになりながら倒れる。

土煙の中、恨めし気にこちらを写す赤い目を無視し、すぐさまに大蜘蛛の頭上を取り、頭部と地面を縫い付ける様に突き刺す。

胴体と頭部の接合部に残りの3発を等間隔に撃ち込む。

後は杭を持ち上げる様にして大蜘蛛の頭を引っこ抜く。

抵抗すれど、上顎と下顎を縫い止められた状態でまともな攻撃は出
来ないだろう。

多くの化け物退治において"首を取る"と言う行為はある意味で
絶対的な信仰がある、首を取れば死ぬ、間違いとも言い切れないが、東
洋西洋に関わらずそれでは死なない化け物も当然いる。つまりは、油
断はナシだ。

念の為、何十回か胴体、頭部を黒い杭で突き刺したが、最早ピクリ
とも動かない。

火でもあれば跡形も無く消せるのだろうが、そういった物は二人の
手元に無かった、つまるところ、火は必要ではない、手持ちだけで"
殺せる相手"なのだろう。

……俺の推察が正しければ、この大蜘蛛も元は……

せめて死後の世界には辿り着いて欲しい物だ。

そう言えば、人の道を外れてしまえば、人の祈りが作り出した物で
ある天国にも地獄にも辿り着けなくなると狂った親父が言っていた
な。そんな現金な死後の世界などクソ食らえだが。

仕事を終え、再び二人の場所へ戻る。

このままにしておくのも流石に忍びない、埋葬しようと考えたが、
彼らの装備を、共に埋葬するべきか否か、それが悩みどころだった。

恐らく、彼らの装備は、あの……赤目の大蜘蛛に効き目のある専用の装備だ、ここでただ捨て置くのは、勿体ない、と言う気持ちも当然ながら存在する。

こんな時も狩りについて思考を巡らす自分に、乾いた笑いが出る。どうしたものかと考えていると、俺の直感が、凄まじい程の警鐘を頭の中でかき鳴らし始めた。

間も無く、無数の揺らぎがこちらへ集まっていた。

化け物を狩る宿業を背負えど……勝てぬ戦いを強行する程それに縛られる気はない。

「……すまない、墓は必ず、用意してやるからな」

何か他に形見になりそうな物はあるかと二人の懐を探ると、精密な、色付きの写真が載られたカードを見つけた。

字はよく分からなかった、俺自身、物心ついてすぐに狩りの世界に身を置いた為に、全くと言って良いほど字が分からないのだ。

走り出す、素足のまま。

ペタペタ

ペタペタ

ペタペタ

……振り向けば、大柄の首長の化け物や翅付きの化け物が森を跋扈していた、少しでも遅れていれば奴等の仲間入りだっただろう。あてもなく、更に歩いた。

ペタペタ

ペタペタ

ペタペタ

??

……何だ、あれは？

黒い、長方形の巨大な何か並び立つた場所が目についた。

少なくとも、人工物には間違いない。自然にあんな物が生まれてたまるか。

足をそちらに向けようとした時、ピタリと足が止まった。

……他ならぬ、自分自身による意思で。

……今、私は、角やら羽やら尻尾の生えた化け物だ。

人の目の前に現れるのは問題があるのではなからうか。

……いや。

待て。

もし本当に問題があるならば、あの赤目の女の子が普通の人間の青年と共に居た理由に説明がつかない。

何か訳があるとすれば………先程の俺の様な力を必要としている、か。

……もしそうならば、俺はまだ狩人を続ける事が出来るかもしれない。

??

……そんな甘い考えが思考を鈍らしてしまったのだろう。

……まさか、二人を殺害した容疑で逮捕されるなど、この時の俺は

かけらも想像していなかったのだから。

出会いの港

俺はただ、生き延びる為に銃を握った。

人に向ける銃ではなく、化け物に向ける銃を。

やがて俺は、感謝の味を覚えた。

それは、幼い俺には猛毒だった。

いつの間にか、俺は感謝される為に、化け物と言う絶対の悪を殺す大衆の為の正義に染まっていた。

それが間違いだと気付いたのは、己の友を撃ち抜いた時だった。

「すまない……許してくれ、許してくれ！」

「ほん、とうの……化け物は……」

掠れた声、潤んだ瞳、伸ばした彼の手が、俺の胸を指し示す。

本当の化け物は、そこに居る。

俺は、己の正義を刻み込んだ銀の弾丸で、それを撃ち抜くと決意した。

??

ヒタヒタと丘を登った俺は、いよいよ街の様相をはつきりと認識出来る様になっていた。

感覚を研ぎ澄まし、遙か先に広がる街を覗いてみる。

車……恐らくは、昔見た車が発展した物が、灰色の大地を所狭しと駆け巡っている。

そして、黒鉄のオブジェもそうだが、俺の見てきた建築物と比べ物にならない程の、高い、高い建造物が地平線を覆い隠していた。

この世界の人間は、高い技術力を持っている。

そう確信に至るまではそう長くはなかった。

「……そうか、「アレ」はそう言う意味か」

目でぐるりと均等に並び立つ巨大な黒鉄のオブジェを追っていくと、用途がやつと分かった。

アレは結界の一種だろう。恐らく、人間の生活圏を先の奴らから守る為の。

あの巨大な板の内には比較的新しい建造物が見られるのに対し、その外側の荒廃っぷりの、その差が目に見えて分かるからだ。もはや露骨と言っても良い。

もしかすると、結界や加護などと言った神秘の類の研究も盛んなのだろうか、と一瞬考えたが……少なくとも街中にローブを被った奇人変人の類は見当たらない、恐らくアレは科学の類だろうと踏んだ。

記憶に残る二度の大戦の中、科学が人に対しても、化け物に対しても猛威を奮ったのを知っている、風の噂で聞いた話だが、電磁波で焼かれた吸血鬼なども居たそうだ。

……そんな事を考えていると、先程の死臭とはかけ離れた爽やかな湿り気を帯びた風がやって来た。

雨の匂いだ。

あの力を見たとは言え、裸で雨に打たれるのは、流石に不味いだらう。

風と雨音に急かされるように、原っぱを駆け抜けた。

??

ジャラ

ジャラ

ジャラ

砂利を蹴飛ばし、いよいよ黒鉄のオブジェの足元にたどり着いた。瓦礫が散乱し、倒れた建造物の基礎がもろ出しになっている。また、残っている建物も、夥しい密度の蔦に覆われ、最早幾星霜と時を経た大樹の様な様相である。他にも、割れた灰色のコンクリートからは幾つもの雑草が生命力に任せて繁茂している。

正にジャングル、その他に形容できる言葉は存在しなかった。念の為、巨大な黒鉄の塔と塔の合間に何らかの結界が構築されている事を警戒し、瓦礫を放り込む、反応はない。

片腕を前に、その先に更に杭を伸ばしながらゆっくり、ゆっくりと見えない境界線へと足を進める。

ペタ……ペタ。

ペタ……ペタ。

ペタ……ペタ。

「……………はああ……………」

深いため息を吐く。

黒鉄の塔は後方に。つまり、あそこには何も結界的な障壁は無かった。自身にもあの化け物の力の幾分かは混じっているはずなのだが、何故通れたのだろうか。

……まさか、タダのカカシの筈はないだろう、もしかすると、明確な知性を持たない存在からの視認を妨害する様な、認識阻害の結界かもしれない。

己の中に理由を付けながら、更に石の森を進む、雨を避ける為に、幾つかの軒下を経由しつつ。

??

すっかり俺は各部位のコントロールを会得し、雨の影響を多少でも避ける為に俺は背中の羽をインバネスコートの様にして両肩と乳房を包み、尻尾で臀部を隠しつつ行動するようになっていた、俺であれば、この様な姿の者に出会えば間違いなく淫魔の類と断じてしまうだろう、すっかり俺は、何か服でもないかと思える程の余裕が生まれていた。

そうするとやはり、更に自分の身なりにも気を向ける様になる。

偶々通りかかった家の中に、割れたガラスが散乱していた。手鏡代わりと手にとったその中には、美少女……と言うより、美幼女と呼ぶべき存在が映っていた。

白と黒の入り混じった背中にかかる程の長髪、多少ハネているが、それでも髪質が良いと分かる。この髪をくすませている事に男だった筈の俺が罪悪感を抱くほどだ。

瞳は"黒"、あの黒鉄の塔にも匹敵する艶めきを放っていた。瞳に吸い込まれそうになるのは亡霊の双眸を覗き込んだ時以来だ。

胴体はスラツとしていながら十分に肉が付いているのが分かった。……俺が仕事をよく受けていた村でも、ここまで"健康"な事が一目で分かる子供は居なかった。

……待て、おかしい、俺は奴らと同類ではなかったのか、何故目が黒いんだ、てつきり同じ種族だからこそあの赤光を放つ目を持つのだ

と思ったのだが。……いや……これもいざれ分かる事だろうか。

思考を整理し、気を再び目の前の鏡に向ける、今、鏡は自身の全体を映していた。

森の中を抜けてきた事もあり、木々の木末に晒された肌は傷つき、汚れ切っていた。

髪には葉っぱや蜘蛛の巣が絡み全体を俯瞰的に、物に例えて評価したのであれば、恐らく、手入れを怠った旧家の屋敷とでも評価するだろう。

「……流石に汚いな」

……丁度外では雨が降っている、身体を洗えなくもないが、やはり疾病の類は恐ろしい、なので頭だけを軒下から出し、そこだけ洗おうとした。……のだが。

「……オイお前！ そのお前！」

活発さを声で表せばこれ以上ない、咎める様な、友人に呼びかける様な、不思議な声がどこからか響く。……強化された感覚のおかげで大体わかるのだが。

ここに来て初めて声をかけられたのもあり、取り敢えず返事をする。

「おれ……いや、私に話があるのかな？」

「おうおう！ ここは誰の縄張りだと……」

声の主が空から降って来た。声の主は片膝立ちに地面に着地する、膝に悪くはないのだろうか。一人称を変えるのは一応、この姿で俺と言うのは憚られる物があったからだ。

……話が通じる事に疑問が無いわけではない、しかし、悪魔や天使が母国語を喋ったとする話もある、それと一緒に言っている訳ではないが、つまり、考えても仕方ない事だと言う事だ。

そうして、声の主は、顔を上げ……絶句していた。

「な、お前、何かされたのか！ だ、大丈夫か？」

停止していた声の主は、目を煌々と赤色に煌めかせ慌てふためき始めた。忙しいものだ。

声の主、彼女の質問の意味は何となく分かる。丸裸の幼女が歩いていれば何事かと思うのは当然だろう。

「そうか、確かにそうだ、そうだな、それが普通だな、はははっ！」
「な、なんだ？ まさか頭に何かさされたのか！」

そう、心配するのが普通だ、真っ先に淫魔の類だと警戒する方が異常だ。ああ、随分と前の常識が染み付いてしまっている。

「……ああ、すまない、君は？ ……いや、こちらから名乗るべきか」「お、おう……お前、ヘン……だな？」

俺の名前、名前か、そのまま言うべきだろうか。

……いや、偽名で良いだろう、どうせ戸籍など無いだろうが、同姓同名の狩人の存在が居たなんて面倒な事にはしたくない。……未来か過去か、それとも別の世界か、俺はまだこの世界に生まれ落ちたばかりの幼子でしかない、身を守る為に、出来ることなら強かに、だ。

「……私の名は……アイゼン・バンカー」

「あ、あいぜん、ばんか？」

「……ああ、そうだ」

……途端、彼女の目が哀れみを含む物に変わった。

「……お前、いつ捨てられたんだ？」

「……？」

「……いや、名前って、言う時に色々、なんというか、思いが入るじゃねえか、でもよお……苗字も、名前も覚えてるのに、なんの思いもなく言ってるのが……なんか、気になっちゃったんだよ」

「……そうだな、私は、捨て子だ」

よく分からないが、話を合わせておく。

「やっぱりか、やっぱり、思いが全然動いてない……きつとお前は酷い目にあってきたんだな、だな！」

俺より背丈の高い彼女に頭を撫でられているが、何より感じるのは騙していると言う罪悪感である。

彼女の強い縄張り意識、仲間感覚、恐らく彼女は、捨て子、もしくは

は親亡き子が、そのままストリートチルドレンないしギャングへと変わった存在だろう。

彼女は隠し通したつもりだろうが、背中からナイフの柄が微かに見えている。

化け物に因るもの以外にも、戦争や疫病によりそうなってしまった子を何度も見た事がある、そして、目の前の彼女も、同じ目をしている。

「来い、わたし達の縄張りに案内してやる！」

「……ありがとう」

「あ、そうだ！ わたしの名前はな、ピーだ！ ここはピー様の縄張りなんだぞ！」

「宜しく、ピー」

「よろしくな！ バンカ！」

動き出そうとした時にはすっかり晴れ、赤色の空が広がり、地平まで埋め尽くしていた。

「おお、晴れたな！」

……茜色が彼女の風体を詳らかにしていた。

オレンジ色の長い髪、白めの肌、健全な身体と……茶色の目。

「行くこう！ 皆歓迎してくれるぞ！」

「ああ、その言葉、信じるよ」

「あ、その前にこれ、着ておけ！」

こちらの胸元へ差し出されたのはつぎはぎの外套だった、誰が作ったのかは分からないが、よく出来ている。

それを着込むのを見届けると、ハンドサインでこちらを招きながら走り出した。

彼女の足の速さにも驚いたが、それに楽々追いつける自身の速さにも内心驚いていた、恐らく、彼女も「同じ」、しかし目が赤いのはいよいよ関係しているのかしていないのか分からなくなって来た。

??

コンクリートの森を抜けると、潮風が頬を撫でた、海の近く……丘から見下ろした時、港の側にすらあの黒鉄の塔が屹立していたのが見えたのだ、問題は無いのだろう、しかし、周りの建物が廃墟同然である事には変わりはない。むしろ潮風による劣化が著しい分、こちらの方がより廃墟然としているかもしれない。

移動中、辺りに人の気配を感じなかったが、歩みを進めていくと、廃墟の内一つから強い揺らぎを感じる。

より強くなる存在感に少し神経質になりながらも、辿り着いた目の前にそびえ立つ腐った木の様な廃墟は見ているだけで不安を掻き立てるアシンメトリーさが強調された趣味の悪い芸術家のオブジェにも見えた。

「ここだ！ わたし達のねじろだぞ、だぞ！」

どこでそんな言葉を覚えるのか、そんな疑問もつゆ知らず、彼女はオレンジ色の髪を揺らしズカズカと廃墟に踏み込んでいく。

馬の尻尾の様に見えると言うのは失礼だろうか。

揺らぎを追いかければ、そこには数十人の女兒に絡まれているピーの姿があった。

「あ、またピーちゃんが女の子誑し込んでる〜」

いや、だから本当にどこでそんな事を習ったんだ。

彼女の言葉に反応したのか、真っ赤な何十もの光がこちらを照らす。

「いやー！ 違う、断じて違うぞー！ わたしにそんなしゅみは無いんだ！」

浮気のパレた配偶者の様な形相でこちらに話しかけたピー。

……そのまま数十人の拘束を無理くり解いて弁明を続ける彼女の瞳は真っ赤に輝いていた。

……まさか、目の光は制御出来るのか？

頭に引つかかっていた疑問の答えがこんな形で出てきた事に拍子抜けしない訳ではないが、それ以上に奇妙さと滑稽さに笑いがこみ上げる。

俺は微かに口許を緩める……彼女らがどんな目に遭ったのか、薄々想像をつけながら。

「……凄い尻尾」

「つのだ！ かっこいいー！」

「この羽すべすべ」

不味い、いつの間にか囲まれている。

俺は、子供の相手はロクにした事がない、それどころか苦手だ。……基本的に、化け物の歯牙に掛かるのは弱い存在、女子供だからだ。仕事の依頼も、妻や子供を失った夫や、村の村長からなどで、子供と言えば生きた子供より、死んだ子供を見た方が多いと言える程に。か弱い命は、狩人の手から真っ先に零れ落ちるものだ、化け物を狩るのが狩人の本分だとは言え、救えなかった存在と言う事から来る敬遠もあるのだろう。

「……少し離れて、くれないかな？」

「バンカが困ってるぞ、離れろ離れろ」

「わあ〜！」

一人一人丁寧に引き剥がす彼女の姿にはこの歳にして既に母性を感じさせる。先程までは一家の大黒柱の様な父性を持っていたが……不思議なものだ。

??

「え〜こほん！ それでは、改めて新入りの紹介だ！」

床に敷かれたマットに並んで座っている15人の子供達が真っ赤な目をキラキラ輝かせている。……心の昂りに合わせて輝きも増すのだろうか？ など益体もない事を考えながら口を開く。

「私の名は、アイゼン・バンカー、ピーがバンカと呼んでくれているので、バンカと、そう呼んで欲しい」

「……他に言いたい事はあるか？」

「……そうだな、この角と尻尾は少し尖っているから、触る時は注意して欲しい、それと、これからよろしく頼む」

ナチュラルに新入りとして扱われたが、どっちみちそれが現時点で最善の手だと感じていた為にそれについて何も言う事はなかった。

「……やっぱり、バンカはヘンな奴だな……」

「」「よろしく！ バンカ（お姉）ちゃん！」「」

……詳しい事は、明日聞くか……

安全を確信してしまった為か、途方もない疲労感に襲われた俺は、そのまま気絶する様に眠りこけてしまった。

明日に向かつて

初めて握った銃の名前は、コルト・シングル・アクション・アーミーだった。

この銃の通称は「平和の創造者ピースメーカー」、皮肉も良いところだ。

邪魔者を排他して平和を築こうとも、それは腐り掛けのリンゴから腐った部分を取り除いただけに過ぎない。

じきにまた、腐敗は始まる。

「ガストレア」

「呪われた子供たち」

それらを排し、仮初の平和を掴んだとすれば、次はきつとこの存在を排そうとするだろう。

「人間」

過ちを繰り返す前に、暗い熱狂を前に、彼らは足を止めねばならない、もう一度、周りを見渡さねばならない。

何故必要としたのか、何故そこにいるのか、何故……そうせざるを得なかったのか。

……心の中に潜む暗鬼を、撃ち抜かねばならない。

俺はやがて、この世界で、諦めかけていた夢に、また挑む決意をしたのだ。

??

……目を覚ませば、子供たちが肉の絨毯さながらに地面にコロコロ転がっていた。

「ふおお、もう食べられない」

「蹴らないでえ」

「尻尾のステークい、むにやむにや」

何故か背筋に悪寒が走る様な寝言が聞こえたが、今は無視しよう、子供とは未知が形になって歩いている様なものであるから、理解が困難を極める時もある。

身に付けていた武器の類がどこにあるか確認すると、子供たちから離れた場所にあるロッカーに全て納められていた。

……まだ暗い。

窓枠しか残っていない窓から、港の方を眺めてみる。

柔らかな黄色が、水面に溶け込み、街から放たれる鮮烈な光に連なり、光のグラデーションを映し出す。

海、と言うものはあまり経験が無い、新鮮な体験であった。

そして、街の方を眺めていると、次の瞬間、火の手が上がった。

「なっ……！」

更に背後からは揺らぎ、急ぎ振り向く。

「起きたのか、バンカ……ん？ 何かあったのか？」

そこには、多少着崩れ、昼とは違い、ややアダルトとも言える雰囲気纏ったピーが居た。

「……ピーか、いや、街の方で火の手が上がっててな、どうしたのか」と

「たぶんだけど、それはただの火事か……ガストレア騒ぎじゃないか？」

脳裏にあの大蜘蛛が過よぎる。

「ガスト……レア？ 何だ、それは？」

……態度とは裏腹に、得られた情報がひとりでに頭の中で結びつけられていく。

ピーは俺のいる窓際に並び立ち、乗り出した彼女の身体が窓枠の半分を占拠する。

「バンカは知らなかったのか？ ……ガストレアってのはだな……うーんと、簡単に言えば、人を襲う化け物だぞ」

「……なるほど」

「他にも知らない事があるなら、ピー様が教えてやるぞ！」

尊大な態度を取りつつ、柔和さを持った立ち振る舞い、張った胸に握り拳をポンと置いた目の前の彼女は、弱冠10歳の姿でありながら、その気遣いは大人の様でもあった。

「なら、まず、ちよつとした歴史から教えてもらおうかな」

「うぐつ……いきなり難しい所がきたぞ……」

「……私は、何も知らないからね、全く、本当に」

「……昔、ここは、日本って、呼ばれてたらしいんだぞ」

「日本、だと？」

「それで、丁度今から10年まえの、……2021年だったつけ、その年に、“ガストレア大戦” っるのが起きたらしいぞ、わたしはその時、産まれたんだぞ！」

「……と言う事は、今は2031年……」

……どうやら俺は、未来に来てしまった様だ。

俺が生まれた年は1885年、死んだのは、確か1950年だ。つまり俺はそこから更に81年後の世界に来てしまったと、そう言う事らしい。

頭を抱えなくなったが、狩人として、ある種の理不尽に対する耐性がついていたのが不幸中の幸いだった。

しかし、精神年齢が65歳の少女とは、流石にこちらとしては来るものがある。

「そのガストレア大戦の後、あのでっかいやつが出来たんだって」

「……材質……いや、何で出来てるのか、分かるかな」

「確か、バンカが持ってた杖と一緒にやつで出来てるはずだぞ？」

……やはり、化け物に対する特効を持った素材なのは確からしい。

「あの黒い金属を、ガストレアが嫌うならば、何故此処は廃墟だらけなんだ？ あの壁があるなら、ここも安全なんじゃないのか？」

「たしかに、嫌いらしいんだけど、絶対入ってこない訳じゃないんだ。だから、ここを含めた“外側に近い区域”を“外周区”って、呼んでるんだ、危ないから」

「……なら、何故君たちはここに居るんだ？」

その瞬間、彼女の顔がくしゃりと歪んだのがはっきり分かった、そうなるのである程度予想して投げかけた問いだが、予想よりも遥かに重い何かがあるようだ。

「……わたし達が、"呪われた子供たち"だから」

呪われた、と言う言葉を聞いた瞬間、呪術的な代物かと思ったが、どうやら違うらしい。

「わたし達は……ちよつとだけ、"ガストレア"^{化物}なんだってさ、ちよつとだけ」

暗いトーンへと変わった声、隣の彼女を見ると、目が赤く輝いていた。

「すまない」

「何であやまる必要があるのさ？」

「……そうだな」

「あ、そうだ！ 新入りになったからには仕事してもらうからな！

早く寝て早く起きなきゃいけないんだぞ！ だぞ！ だから早く寝ろ！」

先程の非礼を詫びる代わりに、敬礼を交え、彼女に向けて呟いた。

「…… Yes, Ma'am」

「ん？ 今何て……」

俺は先に肉の絨毯へ戻り、隙間を探して眠りに着いた。……子供たちに足蹴にされつつも。

??

朝、目に染みる暖かな日差しを受け、俺たちは物を漁りに出た。

……経験はある、死体の中に入った指輪を探し出して欲しいという様な依頼でモルグに乗り込んで漁りに漁った苦い記憶を思い出した。

これの救いはまだただのゴミを漁っているだけと言う精神的なハードルの低さだ。

幾つか使えそうなスクラップや、アルミなどの再利用可能な資源を集め、それを買い取る業者に売り払うとピーから教えられたが、こういった光景は戦場跡でも見られた光景だ。兵士の遺品をかき集め、売り払う、何をするかはすぐ把握出来た。

人を殺さないだけ遥かに善良だ、恐らく、呪われた子供たちが、あ

のガストレアと言う化け物の力の一端を行使出来るならば、素手であつても十全に只人ならば殺し尽くせるだろう。

それをしないのはそこまで追い詰められていないからか、それとも、端からそんな考えが無いからか、後者であれば、善良さが報われないとしか言いようがない、それこそ、神に見放されたとも言える程に。

そんな事を考えながらも、他の子供たちと一緒にゴミ拾いに精を出している、後ろから声をかけられた。

……犬のような耳をピヨコンと立てながら。

「わくいっぱい！」

「えっと、君は？」

「わたし？ わたしはね、ライカだよ？」

何とも言えない不思議なオーラを纏う藍色の髪の少女がゴミ袋を覗き込んでいた、彼女の肩には既に満杯のゴミ袋が2つ、背負われている。

「その量、どうやって……」

「えへへ〜わたしは、ワンちゃんの"いんし"をもってるから〜はながすつごくいいんだよ〜」

「い、因子？」

「あ、えつとね〜"いんし"っていうのはね〜あかじめのこたちがみんなもってるもので、たとえば、イルカさんのいんしをもっていると、あたまがすつごくよくなるんだって〜」

……なるほど、因子、それによつて呪われた子供たち同士でも発揮できる力が変わってくるのか。

「バンカおねえちゃんは"つ"があるから〜うしさんかな〜？ それとも、"はね"があるから〜とりさんかな〜？ あ、"しつぽ"があるから〜もしかして〜とかげさんかな〜？」

因子の影響は外見にも現れる、と言う事か、しかし、ピーはそこまです目立った部位はなかったな、何の因子だろうか。

強化された鋭敏な聴覚が、ピーの呼び声を捉える。

「休憩の時間だぞ〜！ 全員集合〜！」

……おつと、もうそろそろ集合時間か。

「ライカ、そろそろ戻ろう、皆が待ってる」

「うん！ いこいこ〜」

??

「「「いただきます！」」」

根城にて、俺とピーも含めて17人の子供が一堂に会し、缶詰やパンの耳といった食事を楽しげに食べている。空腹は最高のスパイスだかソースだかと言うが、何より、誰かと一緒に食べる食事と言うのが最高の調味料なのかもしれない、かくいう俺も、こんな体験は久しぶりだったのだ、年甲斐もなく笑ってしまいそうになる程には。

「おいしいね〜！」

口に食べかすをたんまり付けたライカがこちらに微笑む。犬食いでもしたのかと疑いたくなかったが、まずは手元にあったタオルを手に取り。

「ほら、口元に色々ついてるから、じつとするんだ」

「むぐぐ〜くすぐりたい〜」

俺は、兄弟も居なかったし、伴侶を持たず、子供も居なかった、が、もし居たのなら、こんな光景もあったのだろうか。

……昼飯の時間を終え、また数時間ゴミ拾いをして、今日の仕事は終わった。

??

皆が寝静まる夜、昨日の様にピーと二人窓際に並び、言葉を交わす。

「今日は何を教えて欲しいんだ？」

「呪われた子供たちについて、教えて欲しい、知ってる事全部」

「……分かった、その代わり、明日も頑張って働くんだぞ？」 『働かざるもの食うべからず』って言うしな」

……流石にこの子供たちを率いているだけあり、リーダーとしての強かさも持っている様だ。

「外で話をするぞ」

??

崩れかけの波止場に腰掛け、暫くの沈黙が続いていた。波の音が二人の間に流れる中、話を切り出したのは俺だった。

「……呪われた子供たちがガストレアの力に並ぶ力を使えるのは分かった、なら、その子供たちはどうやって産まれたんだ？」

「ガストレア大戦の話を前にしただろ？ その時、わたし達は、お母さんのお腹の中で、ガストレアウイルスって言うのにかかって産まれて来たらしいんだ。そうして産まれた子供は皆女の子になるんだぞ、ふしぎな話だろ？」

ウイルス……晩年、そんな言葉を聞いた事がある気がする、確か、病気にまつわる用語だった筈だ。

……母体に病気が感染し、奇形児が産まれると言うのは聞いた事がある、しかし、特異な能力を齎すと言うのは聞いた覚えがない。

どちらかと言えば、怪物が人の子を孕み、特殊な力を持って生まれてくると言った事件の方が多かった。

が、概ね、生まれた子は化け物と扱われた訳だが。他の狩人がどうだったかは知らないが、俺は少なくともこういった依頼には手を出していない。

生まれる種が固定化されると言うのも、怪物と人との間に生まれた存在には良く見られた事例だ。

「そのガストレアウイルスに感染した母親から生まれたのが、私達、呪われた子供たち、か」

「……そう、それで、ガストレアの力を持ってるわたし達を見て、普通の人は」

「……差別したという事が、こんな所に追いやる程に」

「捨てられて、追いかけて、逃げられて。わたし達が、たくさんの

人を殺したガストレアと同じウイルスを持つてるからって……
なるほど、話が見えて来た。

「……私は、それと同じ事を知っている」
「……え？」

「昔、国同士の争いがあった、大きな争いが。その争いによって色んな人が傷ついた。ピー、その後、どうなったと思う？」

「えっ？ えーつと、傷つけられた人が怒った？」

「そう、傷つけられた人達は怒った訳だ、相手の国が許せないってね、当然、その目は、その国に住んでいる人にも向けられた」

「それで、ど、どうなったんだ？」

「お互いに激しく差別したんだよ、相手の国に住んでる人が自分の国に居たら追い払って、閉じ込めて、そして……殺して……これを、人とガストレア、そして子供たちとの関係に当て嵌めれば……」

ピーの顔は真つ青になっていた、夜の藍よりも青く。恐らく、彼女もそこまでの経験はしていないのだろう、それを考えれば、ここに居る子供たちは幾分か幸運なのかもしれない。

「そうして生まれた連鎖は止まらない、きつと、どちらかが滅ぶまで……でも、そうはならなかったんだよ、結局、私が知る限り、人は滅ばなかった。二度の大戦を経ても尚、ね」

「……ど、どうして、どうしてなんだ？」

「銀の弾丸って、知っているかい？」

「……聞いた事あるぞ、何だったかは分からないけど」

「銀の弾丸と言うのはね、魔物を一撃で撃ち抜く、魔法の様な弾さ」

「魔物？」

「魔物……まあ、化け物みたいなものだよ、これは形のあるものも居れば形のないものも居るんだ、当然、心の中にも」

「心の、なか？」

「一人一人の心の中には化け物が居るんだ、だから、そいつと、どうにか向き合っていかなくちやならない、でも、本当にどうしようもなく

その化け物が暴れ出した時、その化け物を打ち倒すのが銀の弾丸さ、まあ、私個人の考えだけだね」

俺は横で尻尾を指人形のようにバタバタ動かし、指でピストルの形を作り、『バン！』と銃声を口で再現し、ボタンと尻尾を倒す。

「その銀の弾丸はどこにあるんだ？」

「……分からない、結局、私も分からずじまいだった」

「ほ、本当に分からないのか？」

「……分かる事はある。例えば、銀の弾丸は誰にだってなれる、とか」「本当なのか！」

「少なくとも、勇敢な人々が銀の弾丸として、心の化け物に立ち向かったのは知っている」

かつて、俺の心の化け物を、撃ち抜いてくれた友人を俺は知っている。

「……でも、わたし達がそんな事……」

「そう、難しい、結局、それでどうにかならなかったからその戦いは二度も起きたんだ。でも……」

話している内にどんどんこの世界とあの世界が結びついていく。

ガストレア"大戦"によって産まれた呪われた子供たち。同じくこちらの世界"大戦"の際に産まれた子供たちを知ってる、人の死に集る穢れに呼ばれた化け物を狩るため、俺は戦時中も各国を渡り歩いた。そうして知った事も数えきれない程にある。

例えば……レーベンスボルン、ドイツの収容所に対し、特定の血を増やす為の施設。

そうして増やす為にもうけられた子は、戦後、親の世代の戦争犯罪を理由に差別されたと聞く。

自身の生まれという当人にはどうしようもない理由で差別と迫害を受ける構図、また、どちらも戦争の際の憎しみが絡んでいるというのも同じだ。

当然ながら、これ以外にも同じ様な差別、迫害を何度も見てきた。

表の世界でも、裏の世界でも。まったく、この世はどうかしている。

だが、だからこそ、夢を見たいのではないか。本当の平和などと言う、甘い夢を。

「次は、絶対に避けられる、人は、過ちを繰り返す生き物だけれど、ふとした拍子に過ちに気付く生き物でもある、一人だけじゃ無理だ、皆が銀の弾丸になれば、きつと、そのきつかけを、差別と言う歪み、化け物を撃ち抜ける筈さ」

「……そっか、誰かが、じゃなくて、皆が、銀の弾丸になれば……」
しかし、これはあくまで理想だ。

確かに、呪われた子供たちがこの様な境遇を受けているのは差別した人間達と、その差別を見過ごしている世間の影響もあるだろう、しかし、落ちた子供たちがストリートチルドレンやギャングになつてしまえば、更に子供たちの立場は悪くなるばかりだ。

例え、そこに身を落とした原因が世間にあつてもだ。

ある人間が周りからの拒絶でヤケクソになったり、道を踏み外したりして、更に評判を落としてしまう、と言う風に。

子供たちを救うには、差別を減らす為に世間の意識改革、更に、落ちてしまった子供たちや、細々と生きる子供たちへの意識改革と支援を同時に行わなければならない。

並大抵ではない、だから、とりあえず俺は今、この子供たちの心の化け物を撃ち抜く銀の弾丸になろう、世間の中に居る化け物を撃ち抜く銀の弾丸に後を繋ぐ為に。

「今日の昼ごはん、どこから取ってきたんだい？」

「……！」

「……言えないんだね？」

「……仕方がない、そうじゃないか！ 仕方がないだ！ 誰も！ 誰も

助けてくれなかった！ だから自分で頑張らないといけなかったんだ！」

「確かにそうだ、その通りだ、なんの知識も与えられず、ひたすらに追い詰められた君達は、確かに"被害者"だ。だが、そのまま行けば……いつか"加害者"だ」

「ッ……！ なら、どうすれば良いんだよ！」

立ち上がる彼女、たった数秒が何分にも感じられる程の深い沈黙。

「自給自足で……畑を作ろう」

「は、畑？」

気の抜けた声が波間にこだまする。

「自分で物を作る様になれば、もう手を汚す必要もなくなる」

「そりやそうだけど……そんな知識、わたし達には無いし……」

「安心してくれ、大体の事は私が知っている。……お金は、どれくらい持っているんだ？」

「……もしもの為に、結構蓄えてはいるが……」

「流石リーダーだ。そのいくらかを貸してくれないか？ 返す時は結果で返す」

「……むううん！ 分かった！ バンカ、お前を信じる！」

「よし、兵は神速を貴ぶと言うやつだ、明日、買い物に行こう」

「……ってまさか、"内地"の方に行くのか？」

「内地？」

「外周区より中心に近い所だぞ、人が多い、だから危険な買い物になるぞ」

「……確かに、人が多ければ、その分子供たちへの差別に遭遇しやすくなる、とすると、この姿では間違いなく一瞬でバレてしまうな……」

「そうだぞ、その見た目をどうにかしないと……特に角と尻尾はまずいぞ」

「だが、他の者を出すわけにも……」

「あ、そうだ！ わたしにいい考えがあるぞ！」

「どんな秘策だ？」

こちらの耳に口を近付けると、他に誰がいる訳でもなしにひそひそ話の様にこちらに伝える。

「(ぎ)に(よ)ぎ(に)よ……(ぎ)に(よ)ぎ(に)よ」

「いや……本当に大丈夫なのか、それは？」

聞けば自信満々にサムズアップ、もう既にやる気しかないようだ、心強いやら不安なのやら……ともかく、『内地で買い物大作戦』を前に、作戦会議を済ませた俺達は、明日に備えて眠るのであった。

……他の子供たちに足蹴にされながら。

失敗の中にある糸

——2031年 東京エリア

……遙々内地の何でも置いてあると言うホームセンターとやらに土や植木、種を買いに来た俺とピーは、街中でやや悪目立ちしていた。人目を避ける為、開店直後のホームセンターに行く為に結構な早朝から出てきたが、都市部という事もあり、人が多い。

それら市民の視線の先にはつぎはぎのローブを着て茶色の杖を携えた人影、中身はと言えば……

「ピー？　これで本当に大丈夫なのか？　いくら他に手は無いとは言え、ピーまで付いてくる必要はなかったんだ、リーダーを失った組織はすぐに立ち行かなくなるぞ」

「……これはわたしが認めた話だけど、皆に許してもらったわけじゃない、だから、認めたわたしが行かなきゃダメなんだぞ、そこは誰にも譲れないし譲らない、責任はわたしが持つぞ」

「……ありがとう、付き合ってくれて」

「ふっふっふ、お互い様だぞ？」

下には俺、その上にはピーがそのまま俺の肩に立っている、全体の重心は尻尾で調整し、上の彼女の足は羽と角をガムテープで固定している。他にも、バランスを保つ為の杖代わりにガムテープを巻いた黒い杭を使っている。

……一見すると杖をついた老人に見える為、声をどうにかする必要があったが、ピーは「声真似」が達者であり、間近で聞く俺ですらよく聞こうとしなければ間違えてしまう程、その老人の声真似は堂に入っていた。

俺はローブの下に開けた小さな覗き穴から街並みを見渡していた、歩く為ではあるが、東京という街の眺めにそれを忘れかける時も何度かあった。

遙か頭上にそびえ立つ摩天楼はかのバベルの塔を想起させるそれ

は、思わず畏怖すら感じてしまう程であった。街中を駆ける車の色鮮やかさに目を奪われたり、街行く人は皆思い思いの服を着て外出を楽しんでいる様子に足を止める事もあった。

……俺が死んだのは戦争が終わって5年後、もしかすればこの光景は、俺の都合の良い夢幻かとも思ったが、その裏にある呪われた子供たち、ガストレアという過酷な現実が間違いなく都合の良い幻想の類でない事を証明する。

俺が死んだ後の世界なのか、それとも別の世界なのか、それは結局分かってはいない、ただ、この世界は紛れもない現実だ。

ならば、生き足掻いてみせよう、そう心に言伝し、再び歩き出す。

??

「……………だが、ホームセンター!」

「……………わたしも初めて中を見たぞ」

幸いにもホームセンターにドレスコードは無く、すんなりと入れた。

しかし、初めて見た見たホームセンターは宝の山のように見えた。

「お、おお! これは一体何だ、教えてくれ!」

「これはだな、羽無し旋風機だ、羽が無いのに風が吹く、不思議な奴だぞ」

「これは? これは何なんだ?」

「これはお掃除ロボットだぞ、家に置いておくだけで勝手に掃除してくれるんだぞ」

??

「このプロペラを四つ備えた機械は?」

「ドローンだぞ……………自由に空を飛ぶぞ……………」

「これは! この水を高速で発射する装置は!」

「高圧洗浄機、水出す奴だぞ……………」

「おおおおおッ！ 素晴らしい！」

あらゆる道具が所狭しと並べられているのを見た俺の心の中の少年が暴れ出しそうになるのを抑えるのに必死だった。俺の鋼の精神力を評価したい所だ。

ちなみに、1階から5階まで見回ったが、特に高圧洗浄機、と呼ばれていた物がお気に入りだ。文字は相変わらず読めなかったのでピーに翻訳してもらったが。

買い物も特段大きなトラブル無く完遂し、俺は大きな袋2つをほくほく顔で店を後にした。

「ふう……とても良い、ホームセンターは良い所だな、少なくともそんなじよそこらの博物館を見るよりも価値がある、入場料を取っても良いのではないか？」

「いや……それじゃあ商売にならないんじゃないか？ それに……いつもより何倍も疲れた気がするぞ……主にバンカのせいだ」

??

買い物を終えた俺達は元来た道を辿り、根城へと戻ろうとしていた。

帰るまでが買い物、より一層気を引き締めながら歩く。

だが……妙に人が少ないな、遠くでサイレンの音も聞こえる。何かあったのだろうか？

そこで住宅地の辻に差し掛かった所、家の影から揺らぎを感じ、足を止める。

「なあ、そこにあんた、道を聞きたいんだが……」

「ん、なんだ？ 困りごとか？」

「いや待て、貴方は……」

声に釣り上げられるように現れたのは………血みどろのシャツを来た恰幅の良い男性だった。

「ッ！ まさか、その傷……」

ピーの方が答えに辿り着いたようだが、俺にも異常は理解出来ていた。

明らかな多量の出血。

シャツに刻まれた傷と血の流れ方から恐らくは彼の血だろう。

しかし……確かな足取り。

これは彼の容態に対し、明らかに矛盾している。おまけに瞳の揺らめきはなく、意識がある程度はつきりしているのは彼の淀み無い言葉の節々から明らかであった。

「……何が、あつたんだ？ いや、"何に"襲われたんだ？」

すると次の瞬間、男が頭を抱え、蹲ったのだ。

先程まで見られなかった身体の震え、そこには明らかな怯懦が存在していた。

「ああ、ああ！ そうだ！ ベランダに居た時、上からガストレアが降ってきて襲われて……それで、死にたくなくて必死に逃げて……」

「……手遅れ、だぞ」

「……ああああ、あ、あ、あ、あ、あ、あ！」

蹲った男は、目を真っ赤に煌めかせ、まるでサナギの様に、そのまま背中を蠢動させたかと思えば。

バシユ！

水風船の様に破裂した彼の体から、質量を無視するかの様な極太の危険色を纏った肉柱が4対、飛び出したのだ。

……ガストレアに襲われた人間はガストレアに……なるほど、"感染"する訳だ。しかし、生まれながらに感染した筈の子供たちが即座にガストレアになっている訳ではないと言う事はつまり、彼女らは、このガストレアウイルスに対し、"耐性"の様な物を持っているのだろう。

目の前で刻一刻と膨らみ始めた大蜘蛛。

「逃げッ?!」

ピーが逃げるべきだと判断したであろう瞬間、俺は左へ大きくステップを踏み、その巨大な口から放たれた銀の粘り気のある糸を回避する。

やはり、前の物とサイズは違うが、能力は一緒だ、ならば、「狩れる」。

ここは住宅地、こいつを放置すればより被害が広まる。やるならば、迅速に。

「ピー、荷物を持って根城まで逃げてくれ」

「置いていける訳ない！ここは一緒に逃げるべきだぞ！」

「いやダメだ、今、誰かに危害を加えるガスト^化レ^物アを、みすみす見逃せるものか」

「…………でも！」

「大丈夫だ、絶対に戻る、必ず帰る」

「……………ああ分かった！必ず帰って来い！絶対に絶対だぞ！お前が居ないと誰も畑作れないんだからな！」

彼女はガムテープを引きちぎり、杖とローブを脱ぎ捨て走り去っていく、しかし、律儀に待つ程大蜘蛛は暇ではなかった様で、民家の外周を囲む石垣を優に超える体躯でありながら、そこからは想像も出来ない程の瞬発力でなぎ払いが放たれる。

「…………疾いな」

何とか子供たちの力を使う事で回避し、やっとそこに初めて均衡が生まれた。

この辻に残るは俺とガスト^レアのみ。お互いに睨み合い、次の手を出したのは俺だった。

まず俺は無用の長物と化した大人用のローブを大蜘蛛の面へと投

げつける。

短くしたベルトポーチに吊り下げられた光沢が露わになる。"もしも"の為に持っていたシングルアクション^Sアーミー^Aだ。自身が想定していた"もしも"とはかけ離れた事態だが、都合が良い。

腰から右手で引き抜き、撃鉄の上に左手を添え、前と同じように前足二本を狙い撃つ。

しかし……破断出来るかと思えた足はサイズの違いからかまだ繋がったままだ。

あの大きさと、しかも穴の空いた足で自重を支えられると言う事はつまり、かなりの密度の筋肉、骨を有していると言う事だ、殴られればひとたまりもない。ならばと杖代わりに使っていた杭を左手で握り、距離を詰めるが……

……それは、次の瞬間、大蜘蛛は宙を舞っていた。

「あの巨体で……だと」

笑う様に口を開いた上空の大蜘蛛は、次の瞬間、こちらに浴びせる様に糸を吐いた。

咄嗟に身を退こうとするが、足が動かない。よく見れば……足が地面に埋まっていた。

俺はまだこの世界で僅かしか、子供たちとしての力を使っていない、それ故に、大蜘蛛の懐に飛び込む為に力強く踏み込んだ足が地面を貫くなど、想定していなかった。

この一瞬、されど一瞬により、俺は身体中を粘着質の糸に拘束されてしまった。

重力に従い、上空数ヤードの高さから数千ポンドはあろうかと言う質量爆弾が今、この数フィート、数百ポンド程の我が身に降りかかるうとしている。

「……まだ手はある」

俺は何とか右手に握るSAAを空に向け、杖で撃鉄を下ろし、奴の

ちぎれかけの足を目掛けて更に2発、撃ち抜いた。空中で大量の毛に覆われた足を切り離されたにより体勢を崩した大蜘蛛の身体は俺の身体を逸れ、落下した。

しかし、糸は予想以上に粘り強く、まだ剥がせない。
……ならば仕方あるまい。

糸が硬く結びついた服を、靴を脱ぐ。脱ぎやすいワンピースとスニーカータイプであった事が幸いし、直ぐに生まれたままの姿になりながら拘束を解き、素早く後退する事が出来た。

足を失った大蜘蛛はその瞳に、敵^俺を映していた。

頭の片隅で、人間からも、ガストレアからもはみ出した存在、それこそが呪われた子供たちなのではないか、と言う考えが過るが……

「モデルスパイダー、ステージIを確認！ これより交戦に入る！」

次の瞬間、大蜘蛛がこちらとは反対の方へ振り返る。

《left》バン！ 《left》

バン！

バン！

三発の爆裂音が鼓膜を揺らし、次の瞬間、大蜘蛛は紫色の血を傷口から吐き出していた。

「何しやがるー！」

「ガストレアに通常の弾は効果ねえんだよ！ 興奮させるだけだ！」

壮年からやや年を経た様な男の声、そして若い青年の様な声が響いた後、さらに三発の爆裂音が続く様に迸った。それに合わせ、大蜘蛛の大柄の身体も悲鳴と共に揺れ動いた。

「効いている………黒い弾丸、……バラニウム！」

低い男の声が銃声の合間を抜け、俺の鼓膜を叩く。

「ああ、ガストレアの再生を阻害する金属だ！」

揉めているのかいないのか、どっちつかずのまま、彼らの会話が続く。

「こいつはステージI単因子、ハエトリグモのガストレアだ！」

更に五発の爆裂音が響くと、唐突にその音の連なりは途切れてしまった。

「……弾切れか」

それはそうだ、彼らの興味深い話に耳を傾けている場合ではなかった。彼らの弾切れを察し、大蜘蛛のケツに向け残りの二発、弾倉全てを撃ち尽くした。ベルトポーチは服と一緒に糸に捕らえられたまま、なのでこれ以上は撃てない。

「……まさか、そつちにも同業者が居るのか！」

日本の車両に合わせて作られたのであろう狭い狭い住宅地の道では、大蜘蛛程の凶体であっても、視界を塞ぐには十分だったようだ。

しかし、器用に身体を反転させた大蜘蛛は今度はこちらへ向け、攻撃しようとする。

「……傷が再生していない、やっぱりバラニウム弾か！」

今度は彼らが大蜘蛛のケツを眺めている様だ。益体もない事を考えながら、杖を構えると、今度は俺の背後から穢れのない、無垢な声が聞こえてきた。

「はああああッ！」

力強い叫びと共に放たれた少女の蹴りは、切れ味鋭く大蜘蛛が振り上げた残りの前足を破断してみせた。

間違いなく、彼女も呪われた子供たちだと確信を抱きながらも、両手に携えた杖を大蜘蛛の下顎から上顎にかけて貫通させ、ボルトを締め上げる様に左側へ締め上げる。

「ふんぬううう、オラッ！」

「あの時」よりも何倍もの力をかけ、「あの時」の様に首を寸断する。紫色の体液が身体からドクドクと溢れ出していた。

実績のある殺し方と言うのにはあやかりたいものだ。

巨体が斃れ、一先ずの静謐が訪れ、まず先に動いたのは彼らだった。大蜘蛛を回り込み、やって来た男二人がこちらを目にするやいなや、

「何で裸なんだ!?!」

驚く程びつたりと重なった声に、思わず笑ってしまう。

「いや、すまない、確かに破廉恥だったな」

すっかり乾いていた糸を砕き、服を着る。服はピーがくれたが、流石に下着まではなかったもので、下は何も履いていない。……と言うか今まで自分が女だと言う自覚すらまともに無かった事に気付いた。

顔を真っ赤にしてあたふたする青年と、無言で背中を見せる大男、人生経験の差を感じる構図だ。

「蓮太郎！ 妾を置いていっただけでなく、他の女の子に何をうつつを抜かしておるのだ！ 妾と誓い合った永遠の愛はどうしたのだ！」

「いや誓ってねえからな……」

と思えば次には黒いスーツの青年はオレンジ色の髪の少女に抱きつかれていた。忙しいものだ。

そんな二人へ二つの視線、俺と厳つい顔の男、二人の視線だ。その視線に気付いたのか、少女はこちらへ顔だけ向けつつ口を開いた。

「ふふん、妾は蓮太郎の「イニシエーター」もとい、相棒、藍原延珠あいはらえんじゆだ！」

「……しつかし、トドメを刺したのはお前なんだよな……報酬ゼロ……木更さんにドヤされるよなあ」

ズドンと肩を落とす青年、何とも不幸そうと言うか何とというか、幸が薄い顔をしている。いや、そこまで思い詰める事なのか？ 俺も時と場合によっては狩りの成果が無かった事も多かったが、雑草を食っ

て凌いでたぞ。

「雑草を食べれば良い」

「流石にそこまで極限状態じゃないからな？」

蓮太郎に抱きついていた延珠が思い出した様に言葉を発す。

「そうだ、もやし！ 蓮太郎！ タイムセールの時間だ！」

「あつ！ 不味い……急がないと間に合わない！」

青年と少女は急ぎ走り出した。

「おい、どうしたんだ？」

「タイムセールでもやしが一袋6円なんだよ！」

そう言い残し、二人は去っていった。……何故あそこまで気迫迫る顔をしていたのだろうか。タイムセールとは一体。

「……それでは私もこれで」

「待ちな、嬢ちゃん」

「……何でしょうか」

「アンタはイニシエーターか？」

……不味いな、イニシエーターとは何だ、分からない。

「そう言う貴方はどなたですか？」

「質問を質問で返すな……俺は刑事だ、ただしましげとく多田島茂徳、警視庁捜査一課所属」

……よりによって警察組織の人間か……尚更この獲物を晒したのは不味いな。

「で？ プロモーターはどこだ？ 報酬を渡す必要がある、早く教えてくれ」

また新しい言葉が出てきた……プロモーター、イニシエーターと関係があるのか。

どうする、逃げるか、いや、逃げれば怪しまれるし、最悪追われたら根城がバレる可能性もある。

……俺だけでどうにか出来る方法は無いのだろうか。

多田島刑事の強面の顔がより一層険しさを増す。

「……まさか、無免許か？」

ああ、成る程……銃は免許制と来たか、こりや傑作だ、無免許のガキが街中で銃をぶつ放したって事か……言い逃れ出来んな、下手に逃げれば、ピー達まで一緒に一緒にしよつ引かれる可能性もある……まあ、狩人には諦めも肝心だ。

「お手上げですね……そう、私は許可なしに銃をぶつ放した犯罪者です、どうぞ、逮捕してください」

「随分素直だな……仲間でも居るのか？」

鋭い眼光が俺の姿を貫く、が、同情や憐憫も混じってるのが分かる、彼は少なくとも、ただ呪われた子供たちを排斥する側の人間ではない。彼は異端なのだろうか。

「いいえ、今日が年貢の納め時かと。悪事を成した者を神は見ているものでしょう？」

「はあ……お前の態度に免じてそれ以上の追及は避けてやるが、無免許の筈のお前がどんな経緯でバラニウム製の武器を手に入れたのか、それには答えてもらうぞ。さあ、署まで同行してもらおうか、まずは事情聴取だ」

「……ところで……」

「ああ？」

「プロモーターと、イニシエーターとは、何なのでしょう？」

「ああ……それも向こうで話してやる」

サイレンが近付いて来る。

白黒のボディに真っ赤なランプ、あれが警察の車両か、この世界の車に乗ってみたかったのは確かだが、まさか初乗車が連行される時だとは思っていなかったが。

パトカーと呼ばれている車に運ばれている途中、袋を片手に歩いていた蓮太郎達が見えたので手錠のかけられた手を振っておいた。袋を落とし彼らは唾然としていたが、その姿が少々愉快であった。

………我ながら、妙な所が悪戯な子供の感性に戻ってしまったよ
うだ。

いや、冗談はそこまでにして、目的は他にある。俺よりも彼らの方

が当然、この世界について深い知識を有している筈だ、つまり。

……多田島君と、蓮太郎君に藍原君。

……直感が囁いたのだ、彼らとの繋がりを作るべきだと。

窓の外に流れる東京の街並みを目に焼き付けている俺を乗せて、パトカーは走り続けた。

首輪付き

俺が初めて銃を手にとったのは五歳の頃だった。

始めはよく肩を外していたが、八歳になる頃には十全に獲物として扱える様になっていた。

十歳になる頃には、聖水、塩、それ以外にも銀の剣や、杭、更にはダイナマイトまで使う様になっていた。そうなったのにも理由はあ
る。

……狩人として大事な事は幾つかあるが、その中から二つ、"適応力"と"応用力"。道具を十全に扱う為の適応力、十全に扱えてもマニュアル通りでは成長が無い、だからこそ応用力も必要だと、若い頃の俺はそう解釈していた。

そうして、俺はその訓練と狩りに明け暮れた。

……若い頃の俺の前に、武器と化け物があれば、迷いなく武器を化け物に振るっていただろう。積み上げた物を無にしたくなくて。

今は違う、それは滅びの突撃に他ならないからだ。それは、積み上げた物を"可能性"として、"燃料"として使うのではなく、己の"枷"として自分を縛り上げている事に他ならないからだ。

武器は結局のところ、道具ではない。

化け物は結局のところ、地球という枠組みの中に組み込まれた一生命ではない。

大事なのは、"状況を理解"するという適応力と、"どうやって"道具を使うのかと言う応用力だ、武器も化け物も、まずそこを通してから見ないといけない。

何故、武器を使う？ 何故、化け物を殺す？ 思考を停止させるな。

何故、子供たちは生まれた？ 何故、ガストレアは出現した？ 常識で止まるな、非常識でも良い、積み上げた物の可能性を、燃料を燃やし尽くして、突き抜ける。

??

……俺は今、冷たい冷たい留置所で絶対零度の視線を浴びせられている所だ、おまけに留置所は"子供用"、いや、別に遊具が置いてある訳じゃない、"呪われた子供用"の留置所なのだから。

何故留置所に居るかと言うと、入る前に採血されたのだが、採血の結果が出るまでは事情聴取出来ないと言われたのだ、どうやらガストレアになる確率が高いか低いか、それを調べる為の時間なので、流石に待つべきだと判断したが。後、俺が持っていた"彼ら"の装備品を調べる為の時間でもあるらしい。

しかも、嚴重にも、鉄格子の前に網状の電気柵が張られている、クラグの因子でもあればどうにかなるのだろうか、おかげでマトモに動けず、隙間から見える景色に代わり映えも無く、一分入っただけで飽きが来た。

そう言えば、俺が警察署に来た時、入り口に立つ警官が多田島君に敬礼していたのだが、多田島刑事の後ろをついて行く俺を見たその警官が、俺の事を親の仇でも見るような目で睨んできたのだ、レストラのウエイターなら即座に厨房のブラシ係行きだ。もしかすれば、本当に仇の血が入っているのかもしれないが。

「笑えんジョークだ………あぁ、その警官君、話をしようじゃないか、君だって、牢屋の中にいる少女を監視して退屈しない程歪んだ性癖は持っていないだろう?」

「何だ貴様は! 大人しくしている!」

「仕事に真面目に取り組むのも良いが、たまには息抜きをしても良いだろう?」

「……赤目風情が、調子に乗ってられるのも今の内だぞ!」

「赤目、それはひよっとして"子供たち"の差別的表現かい? それともいちいち呪われた子供たちと言うのが面倒だから短縮したのかい?」

「……………」

「おお、そんな! 無視をしないでくれ! 喋らない看守の居る牢獄なんてツマミの無いビール、いや、アルコールの入っていないビールと同じじゃないか!」

「……………何故子供の癖にビールで例えた!？」

「おお、予想以上のツツコミだ、君と私でコメディアンにでもならないか? きつと東京のスターダムに駆け上げられるぞ、コンビ名はどうする?」

「誰がなるものか!」

よし、こちらのペースへ持つて行けた。

俺に狩りを教えてくれた師匠の教えだ。

『いいか? 化け物を狩ると言うのは、獣を狩るのは訳が違う、時に知性と知性がぶつかり合う時も当然ある、狩りとは名ばかりの戦いだ。だからこそ、危機的状況においては、饒舌になれ。頭を働かせ続ける為にな』

悪戯クソジイの名を欲しいままにした晩年の俺のスキルだ、この頃の俺を友人が見れば『変わったな』と笑ってくれていただろうか。

「……………とまあ、冗談はここまでにしておいて、本題に入ろう。……………君は何故、呪われた子供たちを恨む?」

「……………何故、分かった風な口を聞く?」

「いや、この警察署に入る前に警官に散々睨まれてね、君も同じ目をしてたよ……………そう言えば、女性は男性が胸元を見ているのが視線で分かっちゃもうらしいね、それと同じ……………」

「貴様はいちいち余計な事を挟まねば気がすまないのか! ………………」

確かに、俺は貴様ら赤目に憎しみがある事を否定はしない……………」

「それは、子供たちがガストレアウイルスを持っているからかい?」

「……………ああ、そうさ、俺は両親も、妹もガストレアに殺された、住む家も無くした。ガストレアが、憎い……………ガストレアの全てが! ……なのに、何故子供たちが"モノリス"の中にいる事を許されているのか、訳が分からない!」

モノリス……………あの巨大な黒鉄の塔の事か。多分あれもバラニウム製だろう。

「……………なるほど、確かにそれは恨み言の一つも言いたくなるな、でも、

どれだけ君が呪詛を放った所で、子供たちは居なくならないさ」

「何故、そう言い切れる？　子供たちがガストレアへの武器になるからか？」

「それもあるけど……やっぱり、「健康的」で、「可愛くて」、「綺麗だから」じゃないかね」

「……は？」

「私が今まで見てきた」子供たち」は皆、美形だった、ストリートチルドレンを始めとした悪環境の子供たちと言うと、栄養失調なんかを起こして全体的に体のバランスを物理的に崩すものだが、皆健康体だ、ガストレアウイルスには、恐らく、身体を健康に保つ働きもあるようだ……これが知れ渡れば世の女性の内1割弱ぐらいは賭けでガストレアウイルスを取り込むかも知れないな」

「……何を馬鹿な事を」

「健康も美しさも可愛さも、それ程に必要とされているって事だ、いつの世も。だからこそ、健康で美しく可愛い」子供たち」は必要とされる」

俺が生まれてから死ぬまで、人と疫病の戦いは終わらなかつた、終身までの健康と美しさは、人類全体の夢と言ってもいいだろう。

「だが、奴らは化け物同然だ、そんな事あり得る筈が……」

「いや、あり得るさ、化け物だと分かっていても、美しい、ただそれだけでも愛される事もある……サキュバス、ドリアード、セイレーン……古くから語られるそれらは皆美しいが、化け物としての側面も持っていた、同じ様なものなんじゃないのかね」

もしかすれば健康で、美しく、可愛く育つのは……ガストレアウイルスの生存戦略なのかもしれない……だとすれば、情欲の対象になりやすい女性になって生まれてくると言う理由にも納得が行く……人間は、種の繁栄の為に、性欲を生まれながら持っているのだから。

「……まるで他人事の様な語りだな」

「偶々さ、客観視できる立場にいて、それをそのまま語っただけさ。とにかく、子供たちは居なくならない、だから君はその感情にどうにか折り合いをつけるべきなんじゃないか？」

「……くそつ、こんな"子供"に説教されるなど……」

「おや、私の事を子供と呼んだかい？」

「……言い間違えただけだ！」

「おう、随分と話し込んでる様だな……」

この低く威圧感のある声は……

「たつ、多田島警部！ 何か問題でも?！」

「……事情聴取だ、浸食率も問題無いから牢から出して話をする事になつた」

「はっ、了解しました！」

警官が電撃柵のスイッチを落とし、扉を開かれる。

あの強面の彼だ、監視の彼の素顔もよく見える、いや、彼も幸が薄そうな顔だな、明日にでも警察官をクビになつても驚かないぞ。

「……ありがとう、楽しい話だったよ」

「……貴様と話す事などない！」

「……なんだ……その、随分仲良くなつたみたいだな」

「ええ、そうですねえ」

「そんな事ありません！」

「……くふっ……」

堪えかねたのか、多田島君は口元に握り拳を当てながら首を反転させた。

「あ、今笑つた、笑いましたね多田島君」

「君!? 警部に君とはなんだ貴様は！」

「ああ、もうとつとと事情聴取に行くぞ！」

??

「あらかじめ言っておくぞ、この取調室内の様子は録画されている。……お前が持っていたプロモーター、イニシエーターのIDカードの照合が取れた、所有していた武器もだ、いいか、正直に答えろ、どうやってそれらを手に入れた？」

こじんまりとした一つの窓付きの部屋、片隅には机でペンを走らせ

る書記が待機し、部屋のと真ん中の机では、俺と多田島君が対面に座っていた、電気ランプが隣にあるが、意味はあるのだろうか。

「その質問に答える前に……まず、プロモーターとイニシエーターとは、なんでしょうか？」

彼は呆れた様に頭を掻きながら、前のめりになりつつ話す体制を整えた。

「……プロモーター」も「イニシエーター」も、「民警」……つまり民間警備会社に所属する存在だ、民警の特徴としては、許可と認定を得る事で銃器、刀剣の装備が許可され、また、ガストレアに対し特異な効力を発揮するバラニウム製装備を使用する事が出来る位だな、プロモーターってのは民警の中でイニシエーターと「ペア」を組み、ガストレアと戦う存在だ、呪われた子供たちを除けば、ほぼ全ての人間になれる権利はある。逆にイニシエーターは呪われた子供たちのみだ、呪われた子供たちの中でもガストレアと戦う事を選んだ存在だ。ある程度の社会的地位を確保出来ると言うメリットもある」

「……なるほど……」

「これらプロモーターとイニシエーターとのペアを登録したり、イニシエーターとプロモーターをマッチングさせるのが「国際イニシエーター監督機構」頭文字を取って「IISO」だ、世界中に20万組以上いるペアのランキング付けも行なっている。因みにIDカードに載っていたペアのランキングは3万位代だ」

20万組、つまり40万人以上のデータを管理出来る様になっているのか、今のコンピューターは。

「……20万？ 凄まじい桁ですね、……それらを管理出来るほどコンピューターも進歩したのでしょうかね」

「？ ……まあ、そうだが。質問には答えた、今度はそっちの番だぞ」
体勢を崩した彼は背中を椅子に預けて軽く背を伸ばす。

その動作が一段落した所を見計らい、ゆっくりと語り出した。

「……私は、既に息絶えた彼らの死体から、武器とカードを手に入れたんです」

「既に？ どこで死んでいたんだ？」

「モノリスの外です」

書記がペンをからりと落とす。

「なら、お前は未踏査領域から来たってのか？」

「……今から話す事は全て本当です、証明する事は出来ませんが」

そこで俺は全ての経緯を話した、過去の記憶については存在しないと言う記憶喪失者と言う体で。偽名についてもすんなり受け入れてもらえた、まあ当然だろう、戸籍が無いんだから、記憶喪失で仮の名前を付けたと言う言い訳も通る。

「……丸裸で記憶を失った状態……そこから心中した死体から武器を取り、モデルスパイダーのガストレアを倒してから東京エリアにやって来た……って事だな、言いたいのは」

「はい、これで全部です」

「……未踏査領域に死体があるなら、それを証明する手立てはないな、確かに、信じがたい話だが……否定できないのも確かだ、銃のバレル、杭に着いていた血痕からお互いのDNAが検出された、古くなったガストレアの血痕も確認できた、確かに矛盾しない……が」

「他に罪はある、と言う事でしょう？」

「……そうだ、窃盗罪、無免許で銃を発砲した銃刀法違反……殺人罪は証拠不十分で不起訴だろうが、この二件についてはどうなるか分からん、執行猶予付きか、それとも、牢屋行きか」

「随分と含みのある言い方ですね？」

「……実は、前々から、この東京エリアであるテストが行われる事になっっているんだ」

「テスト？ 試験でもするのですか？」

「警察と言う組織の中で、プロモーターとイニシエーターを一組、特別に運用すると言うテストだ。……しかしこれには問題があり、今まで試行される事はなかった」

「……警察内での子供たちに対する風当たり、ですか？」

「鋭いな……確かにそれもある、後、十年前のガストレア大戦の際に産まれた呪われた子供たちは、どれだけ最年長であっても十歳だ、組織に入るには精神が未熟過ぎた」

「……なるほど、舐めた態度を取る私が適任だと……」

「既に試験は始まっていた」と言ったらどうする？」

「警察って中々趣味が悪いですね……まさか、電気柵と子供嫌いの監視でストレス耐性でも測っていたんですか？」

「……頼れる仲間が居ない孤立した状況下における精神強度、これは他のイニシエーターには見られない、かなり安定した数値が取れた。イニシエーターとは基本的に子供だ、誰かに依存しなければならぬ存在であるのは仕方ない事だと考えられていた、しかし、そんな時にお前が来た、これを上層部は見逃さなかった」

後ろの書記が焦り出したが彼は構わず話を続けた。

「これが成功すれば、警察にもバラニウムの利用が可能になるかもしれない、失敗した所で致命的なダメージを負う事はない、正に奴らにとつちや恵の雨だったって事だ、全く、ロクでもない時に捕まっちゃまったな、お前」

「……まったく、今から扉蹴飛ばしてトップをぶん殴りたい気分ですよ」

「そう言う所が評価されちゃう所なんだよ」

「なら泣きませうか？ 牢獄に閉じ込められ傷物になりましたとヒステリックを起こせば」

「やめてやれ……で、何が言いたいかと言えば、これは司法取引"もどき"だ、ハイと言えば罪を帳消し、戸籍は用意され給料も振り込まれる、自由は保証されるし、ペアとしてのランキングにも載る訳だ、つまり"機密情報へのアクセス権"も成果次第では入手可能だ。イイエと言えば」

「脅しになりそうだからそれ以上言わなくても良いですよ……ハイと言え、そうすれば、自由に外を出歩けると言う事ですか？」

「ああ、俺が保証する」

「もつとお偉いさんに保証して欲しい所ですが……」

「オイ……そうだ、後もう一つ言う事があったな」

「……？」

「そこは察しがつかないのか？ いや、発信器を取り付けられるって

話だよ、とびきり目立つ、な」

「発信器？」

「簡単に言えば今どこにいるか分かるって奴だ、民警なら問題起こせば民警潰せば良いが、こちとら警察だ、面子の問題もある、一目見て警察のイニシエーターだと分かる事と、問題を起こした時にすぐ駆けつける為、後は首輪を着けると言うアピールだ、呪われた子供を管理出来ている事を内外に示すって言う考えらしい」

「なら私がそうなった暁には、品行方正を極めた、可憐なる淑女として立ち振る舞わなければならないと」

「そこまでとは言わねえが、まあ、身の振り方には気を付ける必要があるな」

「……ピーと会えば、どうなるか。ロクでもない噂が立ちそうだな……手紙でも出すか？　しかし私には字の読み書きが出来ない。」

「……警察のイニシエーターになれば、文字を習えますかね？」

「ああ、その位の事は話を通しておく」

「……なら、私は脅しに屈するとしましょう」

「……録画されてるって言ったよな？」

「私記憶喪失なので何言ってるか分かりませんね」

「数分前の記憶を忘れる奴があるか」

「で、これで契約成立ですか？」

「いや、代筆で契約書を書いてもらう事になるが……まあ、これからよろしく頼むぞ、"イニシエーター"」

話が終わると、彼は右手を差し出した。

「……ああ、なるほどなるほど……それでは、よろしく頼みますよ、」

プロモーター"君？"」

気持ち強めに、大きな掌を小さな両手で握り込む。

「改めて自己紹介だ、俺は多田島茂徳だ、好きに呼べ」

「私の名前はアイゼン・バンカー、名前の意味は砂地のアイゼン、つまるところ、無用の長物って意味さ。出来ることなら仕事する必要が無いことを祈るよ」

「それについては俺も同感だ、警察の仕事なんて無い方が良いに違い

ない」

「では……茂徳君、縮めてしげとくん。早速首輪を着けて腹を見せようじゃないか」

「妙な言い方をするな、妙な言い方を！」

??

部屋は移り、ガラスケースに入ったバラニウム製の首輪が保管されたエリアに俺としげとくんが立っていた。

「これが首輪か、頑丈な作り……無理に外せば周りに警報でも発するんですか？」

「緊急信号が発信される、他にも機能はいくつかあり、常に首輪を着けた対象のバイタルや浸食率を計測する事も出来るらしい」

「……ガストレアになりそうになったら首輪が爆発したりしませんよね？」

「……………」

「いや否定しないんですか？」

次の瞬間、膝を立て、視線を合わせて彼が真っ直ぐに、言い放つ。「そうになったら、俺を恨んでくれ」

……彼はその強面通りの真面目さの様だ、まったく、これではこちらがふざけ倒す役にいたらねばならないだろう。少なくとも、彼よりは長く生きているのだから、気長に、支えていくとするか。

「真面目過ぎですね、ここは乗っかって謝罪の一つ位してこつちが突っ込む所ですよ？ ……そうですね、今朝会った蓮太郎君と藍原君位のベストペア目指しましょう！」

「ベストか？ ありやあどつちかと言えば押し掛け女房にタジタジの夫みたいなものだろうが」

「さ、世間話もここまでに、貴方が、私に首輪を着けてください」「俺がか？」

「自分で着けるのは味気ないですから、それに、恨んでくれと言うなら恨む口実を下さいよ」

少し躊躇いつつも、ガラスケースを開いた彼は、展開した首輪を手に取り、こちらへと歩いてくる。

「……お願いします」

「ああ、分かった」

膝立ちの強面の男、対して角に羽に尻尾の生えた少女、ファンタジー小説でも見たことの無い組み合わせだ。さあ、契りを交わそう。ゆつくりと、首輪は丁寧に取り付けられた。首筋に触れた彼の手が妙にくすぐったかった。

「……こう言う時、やっぱり言いたいセリフがありますよね」

「何だ……?」

「責任取ってください!」

「そんな関係じゃないだろう? なんだ、まさかあの里見蓮太郎のインシレーターに影響されたか?」

彼は里見蓮太郎と言うのか……なるほどなるほど。

首に感じる重みに手を添える、首輪自体はバラニウム製だが、裏には柔らかい素材が使われており、付けごごちは素晴らしい、もう少し厳つさが減ればちゃんとした装飾品になるだろうか。

何とも言えない雰囲気に含まれた室内に唐突に電子音が流れる。

彼が上着のポケットから二つ折りの何かを取り出す。

「……誰からの電話だ?」

……そうか、あれが携帯という物か、是非とも使ってみたいものだ。

「……何? そんな事を急に言われてもだな……ああ、分かった」

「何の連絡ですか?」

「明日、東京エリア内の民警、その社長とトッププロモーターやインシレーターが集まる会議があるんだと」

「……参加しろと?」

「話が早くて助かるな」

「明日から早速仕事ですか……字の勉強をしたかったです」

「……明日の準備の為に、今日は帰るぞ」

「帰る? 帰るってどこにですか?」

「俺の家だが? お前はまだ一文無し、だから俺が保護者兼プロモ―

ターとして面倒を見るといふ事になっている」

「え？ え？ ええええ？」

「それと……明日からのお前の肩書は警視庁対ガストレア課所属、アイゼン・バンカー警部補だ」

神秘に満ち溢れていた俺の世界以上の不思議がこの世にはあるよ
うで、逮捕されたと思えばその日の内に警察官になるなんて訳の分
からない事が起きるのは、この世界に祝福を受けているのか……それ
も……

新生活の洗礼

——東京エリア 内地 勾田警察署

「それで、しげとくん、こんないたいけな女の子一人を一つ屋根の下に連れ込む気分はどうかね、人生の勝ち組かな？」

「……早速いま後悔してるよ、とつとと車に乗れ、早く帰るぞ」

太陽は既に沈んでいた、この警視庁対ガストレア課の創立は明日と言う事になる為、一応まだ今日までの身分は釈放された容疑者と言う立ち位置らしい、警察の仕組みなどスコットランドヤードに知人が居たのみであり詳しくは知らないが、警部補とは警部の下のポジションらしい、正に警部の補佐と言う事だ。……警察署の出口へ向かう中、煙色を更に溶かし込んだようなモスグリーンの外套をはためかせる男、多田島茂徳が口を開く。

「……ああ、それと、結構前に来て面会の申し込みをしようとした男が居たぞ」

「里見君ですか？」

「当たり前だ、なんと言うか、まあ、ガキだな『ストリートチルドレンだろうとガストレアを倒した功労者の子供の扱いがそれか！』って怒ってたらしいぞ、結局追い出されたが」

「確かに、思わない所もないですが、危険性も確かにありますからね、特に浸食率を定期的に計測してない様なストリートチルドレンやマシホールチルドレンはいつ爆発するか分からない时限爆弾の様な物です、無警戒で招き入れる必要もないでしょう」

「お前、イルカの因子でも入ってるのか？」

「いや、これは恐らく生まれ持ったものですよ、いやゝ生まれとは残酷なものです、弱冠十歳にして頭角を現した最年少警部補が警察庁のトップに立つ日もそう遠くないでしょうね」

「寝言は寝て言え、と言うより、お前、根に持ってるな？」

「そうですね、心は熱く頭は冷静にがモットーですから、己を忘れるまで激昂する事はありませんよ」

「まったく、イルカやチンパンジーの因子を持った呪われた子供たち

ですらもつとガキらしいが、お前は随分とかけ離れてるな、子供たちにも老成なんて概念があんのかね」

「私だって唯一無二ですよ、多分、同じ因子を持っていても性格が違う事もあるんでしょう？ 普通の人だって老成する人、幼いままの人もいるでしょう？ それと同じですよ」

……駄弁りながら入り口として入って来た門を再び潜り、目指していた場所にたどり着いた、4つドアの付いた車だ、色は光沢のあるシルバーが全体に塗られており、パトカーの上をとっぱらった様な形だ。

「この車にはパトカーみたいにサイレンはつけないのかい？」

「この車は覆面パトカーだ、緊急走行時は掌サイズのパトランプを屋根の上に乗せて走る」

「なるほど、理解したよワトソン君」

「お前、本当に記憶喪失か？」

「警察の仕事は人を疑うことかい？」

鍵を片手に右手側のドアを開くと中から左手側のドアを開き、彼が、手招きする。

「おお、これが運転席の隣の光景ですか」

「"助手席"だな、なんでそう見事に知識が偏ってるんだ、お前は」

「歴史が違うんでしょうね」

「いや、違うのはむしろこっちの方だろう？ 子供たちの間で奇妙な知識を入れるのが流行ってるのか？」

「奇妙とはなんですか奇妙とは、と言うか話しながら運転して良いんですか？」

……夜の東京はより一層輝きを増していた、目に薰る光の数々が流れ星の様に窓の外を流れていく。……内地の輝きとは裏腹に、外周区から見た輝きを思い出す。街中には呪われた子供たちであろう物乞いを幾らか見た、やはり、美しい物とは、遠くから見るから美しいのだ、絵画の画板の繊維だけ見た所で、ただの汚れた紐だ。

「貴方は、この光景を見て、何か思う事はあるんですか？」

「……知ってるか、呪われた子供たちの死因を」

「分かりませんね、ガストレア化ですか？」

「二位は外周区へのガストレアの襲撃だが……二位は、過激な反赤目団体のテロやリンチだ、次にガストレアとの戦闘行為、四位は、プロモーターによるイニシエーターの殺害」

「……ままならないものですね」

「……着いたぞ」

車を駐車場に止め、家へと向かう。

「……これ全部しげとくんの家ですか？」

「んな訳ねえだろ、アパートだよ、共同住宅だ」

目の前にはやや外装の剥げたチョコレート色のアパートがあった。

「なるほどなるほど……後、一応本気で言っておくけどね」

「……？」

「本当に手は出さないで下さいね？ 貴方を豚箱にぶち込むのは気が引けますから」

「出す訳がないだろう……」

アパートのエレベーターに乗り、四階の隅の部屋に向かう。黄土色と黄色の塗装が施された金属製の扉を引くと……中はゴミ屋敷であつた。

「……え？ 何だ、泥棒に荒らされたのか？ と言うか何でどの部屋にも書類が散乱してるんだ？」

「……泥棒に荒らされたんですか？」

「すまん、俺の不徳の致すところだ」

「まず、片付けましょう」

「……ああ、すまん」

……片付けを済ませる頃には、とつくに深夜と呼べる時間に入っていた。

「……今日もインスタントだな……」

「インスタント？ 何ですそれは？」

「インスタントも知らねえのか？ インスタントってのはだな、湯を入れたりするだけで簡単に作れる食品だ」

「……そんなものがあれば、きつと私の生活も楽でしたね」

「……………」

「ああ、いや、私個人の話ですよ」

湯を沸かしている間、リビングで色付きの映像が流れるテレビをソファーに座り、眺めながら時間を潰す、深夜という事もあってか、中々に下世話な番組もあったが、始まった瞬間彼の神速の技により変えられてしまう。

「さっきの続き見たかったです」

「ガキが見るもんじゃねえよ」

「と言うかさつきからガキとかお前とか、それはペアとしてどうなんですか、しげとくん」

「そのふざけた呼び方を辞めたら名前で呼ぶさ」

「交渉決裂ですね」

「……多少は考慮の余地があるかと思っただがな」

「でも好きに呼んでくれて言いましたよね？」

追及の手を強めようとした時、奥のキッチンからぴーつと音が響く。

「湯が沸いたみたいだ、机に座って待つとけ」

「分かりましたよ」

少し間が空いて、奥から湯気の立つカップを二つ持った強面の男がやって来た。知らない人が見れば愉快的強盗が来たと思うだろう。

日本では食事の前に祈りを捧げない代わりに、いただきますと誰かへの感謝の言葉を述べると聞き、二人して「いただきます」と言い、食い始めた。

「……この棒切れはなんですか？」

「何って……箸だが、ああ、使い方が分からねえのか」

「まずはな……」と言おうと彼が言おうとしたが、彼が手に持った箸の姿を見て、俺はトレースしてみた。狩人に大切な事の一つ、適応力だ。

「……使い方なら聞くか見るかすれば分かります」

「……それも、自前の力なのか？」

「そうですね……脚光と喝采を浴びるなら才能と努力でどうにかかなりますけど生き残る為にはそれだけじゃ足りませんから、それこそ異端の力染みたものも必要ですからねえ」

「……随分と、苦勞してたんだな」

「いえ、他の子供たちの方が遥かに苦しい生活してると思いますよ、私なんて公僕になれたんですよ、一種の出世街道です」

「……そうか」

「しかし、そうやってズルズル啜るのは辞めてもらえませんか？ 耳に響きます」

「な、麺は啜って食べるもんだろうが！」

「いや、こうして一口取ってそのまま口に収める方が綺麗です、ほら、その啜り食いは周りに汁飛ばしてるじゃないですか！」

「これも一種の作法なんだよ！」

「そんな作法私が修正してやりますよ！」

ドン！ ドン！ ドン！

「……お隣からの苦情だ……少し静かにするぞ」

「……ええ、熱くなりすぎました」

深夜に二人、チマチマとインスタントヌードルを食べる姿は側から見れば苦笑いされそうな光景だった。

「明日は重要な会議だ、風呂に入っておけ」

「先に入ってもらっていいですよ、しげとくんの方が男臭そうですから」

「余計なお世話だ、ガキならとつと先入って寝ろ」

「……そう言えば、服はどうしましょう、股開き背中開きは痴女染みますし貴方が社会的に死ぬのは間違いないですよ」

「そこら辺は大丈夫らしい、スキヤニングされた身体データで作られた寝巻きが手元にある、明日には専用の制服も届くと聞いている」

「……待つてくださいいつ調べたんですか？」

「……企業秘密だな」

「警察ですよね？」

……3日ぶり位の風呂だ、脱衣所の鏡に映った姿を見る。

白髪混じりの黒髪、黄土色の角、赤色の羽と尻尾、真つ黒な首輪。

……俺は一体なんなのだろうか。

浴槽に入る前に一通り体を洗う……洗剤の使い分けは教わった、髪はシャンプーで洗ってからリンスを馴染ませればいい、しかし、角はボディソープで洗えば良いのだろうか？ 一応首輪は耐水性らしいが……錆びないのだろうか？ 因みにこれらの洗剤は私が彼の家に住候すると決まった際に配給された物資の一つである、寝巻きも制服もこれに当たる。これから使うであろうバラニウム製の武器も、である、因みに杭とSAAは没収された。

「着替えは脱衣所の籠に置いておくぞ」

「ああ、分かったよ」

普通の子供からすればかなり広いだろう浴槽だが、羽と尻尾のせいでもかなり動き辛い、浴室の形は長方形、その形に合わせて長方形の浴槽もぴったり部屋の長い辺と浴槽の長い辺が垂直になる様に収まっている為に、体を伸ばして浴槽に頭を預けると、角が壁に当たるのだ。家を傷付ける訳にもいかず、浴槽の中で正座の姿勢を取らざるを得ないのがなんと歯痒かった。

そうして身体を温めた後、風呂場から出た俺は再び脱衣所の鏡の前で立ちすくむ。

「……まさか……この竜と人が合わさった様な姿……いやあり得んな、いくらそれが化け物と言う粹に収まる生命いのちだったとしても……」

「オイ、もう上がっ……って何でまた裸なんだ！」

「あ、ああ、すまない……今すぐ着替え……何だこのヒラヒラだらけの服は！」

手に取ったそれは、ピンク色の水玉が散りばめられ、レースをこれでもかと盛り込まれた寝巻きである、いや、普通に良いだろうこの様なもの。

「それが配給された寝巻きだ……デザインは配給者の趣味、らしい」

「責任者を出せ！ 責任者を出せえッ！」

「お、落ち着け！ また壁を叩かれるのは不味いんだよ！」

……俺の叫びは二度目の壁ドンによってかき消された……配給者、許すまじ。

??

歯を磨き、寝支度を終わらせた俺は畳とやらを張った和室で彼の布団の隣に布団を敷き、寝ることになった。

「……寝られないのか、バンカー」

俺は臀部から尻尾を生やしているせいで仰向けに寝られない、だから横になっている訳だが、彼に対して背中を向けて寝ていると、後ろから、厳ついのに優しい、不思議な声が聞こえてきた。

「この世界に生まれて、初めてのまともな寝床ですからね、まあ、じきに慣れてくるでしょう」

「……すまない」

まるで陳述する咎人の様な、暗く重い揺らぎ。

「……？」

「……警察は、お前に仲間がいる事を知っている」

「……何の事ですか？」

「監視カメラで確認済みだ、だからこそ、あの司法取引もどきが行われたんだよ」

狩人が罫に嵌められたと言う訳か……なんとも皮肉な話だ。

「……監視カメラ……なるほど、そんな物もありましたか」
「今のところ、お前は従順であり、無理に手を出す必要は無いと判断されている為に、そちらの仲間の罪は見逃されている」
「話しても良かったんですか、今首輪つけてる訳ですけど」
「夜間はプライバシー保護の為、観測された情報は朝削除される」
「申し訳程度の良心ですね、子供の悪戯心を舐めているのでしょうか」
「お望みとあれば、24時間監視する様にも出来るが？」
「生憎私にそんな趣味はありません」

「……お前は、呪われた子供たちとして生まれた事をどう思ってる？」
「……確かに、どうだろうな、因果かとは思いますが、それはあくまで」個人
「個人の感覚だな」
「……？ どうしたんだ、急に俺なんて言い出して」
「……私としては、まだ分からない、それが正直な感想です」
「……分からない、か」
「当たり前でしょう、まだ十代ですから、ここで答えを出す程生き急ぐ気はありませんよ、それこそ、最期の時まで」
「そうだな。すまん、変なことを聞いた」
「良いですよ、お互いに変なんですから」
「……ハッ、明日、よろしく頼むぞ」
「こちらこそ、エスコートをよろしくお願いしますよ」

??

朝が来た、遅く寝たが彼より早く起きてしまったので、冷蔵庫にあった物と睨めっこしつつ、簡単なサラダ、トースト、ベーコンエッグの朝食を作っておいた。

和室に戻れば、まだ彼は寝ていた為、尻尾で揺すって起こした。

「……おはようございます、しげとくん」

「んん……もう朝か？」

布団から寝ぼけた眼のボサボサ髪が現れる、初対面の時から思っ

居たが、顔はいい筈なのに、まだらにびよこびよこ生えた短い髭だったりハンガーに吊り下げられているあのくたびれた外套と言い、身嗜みに気を使わなすぎである。

「さ、歯を磨いて顔洗って、ご飯の時間にしましょう、私が用意しましたから」

「……………お前、料理出来るのか？」

「多少は、と前に付きますが」

「コンロの使い方も知ってたのか？」

「昨日言いましたよ？ 使い方なら見るか聞かすれば分かりますって」

「……………ああ、いや、改めて聞いても因子関係無しの方だとは思えなくてな」

「人も子供たちも関係なく特別な能力とはあるものですよ、人の身で剣や銃の頂に辿り着いた人も居ますし」

「まあ確かに、そうだな……………食事の前に一服しても良いか？」

「……………タバコはやめた方が良いでしょう、まず息が続かなくなる、吸わないとだんだんイライラしてくる様になるのもまどろっこしいですから」

「……………随分と含蓄があるな、まさかガキの癖に吸ってたのか？」

「いいえ、吸ってる人を知ってるだけです」

俺と言う喫煙者だが。

「タバコの匂いで喫煙者と分かってたので、とりあえずタバコは没収しました」

「あつ、オイ！ タバコが無いぞ、どこに隠したんだ！」

「パソコンに音声認識なんて便利な機能があったので、プロモーターの動画を見させてもらいましたよ、あんなに運動するならタバコはやめるべきです」

「……………そこを何とかだな」

「ダメです」

しかし、無理矢理押し通した、なまじタバコの事を知っているからに、禁煙の辛さは知っている、彼の禁煙に精一杯協力しよう……………。

??

食事を終え、俺達は仕事着に着替えた。多田島警部は白いシャツと紺色のネクタイ、くすんだモスグリーンのジャンパーと黄土色のカーゴパンツを身に着け、運動用のシューズを履き、先に出て行った。俺はと言うと……

「むう、なぜ鎖をあちこちにジャラジャラと身に付ける必要がある？」
姿見の前に立っていた。

宅配で届けられた制服。

内容物は何故かパンク風ファツションと書かれていたらしい。角に合わせた穴を開けたキャップに羽を出せる穴を開けてある灰色のパーカーに黒いジャケット、これと後デニム生地の手ツトパンツにジャラジャラと銀色の鎖が着いており、地味に重い。短いソックスに底の厚いブーツの様な靴。……呪われた子供たちである事を隠す気が一切ないじゃ無いなと思つたが、案外この格好なら首輪も目立たない事に気付くと、この服を選んだ理由が分かった気がして、一先ず溜飲を下げる事が出来た。

……まさかこんな服を着る事になろうとは……

鏡に映る自分の姿を見て唾然とする。……そこまで似合っていない訳ではない事に更に腹が立つ。

「……もう行くか」

戸締りを確認し、四階から下の駐車場を見ると昨日の車の側で待機する多田島警部が見えたのでそのまま手摺りを乗り越えて、跳ぶ。

羽を大きく広げ空気を掴み、ゆっくりと落下する。

「多田島警部、お待たせしました」

警部はどうやら開いた口が塞がらない様だ、随分と驚いている。

「……今、警部って言ったか」

「はい、何か問題が？」

「いや、昨日は散々君付けで呼んできたのに、どんな気の変わり様だ？」

「変わるものにも、品行方正であれと言ったのは貴方です、流石に組織の中で活動する時は礼儀を示すのは、大人としては当然の事では？」

「……調子が狂うな、頭痛え」

「とにかく、今日一日よろしくお願いします、多田島警部、それともイエツサーとでも言いましょうか？」

「分かった……勘弁してくれ、ほら行くぞ、アイゼン」

「Sir, yes, sir!」

警察組織初のプロモーターとイニシエーターを乗せたセダンが走り出す、混乱の坩堝と化す、その場所へ。

血の会議

——東京エリア 内地

空は俺達の初仕事を祝福する様に真っ青、この数日間が一番の晴天だった。しかし、隣で運転席に座る多田島警部の顔色は優れない、強面の顔が更に強張りを帯び、オーガに見間違えそうな程だ。

「いくら重要な会議とは言え、そこまで緊張するものですか？ 多田島警部」

「……行く前に言っておくが、警察として民警に接触するのは危険だぞ」

彼は苦い顔を更に顰める、ミイラの包帯をかじった時の俺の顔のようだ。

「行けば分かるだろうがな、民警と警察はお互いに対して良いイメージを抱いていない方が多い」

「それはまたどうして？」

「二つはガストレアへの力の弱さだ、民警が行使出来る権利の一つ、バラムウム製武器を警察は所有出来ない為に、ガストレア関連の事件が起きた際、俺らは現場の封鎖、確保と周辺住民への避難要請をしたら、法律の規定で民警を待たなくちゃならない、そのガストレアに対する無力感を八つ当たり染みた形でぶつける奴も居るんだ、……俺もその一人だったんだがな」

「……無力感ですか……分かりますよ、すつごくね」

「揶揄わねえのか、情けない大人だよ」

「……私が言えた義理じゃないからですよ、他には何か理由があるんですか？」

「……他には、民警にはならず者も多くいる事だ、この前言ったが、イニシエーターになった子供たちがプロモーターに殺される時がある、そんな時、そのプロモーターの経緯を洗えばアウトローの人物だったと言う時がままある。そんな奴らがいる民警と言う枠組みに不信感のある奴も居てな、特に若い正義感に突き動かされる奴は尚更民警に辛辣に当たるとだよ」

「後者はともかく、前者はバラニウム弾を警察が持てば解決しそうなものですが……」

「警察がバラニウム弾を持ってないのは、日本人お得意の"慣例に倣う"って奴だ」

「慣例に倣う?」

「かつてのガストレア大戦直後の"治安悪化"や"新興宗教のテロ活動の頻発"に対して主に動けたのは、"逮捕権"の多くを有していた警察だけだった。そんな中、更にガストレアへの対処まで入った結果、警察は人員に対して仕事が多過ぎた為に機能不全一步手前に陥った」

「その時現れたのが、民警と言う訳ですか」

「逮捕権を持たない民警はその時、ガストレアへの対処に専念した、ガストレアに構う暇の無い警察は、治安維持とテロリストの逮捕に専念した訳だ」

「その時の作業の分担が、今に至ると?」

「そうだ、民警に対ガストレアの仕事を任せられた結果、警察の業務からガストレアの排除は消えた。ガストレア大戦時に生み出されたその体制が今に受け継がれた、だが、治安の安定化とテロリストの減少に伴い、ガストレアの排除と言う業務を復活させようと言う警察内の声の高まりに合わせ計画されたのが」

「私たち、警察に属するプロモーターとイニシエーターですか」

「民警の活躍により、プロモーターとイニシエーターのペアと言う形がガストレアに対し最小の単位かつ最大の効力を発揮すると言う事は周知されていた為に、警視庁もその形に則った訳だが……それはお前の知るところだ」

「……警察と言う組織体制に適応出来る十代が予想以上に存在しなかった」

「ああ、ストレスに耐えかね、自傷行為に及んだ奴も居た」

「……私、ロクでもない事選ばれましたね、それに皮肉ですよ、犯罪で捕まった私が警察? しかもならず者も多い民警の真似事をするなんて、そこも民警を再現したかったんですか?」

「流石に俺もお上がそんな面倒な凝り性を発揮してるとは思いたくないがな」

「……なるほどなるほど、今から行くのはそんな警察と仲のよろしくない民警のトップ達が集まる所な訳ですから、私達、ボロボロにされてもおかしくない訳ですネ？」

「ああ、そうだよ畜生、いきなりこんな仕事頼むか普通？　警察にもガストレアに立ち向かう力はあると言うアピールにしても、これはいきなり過ぎる」

「せいぜい身包み剥がされて晒し者にならない事を祈りましょう、グツドラック^{幸運を祈る}ってね」

防衛省と銘打たれた柱の間を通り抜け、駐車場に立ち入ると、次の瞬間、慣性に負けた身体が前にガクンと揺さぶられる。車が止まり、大きな影が辺りを包む。

「周りは高級車だらけ……はあ、やっぱり来てるのはトップか、態々"防衛省"に招く程だからな、はあ、頭が痛くなって来た」

「体調が悪いならここで待ちますか？　警部の分も話は聞いておきますよ」

「いくら肝っ玉が座っててませたガキだろうとそんな中に一人で行かせられるか」

そう言った彼は助手席に座る俺の前のダッシュボードとやらを開き、中から色々取り出していた。

——警察手帳、これはプロモーター、イニシエーターのライセンスカードとしても使える特別な代物らしい。

——手錠、その鍵、逮捕権を持った警察として、イニシエーターである俺もまたプロモーターである警部の責任の元、犯罪者を逮捕出来るそうだ。

——アパートの合鍵、これには特に説明はなかった、普通に俺だけでも家に帰れる様にと言う事だろう。

——財布、落ち着いた黒革の小さな財布だ。警察は給料制で収入は安定している、食うに事欠くはないだろう、因みに通帳と口座も既に作ってある。

——スマートフォン、警部がこの仕事の為に買い替えたスマートフォンと同モデルらしい、色は警部がグレー、俺がレッドである。

——バラニウム製警棒、ガストレア、犯罪者両方に使える武器、丈夫さは折り紙付き。俺は二本、警部は一本用意されていた。

——SAKURA M360J、装填数は五発、ダブルアクションで、38スペシャル弾を使用する、バラニウム弾もその規格に合わせた物で、多田島警部が持つニューナンブM60の弾薬と互換性がある。

——ホルスター& amp; 弾薬ポーチ、ハーネスの様な形でそれぞれの体格に合わせて伸縮する。左脇腹にホルスターが固定されており、ホルスターから伸びるベルトをニューナンブを紐付けする事で盗難を防げる様になっている。右脇腹には警棒を固定する事が可能。余った警棒はジャケットの右袖にしまっておいた。弾薬ポーチには、38スペシャル弾とバラニウム弾を入れたポーチの二つがあり、それぞれ左腰部、右腰部に備えられている。

小物類をジャケット等のポケットに仕舞い込む。

「準備は終わりましたよ、降りますか？」

「ああ、行くとするか」

車から降り、影の指す方を見れば、そこには天を突く巨大な八角柱がそびえ立っていた、紀元前に持ち込めば天を支える柱だと信仰を捧げられるだろう。

……見惚れていると隣から声がかけられる。

「お待ちしておりました、警視庁対ガストレア課の御二方、どうぞこちらへ」

威厳と歴史を感じる木製の扉を開けば、広いエントランスホールが俺たちを迎える。年季の入ったくたびれた警部の服にも、パンク風であるらしい俺の服にも似つかわしくない荘厳な雰囲気は東京の要所である事を言外に伝えていた。

??

人は一人ではない、孤独でも、苦境ですら友に迎え入れる。
真に孤独である時は、それこそ、どこにもない。

死すらも無ですら我らの友人だ、故に狩人の狩りに隣立つ人間は居ない。

しかし、狩人は新たな大地へ立つ、隣り合う相棒と共に。

そこにあるのは運命か、黒色の弾丸、血色の弾丸、そして、銀色の弾丸……………今、交錯する。

??

レッドカーペットのラインを手繰り、会議室へと少しずつつ近付けば、より向こうから感じる揺らぎは大きくなる、……………あくまで比喩的な表現だが、“化け物達”が向こうに居る、それがひしひしと伝わってくる。

「……………一応聞いておきますけど、プロモーターって唯の……………人、ですよね？」

「人だな、人の筈だが、自分と同じ大きさのバラニウムの大剣を振り回す奴も居た、はつきり言って同じ存在とは思えねえな」

「……………もしもの時は、私の後ろに隠れてください、いいですね？」

「大人の意地……………なんて言ってる場合じゃねえな。もしもの時は頼む、後、入る前に、お前の首輪の録音機能等をOFFにしておく。今回の会議に招集したのは“民警”だ、あくまでも仕事内容は極秘らしい」

そう言うと彼は腕に装着されていたリストバンドの様な物を確認し、「コードE96DE7、トレーサー機能とバイタルモニター機能以外停止」と呪文の様な文言を唱えると、首輪が『コード受諾、トレーサー、バイタルモニター以外を停止します』と返す。

「この首輪……………しゃべるんですね、それに、その腕輪は何ですか？」

「この腕輪は、機能の制限を行う際のコードをその場で発行する機械だ、セキュリティトークンって言うらしいな、こう言うのは……………それじゃあ、行くとするか」

職員が木製のドアのノブに手をかけ、そのまま引き出す。俺は隣に並んでいた警部を追い越し、前に躍り出た。そのまま会議室に入ると、まず細長い楕円の円卓にずらりと名札らしき物とスーツの人物が並んでいた。その後ろにはまるでその人物を守る様に縦長の会議室の壁際にビッシリ、武装した子供たちや大人が並んでいた、恐らく前者が民警の社長で、並ぶのがプロモーターとインシエーター達だろう。スーツ姿の社長に対し、プロモーターやインシエーターは比較的華美な服を着ていた。特にインシエーターはそれが顕著であり、確かに東京エリア上位のペア、つまり稼ぎが良いと言う事が察せた。

空席は"二つ"しかなく、俺たちが座る席は当然無い、何故かと聞かれれば、"社長"なんて存在が居ないからである、その気になればこの会議の場を作った人物は警察のトップすらも呼べるかもしれないが、あくまでこの場に呼ばれたのは民警である。そんな訳で社長の居ない民警、つまり警察庁のプロモーターとインシエーターである事はじきにバレる事であった。

俺たちは社長の後ろに陣取れば良い他の民警とは訳が違うので、手持ち無沙汰になる前にとつとドアの対面、窓側の近くの壁際に陣取った。

「……皆さん、凄い目つきですね、特にあの大柄な男性、凄い大剣持ってますよ、いかにもな獲物ですよねえ」

「確かに全員がこちらを見てるな、見知った顔も幾らかある、復讐するは我にありとでも言いそうな雰囲気だ」

「それは自業自得ですね、私は警部がボコボコにされている隙に逃げますよ」

「……首輪の機能停止してから急に生き生きしやがってからに……さつきまでの言動と言い本当に仕事中は真面目にするのかと思えばこれだ」

「分かっていますよ、私がふざけるのは"安全な時"か"危険な時"だけです」

「いや、どつちか分かんねえだろうが……」

……しかし事実なのだから仕方ない。朝作ってこつそりポケットに入れておいたシユガーラスクをポケットの中で手慰みにしていると、ブロンズの三つ編みを両耳の前に垂らした少女と目が合った、先の大剣を持ち、バンダナで口元を隠した金髪の大男、そのイニシエーターだろう。

目が合った事を察したのか、その少女は感情を感じさせないニュートラルさを保ちつつお腹を押さえて口をパクパクさせる。

「ん……？」

読唇術でも試されてるのか……「おな、かす、きま、した」……なるほど、黙っていても腹は減る、心底よく分かる、特に罠に獲物がかかるまで待つてる時とか、後で友好のしるしとしてシユガーラスクでもあげようか。

……"子供"になった故か、どうしても待ち時間が長く感じる。それに警部より俺の方に視線が集まっているのがとても気になる、いや、理由は分かる、改めてこの部屋の子供たちを見ても、俺の様に色々生えているわけでは無い、むしろ俺が季節外れのハロウインの仮装をしてる浮かれた子供に見える、周りの子供たちの中にも重そうなドレスを身に着けていたりする奴がいるが。

更に辺りを見回していると、俺のパンク風の服装と似た系統の服を着ている革のジャンパーを着たプロモーターと革ベスト姿のイニシエーターが目に入った、お互いに金髪かつ癖のある毛、前者は短髪、後者はツインテールだ。両者共俺を見て啞然としている……やはり、この悪魔の様な姿は目立つか。

「……来た」

「ああ？ 何が来たってんだ」

「今に分かる事ですよ」

次の瞬間、ドアが開き、若い女性と昨日出会った里見蓮太郎が入室して来た。

「木更さん、こいつは……」

「これ、東京エリア上位の人間が殆ど呼ばれてるんじゃない……」

どうやら黒い長髪でスタイル抜群の女性の名は木更と言う様だ。

「ありやあ……天童民間警備会社の……」

「……民警の最初の名前の様なものは、社長の苗字なんですか？」

「まあ、そうだな、なにより民警ってのは数が多い、だから社名と社長の名前がリンクする方が都合が良いんだろうよ」

「だったら……彼女の名前は、天童木更てんどうきさらと言う事ですか」

天童木更と里見蓮太郎、彼女らは、楯円の円卓の内、自身の空席を発見するとそちらへ向かっていく。……途中で、例の金髪口バンダナの男が彼女らの前に立ち塞がる。

「おいおい、最近はガキまで民警ごっこかよ？　ここはガキの来るよ
うな場所じゃねえんだ、さっさと帰りやがれ」
「用があるならまず名乗れよ……」

次の瞬間、金髪口バンダナが彼女の前に躍り出た里見蓮太郎に頭突きを対する彼は後ろに引き下がりがながらも背中背中のに獲物手銃を掛けた、同じく大男も背中の獲物剣に手を伸ばす。

不味いな、いきなり仲間割れどころか乱痴気騒ぎか、警察として見逃しがたい事態だ、確かに今は警察の中の民警と言う立場で来ているが、逮捕権は健在、騒ぎを起こす前に警告しておこう、責任を問われかねん。

「お前、プロモーターなら「道具」はどうした？」

「……道具？」

「お前の「イニシエーター」だよ」

「道具……延珠を……道具だとッ！」

「警告です、これ以上は傷害罪か決闘罪でしよっぴきますよ」

二人の間に飛び込み、ポケットから取り出した警察手帳を開く。片方は憤懣を、片方は啞然を顔に滲ませていた。

「……あの時の！」

「何だ……道具の分際で邪魔しやがって」

両者の顔を見比べた後、テーブルに振り返り、全員に向けて名乗りを上げる。

「……私は警視庁対ガストレア課、イニシエーター、アイゼン・バンカー警部補です、そしてこちらが」

「同じく、プロモーター、多田島茂徳警部、こいつの上司だ……で、お前さん、また会ったな、相変わらずの不幸ヅラだな」

「……………どうなつてんだ……………」

「……………どう言う訳で警察がこの場に居るんだ？　ここに来たのは民警連中だけだろうかよ」

「この度、警察庁はガストレア対策に向け、対ガストレア課を設立した。その一環により、警察内部にプロモーターとイニシエーターを立て、試験運用している……………どうだ、満足したか？」

警部の話を聞いていると背中から声がかかる。

「……………お前、昨日の今日でどうしてこんな事に……………」

「不思議な物ですよ、運命の不可思議さは心底経験して来たつもりですけど」

「……………でも、無事だったんだな、良かった」

困惑の色調を深めていた彼の顔がふっと緩む、キラースマイルという奴だろうか、恐らく彼はこれから色んな意味で女性に悩まされる事請け合いだろう、いや、幼さも僅かに残る顔付きは男も引き寄せてしまいかもしれない。……………彼に女難からの加護でも掛けた道具でも与えようか、サキユバスの類いに対する加護だが、多少は役に立つだろうか。いや、この世界に神秘の類の力は存在するもののだろうか。

「なるほどなるほど、延珠君が惚れ込む訳です」

「……………何でそこで延珠の名前が出るんだよ？」

「妙な縁だな……………お前さんとこうして会うのも」

「まさか、アンタがこいつのプロモーターになるなんてな、昨日まではまだ普通に警察だったよな？」

「俺も思っちゃいねえよ、殆どこいつのおかげだ」

警部がポンと俺の頭に手を乗せる、親の事は分からないが、居ればこんな感覚なのだろう。

「里見君、今度は同業者として、……今は居ないけど、イニシエーターの彼女を紹介してくれないかい？」

「……？ ああ、もちろん良いけど……」

「深く考えるだけ無駄だ、こいつの考えは俺にも分からん」

「……そう言えば、あちらの方は？」

「三ヶ島ロイヤルガードの社長さんに説教されちまつて完全に沈黙してるよ、……IP序列1584位の伊熊将監いくましようげんとは言え社長には頭が上がりねえみてえだな」

「IP序列1584位!？」

「……どうやら、そろそろお話が始まる様ですね。私達のステージではありませんから、自己紹介は後に取っておきましょう」

次の瞬間、俺たちが入って来た扉と反対側の扉が開く、そこから現れたの白髪、恐らく防衛省の制服を身につけた中年男性であった、顔に刻まれた皺と合わせた巖の様な顔付きは幾つもの苦難を超えたであろう貫禄のあるものに見える。

カツカツと床を蹴り、円卓の前に立つ、一席残った空席を確認しつつ、次に述べられたのは"最終確認"であった。

簡単に言えば、この依頼を受ける気がなければ帰れ、受ければ逃げれない。依頼内容ですら極秘に集められた以上、他の民警らもやはりそうかと、顔色を変える事はなかった。

「これより、依頼の説明を行う」

席を立つ者が居ないことを確認した彼は反転し、黒い板に向け頭を下げる。

周りの人物の視線が円卓の前に備え付けられた巨大な板に集まっている。……まさか、あれがテレビか、凄まじいものだな。半世紀以上も違えば当然だとしても、人類の進化とは著しいものだ。たった十年で人類を撃滅に追い詰めたガストレアへの対抗手段を見つけたのだから。狼男や吸血鬼の類を殺す銀の弾丸を人類が見つけるまでの歴史も神速を極めたものだったが。

次の瞬間、真っ黒なテレビに真っ白な景色が写り込む。

「……あれはテレビじゃなくて絵画でしたっけ？」

その中には絵画にも中々お目にかかれない美女と、まるでサムライの様な風体の老人がその側に立っていた。俺から見た彼女の存在は、絵画の様に儂く、脆く、実体が無い、架空の存在にも思えた。

その姿を視認した瞬間、席に座る社長達がスターゲイジーパイの様に屹立したのだ。

……それだけで分かる、『彼女は頂点である』と。

「……彼女は？」

「まさか……」 聖天子様からの依頼とはな、そりゃあ東京エリアの統治者の依頼ならこれも当然か」

「なるほど、理解しました」

「ご機嫌よう、皆さん」

その儂げな美貌に相応しい清廉な声、いよいよ俺は「実はこの人物は天使で、人間達は天使に支配されているのか？」と俺の世界の常識に当て嵌め考え始めていた。

続けて彼女の口から出された依頼内容……それは、昨日俺が捕まる原因にもなったあのガストレアを生み出した"感染源ガストレア"の排除、そして、そのガストレアの体内に取り込まれた"ケース"を無傷で回収する事、だそうだ。

「ケースの中身、聞いてもよろしいでしょうか」

予想外の依頼主の出現にどよめきを隠せない者達が居る中、見事なまでに一直線に手を挙げた女性が居た……天童木更だ。

彼女がその質問を投げ込むと、聖天子は彼女に名前を問うた、しかし、彼女が「天童民間警備会社の天童木更です」と返すと、聖天子が横の老人に目をやりながら、噂は聞いていると、話を続けた。……もしかしなくても、画面の向こうの老人と彼女には因縁があるのだから

う、勘ではあるが、先程から里見君の背中から僅かながらの揺らぎを感じる、恐らく里見君も一枚噛む案件なのだろう。

……そんな事を考えていると、隣の警部の肩が震えていたのに気付いた、恐怖ではない……怒気だ。

「何でアイツがここにいやがるんだ……どうして誰も気付かない!？」
「……どうしたんで……ッ!？」

丁度俺たちの前に「あつた筈」の空席が埋まっていた。

……紅い燕尾服、黒い笑顔が掘り込まれた白い舞踏会用の仮面、黒いシルクハット。……それらを着込んだ大道芸人もどきが行儀悪く足をテーブルに乗せ、我が物顔で座っていた。

「私の後ろに、気を付けてください、多分アレは」化け物中の化け物
ですよ」

……下手に手を出せない、大道芸人もどきが動かない限り、こちらは相手に飛び込まざるを得ない。気配を消されればまた見失う、あのふざけた格好に反して技量は間違いなく常人のそれとは逸している。

……異様な雰囲気を放つ大道芸人もどきに誰も気付く事なく会議が進む、天童君の質問はプライバシーと言う観点ではねつけられたが、食らいつく彼女はただの感染源ガストレアの駆除に対し、招集したのが東京エリアトップの民警達である事からケースの内容物がそれだけ重要な代物であると予想を語っていた。

聖天子が返す言葉を述べようとした時、遂に奴が動き出した。組んでいた足が緩み、開きそうになる、狙うなら今しかない、相手がいつでも動ける体勢を取る前に。

周りは全員気付いていない、この段階で攻撃を放たれれば誰かが犠牲になる。東京エリアトップと言う事はここに居る面々一人一人が重要な防衛ファクターである事は間違いない。……正体不明に飛び込むのはひたすらに気が引けるが……

化け物相手ならば、狩人が行かねばなるまい。

「すいません、私行きます！」

「おい、待てッ！」

因子による力で踏み込んだ第一歩、それにより一気に数ヤードの跳躍を行い、きりもみながらその跳躍中にテーブルの木材を強化された腕力でもたやすく引き剥がし、大道芸人もどきに表面の木目がしつかり見えるようにして投げつける。

会する面々は俺の突飛な行動に驚き、席を離れていく。

投げ付けた木材はまだ無傷……奴が視界を塞がれてる内にテーブルの上に背中を向けながら着地、回転中にホルスターから取り出した新品のSAKURA M360Jを片手に、放り投げたテーブルの欠片を避けるように左奥、つまり奴が座っていた右手側に飛び込んだ。木材をカバーにし、低い姿勢でテーブルから飛び出す、床に転がりながら"座っている筈"の奴に銃口を向けた。

「ッ!? そこッ！」

しかし、座っていた筈の奴は既に消え、テーブルの上に直立していた。木材はいく宛を失い、そのまま椅子に激突し、止まった。

気配を追い、そちらへ銃口を振ろうとしたが、次に感じた強い殺気に向け、反射的に銃を向ける。

黒く冷たい光沢が首元に添えられ、首輪にぶつかる。咄嗟に向けた銃口をそのままに、俺は、"蒼一色の少女"へ向け引き金を撃鉄が下されるギリギリのラインにホールドした。

「パパ、こいつ、切ってもいい?」

「よしよし、小比奈、"まだ"、駄目だ、我慢しなさい」

「もう、パパあゝ」

「……おいおい、舞踏会にでも来たんだってならもっとお淑やかに振る舞ってくれ、ドレスコードは満点でも間違いなく出入り禁止だぞ？」

「……面白い子だね、君は」

"俺"の元々の口調が一瞬滲み出す、おまけに口からはペラペラ憚る事なくジョークが湧き出す、これは「危険な時」のジョークだ。

眼前の少女は不機嫌さを露わにするが、剣先にブレがない、それこそ十分な修練を積んだ剣士以上に。

その時、テレビに映る聖天子が奴に問いかけた。

「貴方は一体、誰ですか」

「……私は、蛭子、ひるこかげたね蛭子影胤だ。お初にお目にかかるね……」無能な国家元首殿」

視界の端で銃口を奴に向ける里見君と警部がチラリと映り込む。手に滲む汗は間違いなく自身の窮地を示している、いや、俺が全ての手管を利用すれば目の前の少女は恐らくどうにか出来る、それを疑ってはいいない、狩人として積み上げた物がそこにあるのだから。しかし、奴が厄介だ。

「元氣だったかい？ 里見くん、オ、あの時の警察くんもいる様だね」それは、長い間会えなかった親戚にかけるような、朗らかな物だった。

里見君が侵入経路を問いただせば何のことはなく蛭子は、

「正面から堂々と、まあ、寄ってきた蠅の様なのは皆殺させただけだね」くるりと、かかとを軸に反転した奴は「紹介するよ」と目の前でこちらに切っ先を向ける少女に声をかけた。

「小比奈、おいで」

「はい、パパ」

ああ、見事な絆で結ばれた家族だ、ここに来る前に人を殺した事さえ知らなければ。

目の前の少女が短い刀を背中に仕舞い込むと、軽く跳び、テーブル

のど真ん中に乗り上げた。

「蛭子小比奈、十歳」

テーブルの上の彼女は可憐にスカート裾をつまみ上げる……幼い割に妙に礼儀は達者なものだ、さぞかし良い父親なのだろう。……少なくとも昔の俺に奴の様な父親が居れば、彼女の様になっていたかもしれない。

「私のイニシエーターにして……」娘「だ」

「……何の用だ」

「私もこの"レース"にエントリーする事を伝えたくてね」

「舞踏会じゃなくてレース？ 中世のジョッキーですか貴方は？」

「パパ、ほんとにあの煩いの、切っちゃダメ？」

「これが終われば、きつと彼女も来る、その時にすれば良いさ」

「分かったわ、パパ」

「さあ、本題に臨むとしよう」

気味の悪い沈黙が数秒流れ、奴は聖天子に目を向けた。

「"七星の遺産"は我々が頂く」

「七星の遺産？」

「そう、君たちが探すことになっているケースの中身だよ」

七星の遺産？ ……こう言う時に出る遺産なんてものは大概ロクなものではない、厄介ごとの濃厚な匂いがする。

「ルールの確認をしようじゃないか。私と君たち、どちらが先に七星の遺産を手に入れるか、そして掛け金は……」

……マスケラ、舞踏会用のマスクの中の双眸がギロリと動く。

「君たちの命で如何かな？」

「ぐちやぐちやうるせえんだよッ！」

先の金髪口バンダナが大剣を奴に振り下ろすのを見計らい、テーブル

ルの下を蹴り抜き、空洞になっている場所に潜り込む。

暗闇の中、突如真上から金属同士がかち合う音が聞こえ、即座にセンターラインの様にテールを横断するガラス面から覗けば、彼の大剣は何か弾かれ、宙を舞って行ったのが確認出来た。……彼女の刀か、いや彼女は刀を抜いてない。奴だ、奴が何か……

次の瞬間、誰かの号令と共に一斉に銃撃が始まった。

しかし、奴は無傷で立っていた、勿論彼女も。

銃弾が空中で止まっている、外から聞こえるくぐもった声によると、これは「斥力フィールド」、奴はイマジナリーギミックと読んでいるようだが。

奴の身を取り囲む銃弾は彼女が触れてもピクリとも動かない、煙を噴いている弾丸も存在するが……見えない壁の類だろうか。しかし、その力の代償に内臓の殆どをバラニウム製の機械に置き換えているらしい。

「……改めて名乗ろう里見くん、私は『元陸上自衛隊東部方面隊第七八七機械化特殊部隊』『新人類創造計画』……蛭子 影胤、信じるも信じないも君たち次第だがね」

奴は高らかな笑い声を響かせる……が、それはここまでだ。ポケットから手錠を取り出し、片方を自分の左手にかけ、もう片方を左掌に収める。

二度目の攻勢、ガラスのセンターラインを突き破り、左手の手錠を奴の片足にかける。この手錠の丈夫さに賭ける。

「ほう……何も感じていなかったのかい、君は？」

「こう言うのは慣れてるんです、あまり褒められたものじゃないですがね！」

子供たちとしての力をフルに発動し、手錠をかけられた影胤の身体

を持ち上げ、叩きつける。斥力フィールドに押さえ付けられていた弾丸が地面へと転がる。

「パパ!？」

やはり、十代である事には変わりはない、プロモーターと言う主に何かあれば行動が鈍くなる。今の内に彼女の制圧も、と、"左手"を伸ばしてしまった。

……何故左手が動く、手錠を繋いでいた筈の。

……そうか、俺の"手首が切断された"のだ、切り落とされた左手首からドクドクと溢れる血液を認識し、我に帰る。

押し寄せる激痛を歯で噛み殺す、まだ奴は起きていない、ならせめて手負いにしなければ……

……前に進めない、腹に何か引つかかっている……

しまった、刀だ。

腹から突き出た刀の刀身を追えば真っ赤に瞳を染め上げた彼女が居た。

「パパを……いじめるなあああ!」

ガストレアの因子を持つ俺にとって、バラニウム製の刀は致命的に過ぎる。咄嗟に右手で銃を抜き、自分の腹に銃口を押し当て、自身ごと彼女を撃ち抜く。彼女は咄嗟に刀を引き抜きながら下がったが、右脇腹に赤い染みが生まれている……だが、普通の弾丸である為、致命傷にはならないだろう。

彼女はまだ戦意を解かない、次に一对の刀が俺にすら視認不可能な

速度で食いかかる。

まるでハサミの様に突きつけられたそれを隣から飛び込んだ黒い銃弾二発が大きく震わした。

……多田島警部と里見君だ。

「……ツうあああああ！」

揺らいだ切っ先を大きく身を振り躲す、と同時に彼女の鳩尾に自身の尻尾を打ち付けた。……いや、まだ浅い。追撃を……そう思った次の瞬間、目の前の彼女を奴が大事そうに抱き抱えて、一瞬で窓際に現れた。

「大丈夫かい、小比奈？ もうそろそろ帰る時間だ、それに……これ以上は君たちにも迷惑だろうか？」

……視界の端に奴がぼんやり見える、霞んだ目を左手で擦ると、真っ赤に染まってしまった、ダメだ、頭が回らない。

「君は彼のイニシエーターかい？ 先程の奇襲、見事なものだったよ」

身体が前のめりに倒れる、ひんやりとしたガラスが暖かな血で染まっていく、それなのに体はどんどん冷えていく。……恐らく、分かった上で乗ったな、奴は……ああ、色々な怒声が聞こえる。

「また、君たちに会える時を楽しみにしているよ、後、里見くん、これはプレゼントだ、受け取ってくれたまえ、それと君の手はお返しするよ」

プレゼントボックスと、手錠のかかった手首がテーブルにポンと置

かれる。里見君が殴りかかろうとするが、それを蛭子は器用に回避していく。

「そして……ああ、私としたことが、名前を聞き忘れてしまった……君には、また日を見て会いに行かせてもらおうでしょう」

徐々に声が遠のく。

「絶望したまえ諸君、滅亡の時は近い」

そこで、俺の意識は途絶えた。

目覚めの狩人

世界は、英雄を愛する。

運命は、英雄を嫌う。

人の中に生まれた特別である彼等を。

英雄は望まれて生まれるのか、それとも、生まれたから望まれているのか、それは誰にも分からない。

狩人もまた、同じような存在だった、人間と言う種に害を齎す者らを化け物と定義し、それを狩る、それはあたかも化け物を殺す英雄として生まれた様にも見えるが、狩人と言う存在がたまたま化け物を狩り続けたから英雄になった様にも見える。

だが、そんな特別になつてしまった彼等に安寧の死など訪れる筈もなかった。

だからこそ願うのだ。

せめて次の者には安寧なる終わりを。

例え世界の理が変わろうと、次代の狩人へ向けて乞い願い続けよう。

安寧の死が彼等に齎される、その日まで。

??

「早く、早く救急車を！」

怒声と共に目を覚ませば、そこは先程までの会議室だった。……まるで嵐でも過ぎ去ったかの様な風景だが。窓の外の日差しを位置を確認すれば、そこまで時間は経っていない事は分かった。テレビの画面は真っ暗だが。

近くには携帯を片手に彷徨う警部や、とにかく救急車とやらを呼ぼうとする里見君、腰を抜かしていたままの民警の社長らが目に入った。

起きなければ……そうは思うものの、体全体が脱力し、その上やや粘り気を帯びた血のりによってテーブルに貼り付けられた俺は身動

きが取れない。

「あ……あ……」

声を出す。今にも消えそうな声とはこの事だなど、妙に客観視する自分が居た。

「……！ 大丈夫か！ アイゼン、もうすぐ救急車が来る、警察病院で治療を受けられる筈だ、意識をしつかり持て！」

「後、少しだ！ あと少しで救急車が来る！ だから踏ん張ってくれ！」

「警部に……里見君。心配させてしまった様だ、さつさと起きなければ……」

……さつきまで感じていた痛みは全くない、左手の感覚もある、「子供たち」の力による再生だろうか。先程の事は夢ではないかと錯覚してしまいそうだ。しかしこの状況がそうは思わせてくれない。

「わ……たしは、だいじょうぶ……ですよ」

「何馬鹿な事言ってるんだ！ 諦めるな！」

「いや、ほんと、ほんとですって……信じてくださいよ」

こんな問答が少し続いた後に、何とか俺は持っていたシュガーラスクを口まで運び、咀嚼する。

ゴクンと飲み込めば、だんだん体力が戻って来た、随分と早い物だが、これも子供としての力なのだろうか。

乾きかけの血のりを剥がし、二本の足でテーブルに立つ。

辺りを確認する。一部の民警は既に部屋に居なかった、奴を追ったか依頼を追ったか、それは分からないが、あの金髪口バンダナと三つ編みの少女も既に居ない。革ジャンを来た男と革ベストの少女はまだ居た、また唾然としている。

「アイゼン……？」

「はあ……ふう……こっぴどくやられましたけど、なんとか生きてますよ」

「……馬鹿野郎、心配かけさせるんじゃないやねえよ」

多田島警部も里見君も露骨に安堵している。天童君や革ジャン革ベストの金髪兄弟も同様にだ、いや、彼ら二人はともかくとして、残

る人は今日この場で会ったばかりなのだが……余程の人格者だろう。
「……すみません、テーブルから降りるのに手を貸してもらえますか
?」

「おお、分かった」

そうして彼らの手を握った時、事件は起きた。

……ボトツ、ボトツ、ボトツ。

……何の音だ? ……首を回してテーブルを覗くと、そこには角、
羽、尻尾があつた。

「付属品」[〃]としてではなく、「単品」[〃]として。

「嘘……」

天童君の声が静謐の中を駆け巡る。先程までの安堵の雰囲気に戻
して場の空気が凍りつき始めた。俺は頭の辺りを探るが、先程まで角
が生えていた筈のそこには毛髪が既に生え始めていた。

「ダメじゃねえか! やっぱり病院に連れて行くぞ、里見! お前さ
んも手伝え!」

「ああ、分かった! ……俺が信頼してるガストレアの専門家で、病院
の先生の知り合いがいる。そこ行くぞ!」

「待って! おんぶも抱っこもダメよ! それは絶対ダメよ!」

「どうしたんだよ木更さん! 今急いで……」

「彼女の背中側を見なさいよ! このままだと貴方達の変態でロリコ
ンの誹りを受ける事になるわよ、里見くんは手遅れかもしれないけど
!」

何事かと彼らが俺の背中を覗くと、彼らはまるで懺悔でもするか
の様に膝を折り、頭を下げた。……一体何が起きてるんだ。

……そう言えば、尻尾を出す為にズボンの後ろ側には大きな穴が
……あつ。

「全く、見てらんないっての！」

次の瞬間、現れた革ベストを着た少女が、腰の辺りを白い糸状の物でぐるぐる巻きにしてみせた、凄まじい早業だ。

「アンタ、アタシに感謝しなさいよねー！」

「ありがとう、貴女の名前は？」

「……私の名前は片桐弓月、……と言うか、あんなヤバそうなのに一人で突っかかるなんてアンタ馬鹿じゃないの!？」

金髪のゆるくふわりとしたツインテール、皮のベストや左右で違う靴下など、目立つ格好であるが、それもまた子供ながらに雷撃的な、形容し難い魅力を放っている。

「馬鹿な事でもやらなければケガ人の一人や二人、出てしまうかと。しかし結局、私と言う特大のケガ人が出ましたがね」

「……目の前であんなの見せられたこっちの身にもなりなさいよ！」

「まあまあ、そこまでで良いじゃねえか、マイシスター」

会話がヒートアップしつつあった所に割り込んだ革ジャンの男、恐らく彼女のプロモーターなのだろうが……

「オレっちの名前は片桐玉樹たまき、こっちの弓月とはペアであり兄妹だ、IP序列は共に1850位、さっきの戦い、見させてもらったが、アンタクレイジーだな！ かなりの覚悟が要るぜ、あの喧嘩ふっかけるのはな」

オレンジ色の特徴的なサングラス、革ジャンに金髪、弓月君と同じくかなり目立つ、恐らく自己主張が激しい性格なのだろう。しかし、「悪い人」と言う訳ではない筈だ。玉樹君に向ける弓月君の目には信頼が見えている。

「私自身、無謀だったと反省してます、左手斬り飛ばされるなんて二度とごめんですよ」

もう少しまともな策を練るべきだった、先に小比奈君の両足を手錠で拘束して窓の外に……いや、これは殺してしまいかねない、俺は今、警察なのだから、彼らの事をやがては逮捕しなければならぬだろう。

「だけどよ、その角と羽と尻尾、取り外しできるのか？ 流石に驚いた

ぜ？」

「そうだし、アレ、ほんと何があつたのかと思つたんだからね！ 別に心配した訳じゃないけど！」

「……私にもよく分かりません、だから、今から調べに行くんですよ。……そろそろ、別れの時間の様ですから、自己紹介でも。警視庁対ガストレア課、イニシエーター、アイゼン・バンカー警部補です、何かガストレア絡みでお困りであればご連絡を」

敬礼を済ませ、視線を切り返せば警部と里見君が話しているのが見えた。

「里見、お前さんその専門家に連絡取れたのか？」

「ああ、寧ろ興味深いから早く連れてこいだだよ。……悪いけど、木更さん、先に帰つててもらえるか？」

「ええ、分かつてるわよ、その彼女とあの仮面の男と里見くんとかどう関係してるかは後で聞かせてもらおうけど」

「……話せる内容だったら話しますよ」

「お話中失礼しますが、里見君、それは話さなければ話せない事があつたと言つてしまう様なものですよ、返しとしては十点です、……千点満点中」

「ほぼ0点じゃねえかよ……それ」

落とした角も羽も尻尾と、ついでに余つた左手を拾い集め、あまりにも猟奇的なスタイルになった俺はそれを持って多田島警部、里見君と共に車で勾玉公立大学院附属病院へ向かう事となった。

??

——東京エリア 車内

警部がハンドルを握り、里見君が助手席、俺は広い後部座席を一人で独占していた。

「それで、結局会議で空席だった人はどうなつてたんですか？」

「……………」

俺の質問を聞いた里見君と警部の表情に陰りが見える。……成る

程、当然来れない訳だ。

「……既に蛭子親子に殺されてましたか。殺人の容疑が増えましたね」

「はあ、全く、察しが良すぎるだろうがよ」

ハンドルを片手に頭を掻く警部。最早呆れすら垣間見える、慣れてしまったのだろう。

「ああ、最後に出て行く時、その社長の首をプレゼントだとか言っていていきやがった……アイツは人の命を何だと思ってるんだ！」

里見君の表情に見えた陰りには、怒りと恐怖。恐らくは怒りが優っているだろうが、奴の狂気と強さに一切の恐れがない訳ではないのだろう。だが、それは人として当然の事だ。……俺は怒りにも恐怖にもすっかり慣れてしまっているが、奴に勝てるかはまた別問題だろう。

「里見蓮太郎、お前さんの気持ちも理解できるが、今はまだ冷静でいろ、やれる事は山ほどある、目を曇らすな」

「確かに、そんな凶悪犯が首輪も無しに彷徨っているんです、最早ケースだけの騒ぎじゃありませんよ」

「分かってる……分かっているんだよ、そんな事くらい」

……このままでは突っ走ってしまいそうだが、俺が言えた義理ではないが。

「……ボコボコにされた私が言うのもアレですけど、無理はしないで下さいね？ あんなの“子供たち”の力があっても無茶なレベルだと思えますから」

「………なら、俺がこの手で、影胤を止める」

彼は右手をグツと握りしめていた。それこそ、血が滲みそうな程に、しかし血は一向に滲まない。

……もし、もしもだ、奴と言う化け物に通用する銀の弾丸があったとして、それを扱うのはただの人間に他ならない、それに、銀の弾丸であろうが、当然、人に撃てば殺してしまうのだから、彼の引き金は、より重いものでなければいけない。

「一つ、言っておきましょう」

「……なんだよ?」

「英雄の居ない時代は悲惨ですが、英雄を求める時代はもつと悲惨です、英雄なんてのは一部の人に都合良く狂ってくれた狂人ですよ? そうなればきつと、"奴"と同じ存在になるでしょうね。」

「だから……求められた英雄になんてなろうと思わないで下さい、誰かが奴を止めてと願ったとしても、貴方は選ぶ事が出来るんですから。……奴を倒すも倒すまいも、私はその結果、受け入れますよ」

狩人の人生の中で得た僅かながらの教訓だ、彼の役に立つかは分からないが。

??

——東京エリア 勾玉公立大学院附属病院

「こんな所に例のガストレアの専門家がいんのか?」

「かれこれ先生には十年位は世話になってる、知識量で言えば東京エリア一位だろうな」

まるで死体安置所のようにひやりとした薄暗い廊下を歩いていると、その奥に金属製の大扉が見えてきた。あそこが目的地だろう。

里見君が大扉に手をかけ、通い慣れた家の様に軽やかに開けていく。俺達もそれに続き、中へと入っていく。

まるで手術室の様な四角いタイル、透明なカーテン、標本やガストレア絡みの本、薄暗い室内の照明と合わせれば正に恐怖の館と言った所だろう。何か壊して弁償騒ぎなんてのはごめんだ、慎重に歩みを進めて行こう。

「なあ、こりや一体なんなんだ?」

警部が手術台の上に乗った灰色の袋の中身を問う。僅かに感じる死臭と縦長の袋の形から中身は察しがつく。

「……多分、それは遺体だと思いますよ?」

「……そうか」

警部は警察の性か、遺体の前で手を合わせ一礼していた。俺もそれに則り、一礼。

その手術台より更に奥に行けば、回転椅子に座る人影が一人、目に入った。

「良く来てくれたね、里見君、多田島君、アイゼン君」

椅子をグルリと反転させ、立ち上がったその人は、女性であった、波打つ臙脂色の髪に、やや不健康そうな顔色ではあるが、それでも尚美形である事が窺える。

「どうして私の名前を？」

「君が今身に付けている首輪の開発者は私だ、だから君の事は体の隅々まで知り尽くしていると言っても過言ではないね」

「あえて何も言いませんよ？」

「なかなか冴えた目をしている子だ、このドーナツでも如何かな」

血の付いた白衣をヒラリと翻した彼女は、奥から膿盆に注がれたゲル状の紫色をしたシチューを持って来た。少なくとも食欲は誘われない、吸血鬼のディナーの方がまだ目に優しいだろう。

「中々に趣深い食品ですね、死臭と腐臭が入り混じってますよ、ゾンビの腐肉に比べればマシですけど」

それをスプーンに取ってとつと口に入れる、男衆は顔を青ざめさせていたが、腐乱した死体の肉よりかはマシだろう。

「……そのゾンビの腐肉の話、後で聞かせてもらおうか」

「ならまずは、貴方の名前を聞きたいのですが？」

「ああ、失礼したな、私の名前は室戸堇、むろとすみれここの法医学教室の室長を務めさせてもらってる、趣味は解剖と映画と18禁ゲームだ、よろしく頼むよ」

「……先生、そりゃ初対面の奴に言う事じゃねえよ……」

呆れる里見君を尻目に彼女は卓上のケーブルを手に取ると、それを俺の首輪と、彼女の手元にあるパソコンに繋いだ。

「まずは、これを見てほしい、彼女のバイタルデータだ」

パソコンの画面に映し出されたのは、俺のバイタルデータとやららしい。

「……この一番下欄にある『浸食率』これが今回の原因だろう」

「浸食率……49・5%?!」

「おいおい、こりゃあ……」

里見君が妙に驚いている。何かあったのだろうか、俺は生憎字は読めない、多少の英語なら分からなくもないが。

「年齢は君自身も分かっているらしいが、普通、子供たちと言うのはガストレアウイルスを抑える様に働く抑制因子を持つ、しかし、それはウイルスの進行を遅らせるだけで、ウイルスの浸食率『50%』を越えれば、殆どの生物が『形状崩壊』を引き起こしガストレアになる。ここまでは良いね?」

「……って、さっきそれが49・5%って言っていましたよね?」

「まさか……知らなかったのか?」

彼女が唾然とし、伶俐そうな面構えが少し崩れる。

「ガストレアになるかならないかのボーダーラインがあるのは薄々感じていましたけどね、まさか50%だとは」

「なら、尚更に説明しなければならぬ……まず、浸食率が上がる条件として、時間経過だ、何もなくても時間が経てば浸食率はかなり緩やかにだが、上昇する、しかし多くの学説においてこの時間経過のみでは寿命の内にガストレア化はしないと論じられている」

……なるほど、外周区の子供たちであつても十分に生き残れる可能性は存在しているのか。

「次に力の解放、『呪われた子供たち』としての力や治癒能力を使えば、その分浸食率は上がっていく、だからイニシエーターになった子供たちにはその能力の行使の際の急激な浸食率の上昇を抑える『浸食抑制剤』が配布され、定期的に注射するんだ」

これはイニシエーターには避けて通れない問題なのだろう、力を振るえば振るうほど奴らに近づく、なのに何故、彼女らはイニシエーターになったのだろうか。金か、身分か、自身のためか。

「最後はガストレアにより直接ガストレアウイルスを注入される場合だ、この場合はほぼ助からず、ペアのプロモーターなどに介錯されるケースが多いね」

……もしかして、あの森で見た二人の遺体は、やはりそういう事だったのだろうか。

「つまり、成長に比例して浸食率は上がっていくしかないと言う事ですか？」

「そうなるな、今までは、と言う言葉が頭に付くがね」

そう言う彼女に彼女は更にパソコンを操作し始めた。

「最初に君が投獄された時、私が君の浸食率を測ったんだが、これが驚きだね」

「投獄、ってお前そんな事になってたのか……」

丸椅子に座る俺に呆れた様な、哀れみの様な視線を里見君が向けてくる。あれは仕方なかった事なので、特にどうも思っていない。恨み言の一つや二つ、あれは冗談でしかない。

「まあ、色々ありましたからね」

「……君の最初の浸食率は"51.8%"だった、これを見た時私は腹の底から大笑いしたさ、突然こんなふざけた存在が現れたんだから」

「51.8%!?」

「それ、私既にガストレアになってないとおかしくないですか？」

「そうだ、だから君の事は安全だと評価させてもらった訳だ。……これで私の言いたい事は分かった筈だ」

「50%を超えていた浸食率が下がってる……って事ですか？」

「そう、だがある程度推論は出来る、この二日間のバイタルデータを見てほしい」

「まず、1日目、つまり最初に首輪をつけた日、その日の最終記録には浸食率は52.0%になっている、この上昇率の時点で異常だが、まあそれは置いておこう」

「それがなんで今日、ここまで下がったんですか？」

「その原因は、今日のバイタルデータを見れば分かる」

パソコンの画面には浸食率の増加を確認する為のグラフが映っていた、文字ではないおかげで俺にもある程度分かる。グラフが丁度半分の所でガクリと下がっている。

「この時間帯は……こいつが奴らと戦った時間帯じゃねえか」

「里見君から話は聞いている、何でも、腹に穴を開けられた上に手を切り飛ばされたそうだね、今再生している事を考えれば、君は再生レベルⅢのイニシエーターでもある様だ、ますます興味深い」

「再生レベル……？」

「再生レベルとはガストレアの生体である"再生能力のレベル"を表す言葉さ、これはイニシエーターにも使われる基準でね、レベルⅠはバラニウムにより簡単に殺せる、殆どのイニシエーターはこのラインにいる。レベルⅡはバラニウムの再生阻害を押し返せるが、首を切られたり焼却されると絶命する。レベルⅢは欠損した部位が生えたりくつついたりする。レベルⅣは内臓の殆どを喪失しても再生し、全細胞を滅却しないと倒れない。レベルⅤは分子レベルからでも再生し、現代科学では殺せない相手だ」

……あまり考えたくはないが、それはつまり、試された子供たちも居るのだろうか、ガストレアとの通常の戦闘から判明した事実であつてほしいが。

「で、何で奴らと戦った後、一気にアイゼンの浸食率が下がったんだ？」

警部がいち早く問いかける、どうやら警部もかなり気になっているようだ、問いかけに迷いが無い、ベテランの警察の風格がある。

「その秘密は、彼女の身体にある筈だ。彼女がそうした力と再生能力を一気に解放した結果、このグラフで見れば分かるように浸食率が一気に"増加"している、しかし、その反動と言わんばかりに"減少"している。この上がり幅と下がり幅を足せば、浸食率はこの間に約1.2. 5%も急激に変動した事が分かる、5%上昇し、7. 5%減少した、結果はマイナス2. 5%だ」

「5%の上昇……ただ、力を使ったり、再生しただけで？」

「その上昇幅も通常ではありえないものだが、何より問題なのは減少幅だ、これはつまり、急激な浸食率の上昇に対し、カウンターの様に働きかけ、浸食率を大幅に下げる、いわば、抑制因子を超える様な存在、"超抑制因子"を有しているに他ならないだろう」

「超抑制因子……それがあれば、他の呪われた子供たちも救えるかもしれないのか？」

里見君は反射的に質問をぶつけていた、彼にも何かさし迫った事態があるのだろうか。

「彼女の中にある超抑制因子を解析する事が出来れば、呪われた子供たちを救う方法も見つかるだろう。こちらでも、個人的に調べようとも思っている、だが、今回は別の話だ」

回転椅子を里見君の向きから直した彼女は、より一層深く背もたれに身体を預けた。

「……私の角や羽、尻尾の事ですか？」

「君のそれは、体内にあるガストレアの因子の影響が強く身体に現れた故に生まれた物だ、つまりそれらが壊死し、剥離したのは、君の中のガストレアの因子が超抑制因子によるカウンターで減少し過ぎた為に、身体に影響を及ぼせなくなったからだろう、増えた細胞や身体のパーツは、ほぼガストレアウイルスの増殖能力により増えた細胞に構成されているからね」

「……呪われた子供たちの力の源は、ガストレアウイルス。角を始めとしたそれらの部位が失われたと言う事は、ウイルスが体内からなくなっていると言う事……つまり」

「君は"力の発現を行えば行う程"、"子供たちの力を発現出来なくなる"、本当に唯の子供になってしまおうと言う訳だ、君もどこかで感じていたんじゃないか、自身の能力が落ちていつている事を」

最初のモデルスパイダーとの戦い、あの時、俺は止まった時間の中にいる様な集中力を発揮できていた、感覚の濁流に酔いそうになったが、それが無ければ、他のガストレアが集まっている事にいち早く気付く事は出来なかった。二回目のガストレアとの戦いでも道路を踏み抜く程の脚力は発揮できていた。

「確かに、私が最初に目覚めた時は、意識を集中すれば時間を止めた様に観察出来ますし、力も十分に出せました、感覚も酔ってしまう位鋭敏に感じとれてました、ですけど、まだ浸食率は"49.5%"もある筈ですよ？」

「……君の場合、超抑制因子の働きの所為で普通の子供たちと比べて、ウイルスの活性化に伴う超人的な力の発現に必要な浸食率の下限が異なっているのかもしれない、君が十全に力を発揮出来るのは恐らく浸食率50%以上の時だろう」

「……呪われた子供たちでありながら、その力を使えない、つまり役立たずと言う事ですか、アイゼン・バンカー砂地のアイゼンの名に恥じませんか」

「君が今の状態で能力を使おうとしてもそれはかなり運動の出来る小学生レベルでしか出せないだろうね、再生能力も同じレベルに落ちていると考えれば、君が鉄火場に出向くのはおすすぬ出来ないな」

「……せめてこの身が大人であれば、この体に十分に慣れれば、などと益体もない事を考えてしまふ、どうせそんな事を言った所で意味が無い、結局は今出来る事を探すしかない。」

「……浸食率を回復させるには？」

「……どうやら君は頑固者みたいだな。……超抑制因子は君が時間経過によってゆっくり浸食率を上げる分には作用しない。だから、待っておけばいつかはまた戦線に復帰出来る。後、もう一つ手段はある」「どんな手段ですか？」

「『浸食抑制剤』、これを使えば、能力を発動した時、浸食率の上昇は緩やかになる。ゆっくりと浸食率が上がる分には、超抑制因子の働きには引つかからない可能性は高い、本来の目的とは真逆だが、これを戦闘の前に使えば、ある程度は浸食率をキープ出来るだろう、しかし、超抑制因子が存在する以上は上限がある筈だ、だから、君のフルスペックには届かないだろうがね」

「……最高能力を叩き出す為には、やはり他の手段が必要と言う事ですか」

「いくつか考えはある、ガストレアを食うか、呪われた子供たちの血でも分けてもらうか。いくらガストレアウイルスが身体を健康に保つとは言え、不衛生極まりないのがやや不安材料ではあるが。」

「今、私から言える事はこれで終わりだ、早く帰って仕事をこなすと良

い……後、これは選別だ、受け取りたまえ」

席を立つた俺に、彼女はジャケットのポケットにピツタリ入りそうなプラスチックの小箱を渡してくれた。案外彼女は面倒見の良い人柄なのかもしれない、彼氏でも居れば、尽くすタイプなのだろう。

「色々と、ありがとうございました、……ゾンビの腐肉の事はまた、用事が終わった時にでも話しに行きますね」

「ああ、私は首を長くして待つとしようか。諸君、健闘を祈っているよ」

「後、このシチュー、ご馳走様でした、次も楽しみにしています」

「……ふふっ、そうか、なら次も手塩をかけて作ろうじゃないか」

彼らは驚愕していた、何にかは分からないが。

各々が礼を済ませ、この部屋を後にする。因みに身体のパーツは、彼女が調べたいと言うので全て預けてきた、手錠はもちろん回収したが。

丁度勾田公立大学院附属病院の敷地から出た所で里見君は、イニシエーターの藍原延珠を迎えに行くといいこの場を後にした。残された俺たちと言うと……

??

——東京エリア 勾田署 "実験室"

勾田署の隅に追いやられた一室、そこに入った瞬間、濃厚な火薬、それに鉄の匂いがもわりと鼻腔に流れ込む。思わずむせ返りそうになったのは隣の警部も同じであったようで、ジャンパーの襟で口元を塞いでいる。

ここは、東京エリアに起きうる凶悪犯罪に対抗する為に生まれた特殊武装開発室と呼ばれる部屋である。

しかし、ここで時々開発される常軌を逸した様な発明ばかりが目を集めたり、実験に使用された警察官が恐怖の体験談を流布してしまった結果、通称"実験室"と呼ばれており、署内の人間から恐れられているらしい。そして、この部屋に入って来た途端、煤臭い作業着

で出迎えてくれた女性が……

「おお！ 多田島警部、連絡した時刻通りに来るなんて相変わらず真面目ですね、少し頭のネジを緩めたらどうですか？」

短めの髪を振り回して荒ぶる彼女、そう、彼女こそが、この室長であり開発主任、"グリス・マークスマン"……実名かどうかは定かではないが、元狙撃手だったらしい彼女はガストレア大戦の際に、何らかの理由でガンスマス、そこからこの武器職人に転向したと警部から聞いていた。

「お前は緩めすぎだ馬鹿野郎！」

「ほらほら！ この火薬の匂い嗅げばハッピーになれますよ、現に私はハッピーですよ、この上なくね！」

「……マトリにでも突き出してやろうか？」

「……この人が例の役立つ武器を作ってくれる人ですか？」

「ああ、残念ながらな」

「！……おお、貴女が噂の新人さんですか、角とか生えてるって聞いてましたけど、取れたんですよね！ 痛かったですか？」

「いや、別に」

「……おい待て、いきなり話が逸れてるぞ」

警部の草臥れた服がより一層草臥れる前に話をつけよう。

「私の名前はアイゼン・バンカー、警部補やっています、よろしくお願ひします」

「私の名前はグリス・マークスマン、この特殊武装開発室の室長で開発主任やっています、以後お見知り置きを！」

ツナギに留めた重そうな工具類をテーブルに乗せ、驚くべきスピードで俺たちの前に飛び出した彼女は勢い良く挨拶した。

「で、今回の話はもう電話で説明した筈だな、改めて言う必要もないだろうが」

「はい、私に多田島警部から連絡があった時、何事かと思ってたんですけど、まさか警部の口から"新人類創造計画"なんて言葉が飛び出すとは思いませんでしたよ、それに、そんな人に私の武器が向けられるなんて……へへへ、光栄ですね」

「俺もお前さんを頼る事になるとは思いもしなかつたさ」

「と、言う訳で今回の開発テーマは……」

と一旦区切った彼女はジャカジャカジャカジャカ……と、謎の口ドラムロールを披露しながら、ブルーシートが掛かった車輪付きのテーブルを俺たちの前に運ぶ。

「……『応用』です！」

彼女がブルーシートを取り払うと、そこには、五つの武装が二セットずつ並べられていた。

「まず、一つ目が、私がカスタムした原型皆無の"レミントンM870"、ショットガンで、名付けて"アローヘッド"！ H&KのUSPを改造フォアグリップの両サイドのレールに装着、更にその下部には四角錐型の銃剣を取り付けている重量過多仕様なので前後に思いっきり揺すれば"片手"で排莖出来ちゃいます」

ショットガン……確かに近距離で戦うなら必要に違いない、ましてや今の俺は力負けする確率が高い、尚更に銃器に頼る必要があるだろう。しかし、何だこの見た目は、もはやクロスボウではないか。両サイドにハンドガンを取り付ける必要はあるのか。しかもショットガンに銃剣、一体どんな発想だろうか。更にストックから銃剣を含めれば私の身長を上回るぞこいつ。

「USPには通常の弾薬を、ショットガンの弾薬には"ビーンバグ弾"と、もう一つ、"ドラゴンブレス弾"を用意してあります。私のとっておきで、"子供騙し"にはピッタリですよ！ 後で射撃場で試し撃ちしましょう！」

「……嫌な予感しかしないとおきですね、私を死の商人にでも転向させる気ですか？」

「……ふっふっふ、それは後のお楽しみです。二つ目がバッテリー増強済みの"テザーハーブーンガン"です、全長は先程のアローヘッドより短いですが、二股槍の様な穂先を強力なばね仕掛けで打ち出します、刺されれば一般人であろうと子供たちであろうと、電撃を流し激痛を与える他、電流が神経を"インターセプト"、つまり神経間を流れる電気を阻害する為、発射スイッチを押して電流を流し続ければ、

相手は動けなくなりませす。後、このハーブーンガンに繋がってるバッテリーは取り外して別の事にも使えますよ」

ハーブーンガン、本来火薬を使う所をバネで代用したと言う事は、当然弾速にも難があると云う事だ、利点だけ聞けば十分にも思えるが、下手をすれば唯の人間にすら回避される可能性もある上に、銃と本体を繋ぐケーブルを断ち切られればそれこそ唯の銃になつてしまふだろう。二人一組の彼等に通用するか怪しい所ではある。だが、

「……おっかないですね、この武器」

「三つ目が長時間継続するスモークグレネード、これは特に言う事は無いですけど、シンプルな分応用を効かせられると思いますね」

視界を塞ぐと言うのは、時間を稼ぐ為の常套手段だ、視界を隠した間に即座に罠を仕掛けたり、逃げたり、それこそ何にでも使える。しかし、感覚の強化されている子供たちと斥力フィールドで煙ごと吹き飛ばせそうな奴に、どこまで通用するのだろうか。

「やっと普通のが出て来ましたね……」

「四つ目がこの直径5mmの高耐久鋼鉄製ワイヤーです、使い道は色々ですよ！縛ったり、簡易のトラップにしたり、煮るなり焼くなりって奴ですね！」

……リールに巻かれた細く頑丈なワイヤー、色々使い道はあるだろう、頭を使う必要はあるだろうか。

「最後がこのC4爆薬です、粘土代わりに遊べますよ、署内に置いてある古き良きピー○君人形は私がC4爆薬で作った物です。後、2・5秒程で起動する雷管と即座に起動する雷管を十本ずつ用意しているので、このテザーハーブーンガンに繋がってる外付けバッテリー装置に雷管を取り付ければ起爆装置に出来ますよ！」

C4爆薬、粘土状の爆弾らしく、様々な場所に使用する事が出来る。対人戦において使用出来るチャンスがあるかと言われれば謎ではあるが、武装としては十二分な性能を有している、しかし前半に言った言葉は本当なのだろうか。

「……この人逮捕されないんですか？」

「こんなんでもガストレア大戦時の英雄の一人と呼ばれてる、不思議

なモンだな、だがその〇ーポ君人形は処分しとけ、上にその事チクるからな」

「そ、そんな殺生な、私はただ署内を楽しく愉快にしようよ！」

「別の意味で愉快な事になるだろうがよ馬鹿野郎！」

怒られた彼女は妙に演技がかった啜り泣きを披露しながら更に奥、作業室のドアに収まっていった。

「英雄ってのはどいつもこいつもイカれてますね、いつの世も、いつの時代も」

「はあ……他の荷物取ったら射撃場に行くぞ」

「他の荷物？」

「『浸食抑制剤』だ、受け取り先がこの警察署になってな、まあ次からはアパートに来る事になるがな……後、外で着れる筈の服が軒並み改造されてる奴だからな、一日署長の時や地域のイベントなんかに使っていた子供用の婦警の制服を取りに行く、流石にそのまま糸でグルグル巻きにするのも問題だ、服屋で今後着る服をいくつか買うつもりだが、身体的特徴が無くなった以上、これからは制服で身分を表した方が手っ取り早い。……まさかこんな事になるとは思わなかったがな」

「そうですよね……まさか身体の一部が簡単に取れるなんて思いませんよね」

「まだまだ分かんねえ事ばかりなんだろうよ、俺たちもお前たちも」

「……そうですね、いつか分かれば良いと、そう思いますよ」

その後、試し撃ちを終えた俺たちは、荷物を全て受け取り、トランクを満杯にしたセダンで帰ることになった。

ひと時の平穩

——東京エリア 内地

あれから俺は、署内で一日署長と言う謎の文化に選ばれたジュニアアイドルなどが着る子供用の制服を着て少しばかり署内を歩いてみたが、俺が俺である事に気付いた警察官はほぼ居なかった、子供の悪戯と勘違いするか一日署長の類かと勘違いするか、しかし、あの牢屋で話し相手になつていた監視役の警察官はいち早く気付いて「貴様、その格好はどう言う了見だ!」と、怒り狂つていたのが印象的だ。……俺は付属品で判別されていたのだろうか、と若干気落ちしていたが分かつてくれる者も居て何よりだ。

そんな事を思い起こしつつ、俺は締め切られた和室の姿見の前に立っていた。

俺が今着ているのは背広タイプの制服らしい、他にも種類はあるが、これが一番警察官らしい服になる。勾田警察署からこれを持ち出す際に例のパンク風の服を用意した何者かが、既に俺の身体に合わせ作り替えていたと知った時は言い様の無い悪寒に襲われたが。

袖には金のラインが入っているが、紺色の制帽には何も入っていない、肩からはモールと呼ばれる紐に警笛が繋がっており、紺色の背広の下のベルトの上に巻いた黒い帯革にはホルスターや警棒、警察無線をホルルド出来るらしい。

スカートには動き易くする為に深いスリットが入れる軽い改造が施されている、諸々が見えかねないその都合で下には真つ黒なタイツかスパッツを履く必要があるのが難点だ。一応制服の体である為、靴は黒いローファー、グレーのネクタイも必要であり、やや動きにくい。……そう言えば、里見君の服は上下スーツだったな、あれは動き易いのだろうか。

「ふう……点検終わり」

誰もいない和室で独り言ちる、ボロボロになったパンク風服から携帯等の中身を抜き取り用済みの服はゴミ袋へ、抜き取った物は制服に収め、脱ぎ散らかした制服をハンガーに掛ける。

……が、その作業は即座に滞る事となった。

小箱、そう、彼女が饑別にと渡した物である。その中身を検めようと上下に開いたその箱から、ひらりと紙切れが零れ落ちた。

「……これは、数字……電話番号と言うやつですか」

紙に書かれていたのは数字の羅列、まだこの世界の常識に慣れていない上にまともに字が読めない俺でも、なんとか数字は分かっていた、電話に数字の羅列を利用する事も彼に携帯電話を貰った時に聞いていたのだ。

電話画面に入り、数字を入力し、発信、操作方法は聞いただけではあるが問題無く動かせた。

この板の先に何が待ち構えているか、大方の想像はついていたが、それでも未知の文化や道具に触れていると言う事実は、自身を心の底から昂らせていた。

「ふふ、ふふふ……」

思わず気持ちの悪い笑みを浮かべる程には。画面に映り込む自身の恍惚とした表情に思わず後退りしてしまった。

プルルル、プルルル、と鳴く電話を手に、眺める事数度、次の瞬間には、今日聞いたばかりの音が鼓膜を打つ。

『やあ、待っていたよ、アイゼン君』

「やはり、貴女でしたか」

『今回は、君と一対一で話しておきたい事があってね』

「……手短かに、お願いします」

『そうか、ならまずはその箱の中身だ』

俺は小箱の中身を更に検める、中には赤色の液体が入った四本の小さな注射器が箱にピッタリと並んでいた。注射器にはAGVと言うアルファベットが刻印されている。

「このAGVと言うのは？」

『それは"AGV試験薬"と言って、本来の目的は人間がガストレアの回復能力を手に入れるのを目的とした代物で、確かに回復能力は得

られるが、一本につき20%の確率でガストレア化する為、生きるか死ぬかは運次第と言う危なっかしい物だよ』

「……浸食率を上げたい時はこれを使えと言う事ですか」

『君の力を急激に引き出すには、やはりガストレアの因子を取り込むしかない、しかし、そんな力業を行えば超抑制因子により更に大きく浸食率が減少する。つまりガストレアウイルスが不活性化し、君は無力化される』

「機を見て使いますよ、どれだけ効果的な道具でも使い方を誤ればゴミ同然なのは良く知ってますから」

狩人の真の武器は、あらゆる道具を使いこなすセンスにあると言われていて、勿論、狩人皆がそうである訳ではないが、余程の腕が無ければ多種多様の化け物に一本の獲物で対応するのは土台無理な話なのだ。

『……私がとやかく言う必要も無さそうだな、なら次は君の因子についてだ』

「私の因子は私も知らなかった筈ですが……」

『勿論、君が持つて来てくれたサンプルのおかげだよ。角からは「山羊」、翼からは「蝙蝠」、尻尾からは「蜥蜴」の因子が確認された。君は複数の因子を持った中々珍しいケースだ』

……なるほど、流石にアレはこの世界には居ないらしい。

安心と寂寥の混じった吐息が少し漏れる。

「……山羊は脚力、蝙蝠は音をより高感度に察知する、蜥蜴は再生能力、と言った所ですかね」

『ほぼ正解だ。蜥蜴の力に限っては、「再生中は体力をかなり消費する」と付け足しておくといい』

目覚めた時身体を動かせなかった倦怠感の正体は、この再生能力だったと言う訳だ、しかし、大きな怪我を負えば敵の目の前で力尽きるとは、危なっかしいにも程がある。……体力を回復する為の食料を常に持つておくべきだろうか。

「厄介な物ですね、大怪我を負えばそれだけ体力を消耗するという事ですか」

『普通の人間も同じようなものだと思うが？』

「まあ、そうですね」

『そして、最後に一つ。君の血を採血した時、君の血の中には普通の人間の許容範囲を遥かに超える高濃度の"銀"を検出した』

「銀？ ……どう言う事ですか」

『それは私にも分からない……だが、ただ一つだけ言える事がある。それは君がかなり重度の銀中毒になる可能性だ』

……銀中毒については俺の世界で何度も目にした事がある、俺たち狩人が使う銀の武器を加工する職人の中には、その銀による銀中毒で"皮膚が青白く"染まっている人もいたからだ。

「銀中毒……あの皮膚が青白くなる中毒症ですか？」

『よく知っているね、概ね君の認識は合っている、が、君のそれは過去の銀中毒患者の銀暴露量と比べても桁が違う、アリと象くらいは違うだろう』

「だとしても、今はそんな皮膚が青白くなるなんて事……いや、"まさか"！」

『ああ、その"まさか"だよ、君は臓器不全や失明のリスクを孕む銀暴露量に既に達しているが、それでもその身体を健康に保っているのだよ、……"ガストレアウイルス"がね』

「……だとすれば、私の浸食率が下限を下回り、ガストレアウイルスが不活性化すれば……」

『ああ、そうなれば君は銀中毒により、間もなく多臓器不全を起こし、"死"に至るだろう』

「……浸食率を下げ過ぎても、上げ過ぎてもいけない、そう言う事ですか、全く、とんだ爆弾を背負ったものですね。ですが、何故わざわざその話を私に？」

『……少なくとも君はこの事実を受け入れ、それでも進むと確信したからだ。確かに、君の境遇には十分に同情の余地があると私も考えている、だが、君はここで燻る気はないんだろう？』

……彼女は、恐ろしい程目が良いらしい。

「慧眼ですね、それは当然ですよ、負けっぱなしは性に合いません」
『ふふっ……応援しているよ、小さな勇者君』

「……私としては、勇者と言うより、狩人と呼んでくれた方が嬉しいんですけどね」

『そうか、なら小さな狩人君と呼ばせてもらおう』

「なら私は貴女を世話焼きな魔女とでも呼びましょう、魔女に魔法をかけられた狩人は、狂人を血みどろの戦いの末とっ捕まえる訳です、血生臭い昔話の出来上がりですよ」

『全く、君は予想以上に動じないな、本当に十代かい？』

「十代の自覚がないだけでキッチンと十代の身体ですよ。……話は終わりですか？」

『ああ、これで全てだ、私はここから君の健闘を祈っているよ、小さな狩人君』

「ありがとうございます、世話焼きな魔女さん」

その言葉を最後に会話はプツリと切れた。

電話の電源を切り、テーブルの上に置く。

確かにこの先は随分な茨の道だが、地団駄踏む余裕などは無い、勇者は茨の道の痛みを堪えて突き進むだろうが、俺は狩人だ、鉄の靴を履き、茨の道など踏み倒す。それが賢しき狩人の、理想の生き様だ。その為にまず出来ることは……

「……まずは着替えと料理か」

半裸で部屋をうろついていた事に今更気付き、取り敢えず華やかさなどかけられない灰色のスウェットに着替えを済ませ、夕方に迫り出した時刻を見た俺は冷蔵庫の中身に入った物と今日も睨み合いながら料理を始める。

茂徳君は、と言うと、スーパーに買い出しに行っている。明日は警部が勾田署で蛭子影胤や新人人類創造計画に関する資料を調べに行くらしく、字の読めない俺には当然アパートで待機が言い渡された、散歩に行く程度は大丈夫らしいのでそこまで気にする必要もないのだ

が、念の為食料は必要である、現時点で給料日ではない俺の収入は茂徳君からのお小遣いである事は言わずもがな、少なくともはないが、一応と言うことで、腹を空かす事がない様にと言う彼の気遣いでもある。

俺は僅か着任2日目にして、このキッチンの勝手にすっかり慣れてしまっていた。踏み台の上で『魔弾の射手』より『狩人の合唱』を鼻歌で歌いながらシンクに野菜の皮を転がしていく。

??

「お帰りなさい、しげとくん」

「……そう言えばお前はプライベートではそう呼ぶんだったな、随分前の事みたいに見えるよ」

「今日は色々ありましたね、愉快過ぎて一周回って気が滅入りますよ」
「民警の仕事ってのはあんなのばかりなのかねえ、命がいくらあっても足りねえよ」

「私も驚きでしたよ、初日にあのザマになるとは思っていませんでした、次はもう少しマシンに戦いたい所ですね」

今日を振り返るような会話を二言三言と連ねながら、二人で食卓へと足を運ぶ。

「いただきます」

電灯の明かりが照らす食卓に並ぶのは、カレーライスとサラダ、手がかかった物ではないが、不味くはない筈である。

「どうですか?」

「……普通に美味しいが、どうかしたか?」

「このイギリス式であろうカレーは初めて作ったので、少し不安でした、私も貧乏舌ですから、しげとくんがそう言ってくれたら安心ですね」

食卓の端に置かれたテレビリモコンでテレビを起動すると、何度何かの番組が始まろうとしていた。

「何ですか、こんな少女が物騒な武器持ってますけど……モデルはイニシエーターですかね」

「これか……『天誅ガールズ』ってアニメだな、署内にも何人かファンがいた気がするが、内容はよく分からねえな」

「アニメ？」

「まあ、簡単に言えばだな、絵を動かすのがアニメだ」

「なるほど、『哀れなピエロ』、のようなものですか」

「なんだ、そりゃ？」

「……いえ、なんでもありませんよ」

……アニメに合わせて歌が流れ、それが戦う少女と調和する事により、より彼女らの戦いがヒロイックに演出されている。

「本気じゃないと決めつけないで、ですか、中々深い詩ですね」

「……このアニメに興味あるのか？」

「少し、気になります」

ならばと、リモコンを置いた彼に頭を下げつつ、テレビに視線を移す。

オープニングとやらが終わり、いよいよ話が始まった。

天誅ガールズとはその名の通り複数人で構成された組織の様で、何種類か、色の名前を冠した少女が登場していた、恐らく天誅レッドと言うのがリーダー格なのだろう。

この作品のあらすじを聞くと、どうやら義父を殺された主人公が復讐を誓い、全国の魔法少女とやらを集め、義父を殺した仇敵の屋敷へ討ち入りすると言うストーリーらしい、……この見た目でこの話、アニメとは奥が深いものだ。いや、深いのは業なのかもしれない。

??

……話が佳境に差し掛かり、戦闘に入った魔法少女達は皆一様に物騒な獲物を取り出し、血生臭い戦いを繰り広げ始めた。猪の様に突撃するレッドとグリーン、それを補佐するピンクとブルー、遊撃に当たるブラックとバイオレットと、戦闘の中であつてもキャラの特性が

しつかりと描写されている事には、思わず拍手を送りそうになった。「レットの剣捌きも見事ですけど、ブルーの堅牢さやバイオレットの老獪さはより凄まじい物がありますね、番傘と鎖鎌……面白い武装です」

「随分と楽しんでるじゃねえか」

「こうして見てみると、思った以上に見応えがありましたから、恐るべしです、日本のアニメーションは」

やがて戦闘が終わり、話がまとめ上げられ、エンディングとやらが始まった。聞けば、オープニングに比べ、よりメッセージ性が強い歌詞であった。

世の中の理不尽に抗うには、自らが導き出した"真の正義"が必要で、どんな困難も、逆境も、"心"が無ければ倒せない。

それはきつと、この歌詞を描いた人の理想の世界なのだろう、だからこそ、これを見る人に伝えたかったのだろう。

「しげとくん、貴方は、何をもって他人の善悪を決めますか、法律ですか?」

「……………」

皿へと伸ばしたスプーンをピタリと止め、彼は黙り込む。

「法律は守る必要がありますが、守る必要があるからと言ってそれが唯一無二の正義とは限りません、もしそうなら、悪法なんて言葉はこの世にありません。」

……だから結局は、何が善いのか悪いのか、それは自分で決めなくてはいけません、私は有象無象の物差しで決める気はさらさらありませんから。勿論、決めた善悪には、それだけの責任も伴いますがね」「つたく、つくづく子供らしくねえな、お前は」

「大人らしさと同じですよ、社会に決められた感性で物事を判断し続けければ、いつかは社会に飲み込まれますよ、社会の歯車君?」

「余計なお世話だよ、馬鹿野郎」

……理不尽を

……困難を

……逆境を

多くのそれらは心に巣食う化け物によって生み出されていく。

だからこそ、それを撃ち抜く"銀の弾丸"が

……" 勇気ある心 " が、必要なのだ。

??

——午前七時

「おはようございます、しげとくん、服は準備しておきました、弁当と言うのも用意しましたから、ちゃんと持って行って下さいね」

「ありがてえ、が、なんでそこまで手際が良いんだ？」

「私は、そうしなければ生きていけませんでしたから」

「……そうか」

和室で目覚めた俺は、先に料理を済ませ、シャツにスラックス、ジャンパーと靴下を彼の枕元に置いていた。

「テーブルで待ってますから、支度して出てきて下さいね」

「ああ、すぐ行く」

暫く待つと、和室からジャンパーを片手に持った彼がやって来た。

彼が洗面所に行き、二分ほど経った後、食事が始まる。

「(一)馳走様でした」

食事を終えた彼はすぐにダンスからネクタイを取り出し、首に巻こうとするが、俺が止めた。

「どうした、まだ何かあるのか？」

「ここは私に任せて下さい、昨日は散々だった分、家事位は万全に果たせる事をお見せしましょう」

昨日の敗戦に自分自身何か思う所は無いわけでもない、役に立って

いない自分に嫌気が差した時は、他の物事に注力するのが昔からの俺の決まり事だった。

ネクタイの巻き方はすぐに覚えた、覚えたならば後は再現するだけ。頭を下げてもらい、ネクタイを襟元に通して、テキパキと結んでいく。……よし、終わり、完璧だ。

「あんがとよ、もし何かあったらその電話に登録した連絡先を押せば良い、分かったな？」

「見れば大体分かります、昨日教えてもらったひらがなで書いてありますし、間違いませんよ」

「……昨日の今日で覚えられるのが驚きなんだがな」

「前々から言っていましたよね、見たり聞いたりすれば覚えられますよ」

「いちいち驚いていても仕方ねえか、んじゃ、行ってくる」

「いつてらっしやい、多田島警部」

下げた頭に垂れる髪、その隙間から彼が出て行く光景を目にすると同時に俺のお留守番が始まった。

「……と言っても、やる事がないですね」

とにかくスウェットを脱ぎ捨て、昨日帰り道に警部が買ってくれたシンプルなTシャツやクォーターパンツを着て姿見の前に立つ。素が上質なだけあり、どんな服装でも案外に似合うものだ。

??

……余りにも時間があまり過ぎていた、洒落では無い。

退屈と言う拷問に耐えかねた俺は、道具を入れる為に 그리스・マークスマン君から貸し出された専用の楽器ケースと警察手帳と携帯電話、財布とアパートの鍵を手を飛び出した。

外の光景は長閑そのものであり、辺りを見回せば、日常を謳歌する市民や、天高くそびえ立つモノリスがあるばかりで、昨日聞いた銃声など、まったく遠い世界であると痛感させられる。

「♪♪♪」

相も変わらず、『狩人の合唱』を口ずさみながら内地を練り歩く、時

たま店で買い歩きをすれば、ここまで身なりが整った子供が呪われた子供などと思ってもいけないのか、店の店員はおまけを付けてくれたり、人の良い笑顔を見せていた。

本当の事を言えば外周区に行きたいのだが、それをすれば首輪のトレーサー機能によって怪しまれるだろう。確かに茂徳君は、監視カメラで仲間の存在を知ったとは言っていたが、より具体的な事は聞いていない、これ以上の情報を与える必要も無い。

手紙を書くにも、昨日、茂徳君は資料を調べる為に、朝が早いとすぐに寝付いてしまったのでまともに文字を習えていない。仕事なので仕方ないと言えば仕方ないが、事が落ち着いてもこの状況が続くのであれば、契約不履行とみなし、訴えを突きつけ……いや、そうならば俺が法令に違反した事実が槍玉に挙げられるだけか……。

暫く街を歩けば、商店街、と呼ばれている場所に辿り着いた、大きな屋根が通り自体を包み込んでいる。少なくとも俺が生まれたばかりの時代の故郷では想像も出来ない建造物だ。

辺りを闊歩する老人たちや、談笑する店主と客、賑わいに溢れているその光景は、いくつかの戦争を経験して来た俺には尊い物にも見える。

そもそもここに居る人の多くが"ガストレア大戦"を経験している筈だ。奪われた平和の尊さを知る者達だからこそ、それを噛み締めようとしているのかもしれない。

だが、平和を形にした様な商店街へ一步踏み込もうとした時、俺の直感が妙に騒がしくなる。

「何故……こんなにも嫌な予感」がするんでしょうか」

重い足を何とか動かし、ゆっくりと、大柄の楽器ケースを背負いながら商店街へと向かう。

……言いようの無い薄気味悪さも、背負いながら。

銃口は何処に

俺は最初、人の為に化け物を狩っていた。

それこそ最初は、感謝を受けるのは最高の気分だった。

だが、あの魔女狩りもどきを見た時、俺は知っちゃった。

他人の為に何かの命を奪う存在は多く居る、しかしだ。

結局は、自分のエゴに基づく物なんだ、それはきつと、間違いない。

だから、命を奪う事を正当化なんてしようもないし、出来やしない、

俺の手は血に塗れている。

常に何かの命を奪う事を前提としている狩人だからこそ、見極める

目が必要だ。

背負う覚悟が必要だ。

そして何より、生命を慈しむ心が必要だ。

でなければ、最後に打ち抜かれるのは、本当の化け物自身でしかない。

??

辺りを見回せば、賑やかな人、人、人。

買い物を楽しむ人も居れば食べ歩きを楽しむ人もいる、多種多様、

その一言に尽きる。

黒い首輪を手慰みに撫でながら商店街をポテポテと歩いていると、

美味しそうな匂いがする。

「お嬢ちゃん、何か買っていくかい？」

店先に寄れば、当たり前だが店員が声をかけて来る、看板に貼られ

たメニュー代わりの写真には美味しそうな手羽先が照り輝いていた。

「これ、十個下さい」

金の価値についてはある程度俺の世界の通貨感覚でやりくりして

いるが、やはり違う物は違う、値段と睨み合いながら札を数枚差し出

し、あまりにも大雑把に会計を済ます。

「はい、どうぞ」

「ありがとう、お店の人」

いつものふぎけた口調は押さえ、今回はほぼ一般人として動いているのだが、案外印象は良いのかもしれない。

手羽先の入った紙袋を片手に街を彷徨く、元々これは俺がこの街の立地を把握する為の偵察活動も兼ねている、が、観光目的でもある事は否定しない。何せ俺にとってここは遥か未来の世界だ、興味は尽きない。

「これは、中々おいひいでふね」

セットで付いてきたナフキンで手羽先の持ち手を包み、口に突っ込みながらモゴモゴ独り言ち、視界を流れていく店先を横目に見ていると……往來の奥から二人の影が現れる。

「今日は蓮太郎とデートなのだ！」

揺れるオレンジ色のポニーテール、濃紺の襟が目立つ白いジャケット、空色のTシャツに同色のスカート。

少女とはかくも可憐なものだっただろうか、少なくとも俺の時代は泥臭いものだった。

頭の中にはもう一人、オレンジ色の髪の少女が思い起こされる。

……ピー……彼女らにも早く会わなければ、随分と心配を掛けてしまっている筈だ、まだまともに返礼すら出来てはいない、……農業は出来ているのだろうか、大事はないだろうか。

「ちげえよ、ただの買い物だろう？」

年頃の少女らしくお洒落を嗜む彼女に対して昨日と全く代わり映えの無い黒いスーツに身を包んで……いや、一つだけ違う箇所があった。彼女と少年はパールツクの腕輪をしている、なかなか奇抜なそのデザインを見ると昨日見た『天誅ガールズ』を思い出してしまった。何故だろうか。

……と言うより、彼のあのスーツに替えはあるのだろうか、と言う疑問に頭が支配される前に視線を外す。

「ふふん、照れなくてもよいではないか、妾と蓮太郎の仲だ、遠慮も必要ないであろう？　蓮太郎！」

あの二人は……里見君と藍原君か、昨日今日でこうも偶然に会ってしまうと、世界は狭いものだとつくづく思う、人間の生存圏が物理的に狭いからなんだが、と言うジョークはあまりにも不謹慎だろう。

……むう、俺は一体どうするべきか、このまま他人のフリをしながらやり過ごすか、それとも……いや、彼女もこの外出を二人きりで楽しみたい筈。俺だってもう良い歳なんだ、そんな野暮はナンセンスだろう。

店先に寄った俺は背負った楽器ケースを隠蓑に、商品を眺めるフリをしてやり過ごそうとした、が。

「誰かそいつを捕まえてくれ！」

商店街の誰かが言ったのだろう、その声により、彼等も含めたその視線が、ある一点に集中する。

往来を疾走するその人影に。

やや薄汚れた衣服とキャップ、浅黒い肌とは対照的な真っ赤な瞳、……間違いな、彼女は「呪われた子供」だ。恐らく俺の知らない外周区の出ではないだろうか、少なくともピー達の中にあの顔をした少女は居なかった。だが、彼女達と同じように生活に困窮し、盗みを働いていると言うのは概ね察せた。

どうすべきか……このまま彼女が誰にも危害を加えず逃げおおせてみせると言うならば、見逃す事も考えられるが、この状態で誰にも手を出さずに逃げ切るのは子供たちであっても難しいだろう、ならばいつそ罪状を積み上げる前にここで止めるべきか。

楽器ケースを置き、走る彼女の前に立ち塞がろうとする前に……彼女は何か里見君達の前で立ち止まってしまった。

店の店員だろうか、エプロンを身に付けた男二人が彼女を抑え付けた。

「おい、そいつが何やったってんだよ」

「こいつは店から缶詰を盗んだ拳銃、止めに入った店員を半殺しにしやがったんだ！」

里見君と店員らしき人物がやりとりしていたが、押さえつけられた彼女の目線は一人の少女に向けられていた。

しんと静まり返ったこの商店街はさつきまでの活気を裏返した様だ、行き交う人々は彼女に向けてありったけの憎悪と恐れを向けている。

彼らが取るべき行動は本来"逃げる事"だろう。だが、彼等は憎しみか恐怖に縛り付けられているのだろうか、……一步も動かない。

そんな光景はありふれたものだろう、いつの時代でもそう珍しくはないものだった。憎悪と怯懦から来る差別や迫害など腐るほど見えてきた、だからと言って同調する気は起きない。

だからこそか、この世界の"部外者"でしかない俺は今、哀れみを感じているのだろう。

これは災害や事故とは訳が違う、この世界にかつて齎されたのは絶滅だ、ここに居る者のほぼ全てがその絶滅を経験している、忘れられない、きつと、忘れられる筈が無いのだ。かくいう俺もかつての大戦は記憶に焼き付いている、割り切るにも時間がかかった。

ガストレア大戦、そこから始まった絶滅との対面、彼等はそれに怯え続けなければならない、この東京エリアで生きている、生かされているその間は。

何より、彼等の生活の側にいる"呪われた子供たち"はガストレアになるかもしれない可能性を秘めている、例えるなら、隣人が血に飢えた吸血鬼であるという事だ、いつ牙を剥くのか分からない、だから排除しようとする、これは差別や迫害と生存競争が最大の重なりを持つている状態なのだ。

そんな中、ただの十年、そんな歳月は道に横たえた側溝程度の幅でしかなかったのだろう。先程までの平穏はつゆ程も残っていない。

「ぐっ……離せッ！」

二人の大人の拘束に彼女は身を振らせるが、それでも拘束は解けな

い。子供たちとしての力の制御に不慣れなのか、それとも彼等を殺すまいとしているのか、それは分からなかった。

盗んだ物であろう缶詰が藍原君の足元に転がる。どれに手を伸ばしたのか、彼女のその伸ばした手を取ろうとした藍原君の手を里見君が押さえた。

先程から押さえつけられた彼女と藍原君との間に視線が交わされたのが度々見えた。里見君達の表情はその背中からしか悟ることは出来なかったが、それであってもなお、明らかな驚きが、特に藍原君の背中から溢れていた。彼女等は知り合いだったのだろうか。

しかし、今こそは力の均衡が見られたが、彼女が捨て身になれば何が起こるか分からない、それに、警察と言う公権力が介入しなければ下手すればここがリンチ、もしくは私刑の会場になってしまう。

が、今の俺にどうにか出来る権利はあるのだろうか、携帯を取り出し、彼に電話を繋げる。

プルル

プルル

プルル

「もしもし、茂徳君」

『何かあったのか?』

「今私は犯罪者の前に居るんですけど、その扱いに困りました」

『ああ!? お前一体どこで何やってんだ!?!』

「ツ……鼓膜に響きましたよ、今のは。私は今商店街に居て、そこで逃走中の呪われた子供と遭遇したんですよ」

『……相手が子供なら、保護を考えるべきだが、今のお前の扱いは週休だ、現行犯逮捕だとしても一般人と同じように勤務中の警察官に引き渡す必要がある』

「分かりました、ありがとうございます、しげとくん」

なるほどこれは面倒だ、今の俺は警察ではない、ならば何をすべきか。無闇に権利を行使する行動は彼に迷惑をかけるだけだ。

……男の尊厳を捨てるべき、か。

??

黒の少年とオレンジの少女、その二人組の脇を擦り抜け、まるで幽霊のような静けさを帯び、彼らの前へと躍り出るモノクロの少女が一人。

「……どうして、どうしてお兄さんはその子をイジメてるの?」

突然の幼い来訪者に少女をpushさえつけていた彼らは動揺する。

「見たら分かるだろ! こいつは泥棒なんだよ、店員も半殺しにされた、これだから呪われた子供ってのは」

「そんなの、あんまりだよ、わたしと同じくらいの子が、なんでこんなことをされないといけないの?」

「犯罪者だからだよ」

「じゃあ、どうしてその子は、はんざいしゃになったの?」

「こいつらが呪われた子供たちだからに決まってるだろ、まともな頭も無いくせに、人のフリをしゃがって!」

「……それなら、どうして、その子はのろわれた子どもたちになっちゃったの?」

「そんなの、ガストレアの所為で……」

「それなら、ぜんぶぜんぶガストレアが悪いはずだよ! なのに、こんなこと、ひどい、ひどいよ!」

少女はpushえられた彼女の前で大泣きした、それを見てか、彼らの手が少し緩んだ。

その時、その彼女は手を振り解き、走り出す。

「……これを持って行ってください、金は払ってますから」

先程の少女の物とは思えない程落ち着いた、小さな声で彼女に手羽先の入った紙袋を手渡し、そのまま少女は彼女を泣きながら見送った。

そして……彼女の姿は路地裏に消えていった。

??

何とか彼女を逃がせたが、そこに入れ替わる様にパトカーがやって来た、なんとも間の悪い仕事だ。

「通報にあった呪われた子供は？」

やや小太りの中年警官と痩せた若い警察の二人組がパトカーから降り、関係者に話を聞き始める。

俺は黙って退散しようとしたが、時すでに遅し、顔を見られてしまう。次に俺の首輪に視線を移すと、中年警官は下卑た笑顔で言った。「その君、話を聞きたいんだが、立ち話もなんだし、署までパトカーで送ってあげようじゃないか」

………ついて行くべきだろう、逃亡犯になるのは御免だ、もし警察官が彼女を取り押さえなかった理由を聞かれれば周囲の民間人に危害が加わる事を警戒したとでも言い訳しよう。

そう言えば、こうして里見君と藍原君の前で連行されるのは二度目である、また啞然として彼らは俺を見送ってくれていた、楽器ケースをパトカーに放り込み、手を振る。

??

アイゼンがパトカーに乗ると、パトカーはそのまま走り出した。

少年、里見蓮太郎の脳裏にはこの前の事が頭を過ぎる、そう、彼女が警察になるまでにあったあの事件だ、あの時、パトカーに乗せられた彼女を追って勾田署に向いた里見蓮太郎は受付に訴えたが、まともに取り合ってはくれなかった。

その後、警察として身分が確保されたアイゼンを見て安堵したものの、彼の心中には不安も当然存在していた、警察は大人達を中心に構成された組織、つまりその構成員はほぼ全てガストレア大戦を経験し、大切な者を失っている"奪われた世代"であると言う事だ、そんな中、呪われた子供である彼女がまともに受け入れられるか、そんな不安もあった、しかし、それらを上回るものが間も無く吹き出した。

あの時の会議、蛭子親子を認識した彼女は、誰よりも先に攻撃に

打って出た、そして蛭子小比奈に腹を穿たれた時、彼女は躊躇う事なく自身に銃口を向け、背後の小比奈に一矢報いた。そして気を失う最後の時まで彼女は彼等を追いかけてようとしていた。

里見蓮太郎、彼の目にはそんな彼女が到底十代の精神性をしていとは思えなかった、戦闘に際して力や技術に頼りきるのではなく、その場で戦略によって立ち振る舞おうとする、ある種の「慣れ」、言葉遣いからも伺える、その子供離れした「性格」、そして何より、そんな彼女ではあるが、小比奈の様に狂っている訳では無い、と言うのが彼にとって最も歪に見えた。

死にかけてた筈の彼女は驚く程飄々としていた、まるでそんな事は当たり前前だと言う風に。

だからこそだろう、里見蓮太郎、優しい心を持った少年は、必要とあれば捨て身になろうとしかねない彼女の事がどうしても気に入らなかったのだ。何よりそんな彼女は洗面を一切見せず、もはや生を楽しんでる様にも見えたのが、尚更彼を困惑させていた。彼は一度触れ合ってしまった人間の事を一切考えない、そんな割り切り方は出来ないのだ。

「…………ふざけんじゃねえよー」

今回も一緒だ、あの呪われた子供を逃す為に自分を囮に使っていた、そして彼女は代わりに連れて行かれた、嫌な予感がする、そんなのはいつもの事かもしれない、彼女が自力でどうにかするかもしれない。

だからこそ、今までの様な傍観者であつてたまるか、さつきだつてもも出来なかった、まだ自分に嘘をつき続けるのか、そう彼は自問する。

「俺は民警だ、このスクーターは後で返す、天童民間警備会社に後で連絡してくれ！」

跳ねる様に踏み出した彼は商店街を通りかかったスクーターを強盗紛いに乗っ取り、パトカーを追う様に走り出す。

「蓮太郎!？」

「延珠! 先に家に帰っててくれ、すぐに戻る!」

走り出した少年は、何を見るのだろうか。

??

薄暗い廃墟、学校だったものだろうか、人の気配を一切感じないその場所でパトカーは停止した。私は気付かれないよう後部座席のドアを僅かに開けたまま外に出た。もしもの時の為、楽器ケースを回収する為だ。

「……こんな所で事情聴取ですか」

その言葉を返した時には、既に中年警官はこちらに銃口を向けていた。

バラニウム弾で無ければ、そこまでの負傷にはならない筈だが、一応彼等に従い、廃墟の奥へと進む。

コンクリートの色が剥き出しになっている広間に差し掛かった所で銃口に背中を突き飛ばされ、壁にぶつかりそうになるが、踏み止まり、身体の軸をずらしながら反転する。

バン!

弾丸が頬を掠めてコンクリート壁に一穴、その弾丸の出所は彼の銃口だ。

「……チツ、避けやがって」

「何考えてるんですか、私達同僚ですよね?」

「何故貴様の様な奴が警部補に成り上がっているのか、まるで意味が分からないんだ、教えてくれよ、身体でも売ったのか? 薄汚いガストレアが」

「貴方に使われている銃が可愛そうですね、脂汗のおかげでグリス要らずなのは良いかもしれませんが」

「減らず口を、貴様など警察には本来必要無い、貴様の様な不穏分子が

人類の分裂を促し、絶滅へと導く、貴様ら呪われた子供は不必要な存在に決まっている！」

彼が感じているのは恐らく、呪われた子供たちへの恨みと言うよりは、俺個人への恨みと言うべきだろうか。それを全体へと押し上げている、そう言う所か。

「貴様らは世界の癌だ、とつと居なくなれば良い！」

彼が更に引き金を引こうとするが、……叶うことは無かった。

「確かに、私も君と同感だ、君達の様な安寧の上に胡座をかくような者達全てが滅びれば、世界は確実に良くなるだろうね」

青の狭間に「紅」……奴は、何故ここに。

「な、なんだ貴様は……」

彼等はその言葉を言い切れなかった。

二つの球が跳ねる、二人の身体が斃れる。

血のシャワーが俺に降り注ぐ。

不味い、楽器ケースはパトカーの中、手持ちにまともな武器は無い、状況はあの時より遥かに悪い。

「……また貴方達ですか」

空の窓辺から差し込む斜陽が奴の燕尾服をより紅く染め上げる。

その隣には真っ赤な液体を振り払う彼女の姿、差し詰め、理詰めの悪魔と本能の天使だろうか。

「パパ、切りたい、切らせて、切る」

「落ち着きなさい、小比奈、今日は彼女と交渉に来たのだから」

「交渉、ですか」

そう言う奴は軽やかな足取りで俺の前へと踏み出した。

「君は今、この世界に巣食う絶望の根源を垣間見た、自身の無力を棚に上げ、都合の良い敵を作り、それを黜る。この世界の住人はそれらを黙認している。そんな彼等は滅びるべきだとは思わないかね？ 君にはそれを成せる力があると思うのだが」

「確かに、滅びれば多少は落ち着きますかね、あくまでも一時凌ぎでしようが」

「ほう？」

「結局、滅ぼすのも応急処置でしかない、寧ろ一からやり直した所で同じ事でしょう？ 解決と言う結果は未来にしかない、同じ所をやり直す意味はないですね」

「なるほど、それが君の考えか」

「そうですね、どんな過ちであれ、タイムマシンでも無い限り、それは過去には活かせません、活かせるのは未来のみ。ならばどうあっても世界は続けないと、今起きている過ちは解決出来ません」

「君は子供でありながら、随分と悠長な事を言うものだね」

「貴方は大人なのに生き急ぎ過ぎですよ」

「最後に、君の名前を聞かせてもらおうか」

「……アイゼン・バンカー」

「そうか、アイゼンくん、それなら今日でお別れだ……小比奈、行きなさい」

「はい、パパ！」

影から飛び出した一閃を何とか潜り抜けるように回避し、窓枠に身体を滑り込ませ、そのまま身体を外へ放り出す。

身体をパトカーの天井に打ち付けながらも開けていたドアから車内に入り、楽器ケースから武器を装備する、咄嗟に手に取れた武器はハーブーンガン、ワイヤー、そしてスモークグレネード。

腰にスモークグレネードとバッテリーをワイヤーで括り付け、車外へと飛び出そうとした瞬間、車両の天井から黒い柱が下向きに生え、俺の身体を掠めた。

彼女はパトカーの真上に居る、そう確信し、ハーブーンガンと繋がっている銚を天井に突き刺し、電気を通す。

小さな悲鳴と飛び退く音が聞こえた後、俺は車から飛び出した。

A G V 試験薬は家に保管したままで、畜生、俺は馬鹿だ、こんな事になるなら持つておくべきだった。そんな代物を持ち歩くのは危険ではあるが。

パトカーの影に身を隠していると、その上の廃墟のあの部屋から微かな話し声が聞こえた、奴と、もう一人は里見君だ。……彼には申し訳ない事をした、こんな事になるならばもつと穩便に事を済ませるべきだった。だが、起きてしまった事は仕方ない、彼女をなんとか片付け、彼の支援に向かおう。

「……どこー、どこー？　ここかな！」

彼女は俺がパトカーから離れ、別の場所に隠れたと思っっている様だ、ゴミ箱などを真つ二つに切り裂いている。彼女の意識の外に居るのは分かるが、この廃墟の入り口前の広場はそれ程広くはない、広場の外周を回る彼女に合わせて、見つからない様にパトカーの四面を這い回る。その間、何とか手持ちの装備で即席の作戦を練る。

手に取っているハーブーンガンはバネ仕掛け、音こそほぼ無いが、射程や精度は酷い、銃を力一杯投げた方がマシンなレベルであった。次回があれば銃の形状やバネを改善してもらいたいものだ。

そう、だから彼女との高速近接戦闘においてハーブーンガンは全く役に立たない。

今回使うのは銃の部分だ。

ハーブーンガンから弾となる銃を抜き出し、その尻に付いた電線を外してハーブーンガンの中に戻す。

外した銃にワイヤーを括り付け、それをバッテリーに繋ぐ。

後は息を殺し、彼女との距離が最も近くなる瞬間を待つ。

周りを探り終えた彼女はスクーターを蹴り倒し、再びパトカーへと近付く。

後五歩

後四歩

後三步

後二歩

後一步……今だ。

パトカーの影からピンを抜いたスモークグレネードを投げつける、彼女は反射的に切断するが、煙はお構いなしにあたりを埋め尽くす。

煙により視認が難しくなれば、パトカーを飛び越え、今出せる力の全てを使い銚を槍の様に突き立てる。……何かに刺さった感触と共に手を銚から離し、バッテリーを起動する。

電撃を流し数瞬、煙に紛れ炎が見えた、が、違う、これはただ焦げ臭いだけだ、彼女には届いていない。

「ハハハッ、こっちだよー！」

すると、背後のパトカーがこちらへ向け、きりもみながら飛んできた。

咄嗟の回避に失敗し、パトカーと廃墟の入り口の階段に挟み込まれた俺の足は裂けて潰れたソーセイジの様になっていた。あまりの負傷故か、痛みはまだ感じない。幸運なのは、入り口の両方を支える柱のおかげでパトカーが俺の全身を押しつぶさなかった事だ。

絶望的か、いや、これはチャンスだ。彼女は油断している、そして……俺は、破損したパトカーから溢れた燃料、窓から溢れた楽器ケースに横たわる奇妙なショットガンと真っ赤なシエルを見て、そう確信した。

??

「里見くん、君も見ただろう、この世界にはあまりにも穢れている、あ

の警察官くんの一人も、我が身可愛さ故に、市民であり、同僚である筈の彼女に銃を向けた。それらの穢れを嫌悪する君は彼等とは根本的に相容れない存在なのだよ」

ワインレッドの燕尾服、マスクラの笑顔は今なお揺るがず、まるで彫刻の様な安定感を持ってそこにあるは人知を逸した怪物。

「なら、お前と同じって訳か？」

「君と私はよく似ている。だから……取引しようじゃないか、君が私達と協力して東京エリアを滅ぼすならば、私は君たちの生活を最大限にサポートしよう」

「言ってることが無茶苦茶だろ、エリアを滅ぼしといて生活がなんだとか、おかしい話だぞ」

「つまり、君は、私達を拒絶すると言う事かな」

「ああ、望む所だ、クソ野郎」

「そうか、ならば………死ね」

里見蓮太郎の放った銃弾、蛭子影胤の放った銃弾が空中で激突する。

……ここに、二つの戦いが、本当の意味で、始まったのだ。

舞台への階段

「……みつけた」

俺の足を挟む横転したパトカーの上に彼女が飛び出した、潰れた足はそんな振動すら感じれなくなっていた。

真つ白な月に映える見事な赤が彼女の目に宿っている、また、俺の血を纏っているその姿は吸血鬼と言われても納得してしまうだろう、少なくとも俺はその類に思えた。

「また貴女に酷い目に遭わされましたね、貴女の保護者に治療費でも請求出来ませんか？」

「ちりようひ？ せいきゆう？」

「……十代とは言え、知識に偏りがありますね、私が言えた事でも無いですけど」

パトカーに乗り上げた彼女はそのまま俺の腹の上に降りて来た、余りにも軽い、しかし、なんとも言えない圧迫感があった。

黒く煌く刀が一对、あの時の様に刃で挟み込む形で俺の首にかけられる。勿論、死ぬ気は毛頭無いが、それよりもまず、知りたい事が一つあった。

「そう言えば、貴女はさつき、ゴミ袋を身代わりに使いましたよね、あれは自分で考えたんですか？」

スモークをばら撒かれた瞬間、彼女は咄嗟にゴミ袋を身代わりに使って俺の視線を逸らした、だが、これは蛭子影胤の入れ知恵とは思えない、少なくとも俺が初めて彼女と戦った……と言うのは誇大表現か、とにかくその時の彼女は、力と速さを存分に振るうパワープレイヤーであったのは間違いない。速さで視線を切るならばともかく、前の彼女ならば少なくとも先の小細工などはしないだろう。

「あなたのマネ、してみたの」

……ああ、なるほど、あの時のテーブルの木片を盾にして奇襲する方法か。

畜生、小柄ですばしっこくて力がある、おまけに戦闘センスまで一級品と来た、なんだそのワンマンアーミーは、奴の英才教育が過ぎる

ぞ。

「全く、呆れましたよ。戦闘に……いや、殺し合いに関して言えば貴女の才能は一級品ですよ」

思わず皮肉めいた言葉が口から飛び出す。その瞬間、彼女の刀はピタリと息を止めた。

「……………」

伸ばした片手は、既にショットガンのトリガーに掛かっている、これを引けば、俺ごと彼女はドカンだ。恐らく、彼女は死ぬ。……だが、まだ、見極め切れていない、勝ち筋はある、ならば限界まで見定めよう。

「……貴女はどうして、蛭子影胤と共に居るのですか？」

「私のパパだから」

彼女は間を置かず即答する、それだけ彼女にとって、父親とは重要な物なのだろう。

「ならば、蛭子影胤が父親でなければ貴女はどうしていたのですか？」
「パパがパパじゃなくても、私はパパが好きだから一緒にいる」

血の似合う笑顔から、子供の様な笑顔へと彼女の表情が移っていく。……もし、ガストレアなんて物が居なければ、奴と彼女は、お互いに信じ合う理想の家族になっていたのだろうか。

——違う。

俺の直感がそう囁く。彼等の出で立ちはさっぱりだが、きつとガストレアが居なければ、奴と彼女は出逢ってはいない、そんな気がする。それこそ、里見君や藍原君、それに警部と俺も。

考えを巡らせて行くと、彼女の存在は、蛭子影胤に遣わされた殺戮の天使にも思える。そう思うくらいに運命とは楽観的かつ刹那的で神は恣意によって動く享楽主義なのだ。

——そうか、そう生きれば良い、思いのままに、天上の奴らにそれを咎められる義理はない。……折角やり直したばかりの命、それに費やさずしてどうするか。

「ふふ、ふはははっ！」

「何がおかしいの？」

「いや、ただ考え過ぎただけです。そうですよ、貴女みたいに……子供のように、思いの丈をそのままぶつければ良いんです」

彼女の顔が、月明かりに照らされていた。

その困惑の姿は、天使と呼ぶには普通過ぎる、当たり前前にあるべき筈の少女の姿、そう、目の前に居るのはただ力が強くて目が赤い子供だ。

……そう言えば、警部は言っていたな、普通子供は保護すると。ショットガンのトリガーに吸い付いていた指をゆっくり離す。

彼女の事は全く知らない、まだ見極めれない。ならば保護すれば良い。それに、彼女によって奪われた命がある、それを償わせる事もなく先に逝かれるのも、警察として、いや、「俺個人」として許せない。

……我儘にも程があるが、今はそれを押し通したい。

考えばかり大人ぶっていても仕方ない、子供の様に真っ直ぐに、実直に、それでいて今までの経験を活かして、どんなに泥臭くても構わない、子供なんてのは泥に塗れて成長するものだ。結局、最後に望みを叶えれば良い、今からの戦いは、狩人の狩りではなく、警察の逮捕劇でもない。

「……………上を見てください」

——子供の喧嘩だ……そして、これが本当の子供騙しって奴だ。

……俺は今、こんな子供に、ただ負けたくない、その思いだけで身体を動かしていた。

その隙に腰のワイヤーを手に巻き付け、刀の交差する点に捻じ込

む。これで多少なりとも時間を稼げる。

「……！」

引こうとした刀を鷲掴み、僅かに動きを止める。今まで切った奴にそんな馬鹿な奴は居なかつたのだろう。

更なる隙、空いた片方の手にバッテリーに繋がったワイヤーを手繰り寄せ、結び付けたままの銚を再び手中に収め、そのまま彼女の大腿に穂先を突き刺し、電流を流す。

「あがつあああああつ！」

「ぐうつうああつ！」

電流は彼女の刀を通り、地面へと流れる、彼女の下敷きになっていく俺にも少なからずの激痛と痙攣が走る。最早足から下の痛みなど関係ない。

まともに動けなくても構わない、彼女を気絶させることが出来れば妥協点だ。

……俺は痺れる身体に鞭を打ち、バッテリーの出力を最大にした。電気が身体に流れれば、筋肉は急激に収縮する、彼女が持つ刀も同じ、握り締めた刀を離せず、電流が彼女の下半身の神経をインターセプトし、活動を停止させていく。

刀の断面は熱を帯び、俺の片腕からは肉の焼ける匂いが漂いだす。

ここからはチキンレースか、望む所だ。

そう思った矢先に、聞き覚えのあるサイレン音が見えが耳を打った。

??

交錯するマズルフラッシュと銃声、流れる弾は透明な壁に阻まれ、また一方は灰色のコンクリートの柱に阻まれている。

お互いに様子見、その距離約8メートル間の戦闘空間が形成されつ

つあった。

「偶には銃撃戦と言うのも悪くないものだ、そうは思わないか里見くん？」

里見蓮太郎のXD拳銃から放たれた弾丸はそんな声すらかき消せず静止している。

余裕を感じさせる足取りで柱から柱の影へと動く蛭子影胤、彼にとってこの銃撃戦とは、まさに遊戯でしかなかった。

「……ッ！ ふざけやがって！」

静止した銃弾はベクトルを反転させ、蓮太郎の隠れている柱を擦り下ろして行く。

このまま銃撃戦に付き合えば、ジリ貧でしかない、そう判断した蓮太郎は柱から柱へローリングし、距離を詰めていく。

戦闘開始の際よりも半分になった交戦距離、蓮太郎の意図を把握してか、影胤もそれに迎合するように一気に二人の距離を縮めていく。

「さあ来たまえ……里見くん！」

天童式戦闘術二の型十六番――

蓮太郎の右脚が鞭のようなしなりを帯び、影胤の頭部を狙い打つ。

『『隠禅・黒天風』ッ！』

掛け声と共に放たれたその黒い鞭は、影胤の頭蓋を破壊する前に、斥力フィールドに押さえられてしまう。

蓮太郎はすぐさまもう片方の足で床を蹴り上げ、距離を取る、が、彼の間合いは既に影胤により支配されていた。

「斥力とは言わば反発力、これはその応用だよ」

蓮太郎の身体は既に後ろへのベクトルを持って移動していた、カウンターには力が足りない、踏み止まらなければ、十分な力を持った拳打を放つ事は出来ない。

ならば、その後ろへの推進力を転用すれば良い。

先に接地した左足を軸に右脚を振り子の様に右回転させ、後ろ、そして前へと回転させる。

常人にはまるで彼の右足が霧のようにかき消え、次の瞬間眼前に現れたように見えるだろう、しかし、蓮太郎の前に居るのは真性の化け物。この一撃必殺の後ろ回し蹴りを潜るように回避する。

——しまった。そう蓮太郎はゆっくりと流れる思考の中で繰り返す。

「私の技も見せようじゃないか、存分に味わいたまえよ、里見くん」
影胤は低い姿勢から更に一步踏み込む、床はその圧に耐え切れず、既にひび割れ、ギチギチと言う悲鳴すらも上げている、しかし、影胤の手の平が蓮太郎の腹部に添えられた瞬間、それがピタリと収まる。まるでその力は導線に導かれた電流の様に、行くべき場所を見つけたのだ。

蓮太郎はこの時、回し蹴りを刈られた所為で、両足が宙に浮いてしまっていた。つまり、力を逃す場所は……どこにもない。

「——『マキシマム・ペイン』」

ゴム毬の様に弾んだ身体はコンクリートの窓枠を発泡スチロールの如く打ち砕き、サイレン音の真っ只中へと飛んでいく。

蓮太郎は体全体がプレスされ、内蔵を破壊し尽くされ、息すらままならない、しかし、常人では絶命必至のこの攻撃を喰らっても生き延びているのは、彼の持つタフネスが尋常ならざる物である事を証明していた。

「——蓮太郎ッ！」

彼の鼻と目が、柔らかな匂いと、オレンジ色の羽衣の様な絹の髪を捉えた瞬間、彼の意識はプツリと途絶えた。

??

——しまった。間に合わなかったのか。

頭上の廃墟の壁面が炸裂し、瓦礫が降り注ぐ。その中に垣間見た黒いスーツを見た瞬間、最悪が頭の中を過ぎる。

不味い、このままだと彼女が押し潰される。気絶した彼女には防衛もままならない。

俺は残る力で身体を起こし、彼女を横へと押し除ける。

最悪俺なら潰されても再生出来るかもしれない。淡い望みではあるが十二分、一握の望みさえ有ればそれで良い、そう己を誤魔化す。全身の激痛を押し除け、降り注ぐ瓦礫から少しでも逃れようとする。足は流れた血が潤滑剤となつてか、引き抜く事は出来ていた。だが、駄目だ、これでは逃げ切れない。

全身を潰される感覚はどうなのか、などと益体もない事が頭に浮かんで消える。これが走馬灯と言う物だろうか、あまりにもこの世界で暮らした日々が浅い物だからまともに思いつかない。

「——ピー、警部、すまない」

さんぎ事を引つ掻き回した挙句ここで果てるとは、情けない。

『おい小僧、生きたいなら、どれだけ無様だろうと足掻いてみせろ』

……走馬灯の中を「師匠」の言葉が流れる。すると、不思議な事に脱力していた筈の手に力が戻った。

ここに至るまでの経過時間は一秒にも満たない、しかし、それは俺にとつてはこの魂に流れる歴史を省み、前に進ませるには十分だった。

「——アイゼンツ！」

多田島警部……彼の伸ばした手をなんとか掴むと身体が容易く浮き上がる。景色は既に一面の瓦礫から、雲一つない夜空であった。バッテリーに繋がっていたワイヤーは瓦礫に押し潰され、もはや先の機能を果たす事は出来ないだろう。

身体は警部に抱き抱えられたまま、仰向けの顔を下に向ければ、そこには今日の朝見たばかりなのに、妙に懐かしく思える強面があった。

「警部、感謝します、流石に今のは死ぬ所でした、でも、どうしてここが？」

「馬鹿野郎、忘れたのか？ 首輪の事をよ」

「——ああ、なるほど」

「それにしても、また無茶しやがったな」

「お叱りは後でいくらでも受けます、それより今は」

「ああ、分かってるよ」

??

藍原延珠は落下する里見蓮太郎を受け止めて、何とか無傷で着地させたものの、蓮太郎が負っていたダメージは凄まじい物で、口から溢れ出る血が止まらない。

「——蓮太郎……蓮太郎ッ！」

血臭でむせ返りそうな広場に真っ赤な影が降り立つ。……影胤だ。

「ほう、君が里見くんのイニシエーターか……アイゼンくんの方は……」

影胤が辺りを見回すと、奇妙な形をしたショットガンを向ける少女とハンドガンを向ける男が目に入る。

「その二人にこれ以上手を出せば、容赦しませんよ」

その言葉を聞いているのかいないのか、更に周りを見回した影胤はゆっくりとした、それでいて確かな足取りで蒼と紅に染まった少女の元へ向かった。

大腿に突き刺さる銚の先を貫通させ、その穂先を斥力フィールドで切り取ると柄を掴み、引き抜く。すると彼女の傷は見る見るうちに癒えていった。

影胤は少女の細い身体にも引けを取らない細腕で少女を抱える。

「——まさか、小比奈に勝つとはね」

「勝ちと呼ぶにはあまりにも泥臭い物ですが……それでも勝ちです」

彼女に刺さった銚に繋がったワイヤーを目で追い、それが瓦礫に押

し潰されているのを見た影胤はグルリと振り向き、アイゼンに語りかける。

「小比奈を助けてくれた理由には興味があるが、私は貸しを作るのは苦手だね、ここは君に免じて大人しく引くとしよう」

「……正気ですか、今なら私達全員殺せそうなものですが」

「約束は違えない、これで貸し借りは無しとしよう」

——だが、覚えておくと良い、これは絶望と言う舞台の序章だと。

その一言をお辞儀と共に述べた影胤は斥力フィールドを地面に張り、その反発力を活かした跳躍により、瞬時にアイゼン達の目の前から消えた。

救急車のサイレンが響いたのはそれから僅か数分後だった。

??

——東京エリア 勾玉大学附属病院

病院に運び込まれ緊急手術を受けた蓮太郎は、手術に携わった医者を軒並み驚かせる生命力で既に死の淵から這い戻っていた。

そんな彼がベッドに入れられてから僅か十分後、病室には天童木更が駆け付けた。

蒼白の顔には不安の想いがこれでもかと現れている、彼の静かな寝顔を見ると、死んでしまっているのではないか、そんな心持ちに彼女は駆られてしまう。

「里見君！」

「大丈夫ですよ、寝てるだけです」

普通の病室とは当然個室と言う訳ではない、蓮太郎のベッドの向かい側には一人の少女が居た。アイゼンだ。

「——貴女は、あの時の」

「覚えてくれましたましたか、私は、アイゼン、アイゼン・バンカーです、こうしてまた会えたのも、里見君のおかげですね」

「里見君のおかげ……？」

「——私はまた蛭子親子に遭遇しました、その時、彼が影胤の相手をしてくれた事で私は小比奈と一体一の戦いを成立させ、何とか勝つ事が出来たんです」

アイゼンの話を聞いている内に蓮太郎の生存が確かな物であると理解し、心を落ち着かせた木更は、母の様な微笑を湛え、彼の頭を撫で上げる。

「そう——また無茶したのね、里見君らしいけど、心配するこっちの身にもなって欲しいわよ」

その声は安堵か呆れか、少なくとも、アイゼンの目には彼女が彼に何らかの好意を抱いているのは見てとれた。

「……彼は、いつもこうなんですか？」

「そうね、向こう見ずな所があつて、危なつかしくて、口が悪くて、甲斐性なしで。でも、眩しいくらいに真っ直ぐで」

「そう聞くと、彼と貴女の惚気話の様に聞こえますね」

「——えっ、いや、べべ、別にそんな事無いわよー」

「静かに、病室ですよ？」

アイゼンはその悪戯な笑みに人差し指をピンと立てる。

「うう……」

「それに、子供が気持ち良く寝ているんですから」

「……それって、まさか」

アイゼンの目線の先、蓮太郎のベッドの布団をペラリとめくると、そこには彼の腕を枕の様にして眠る少女の姿があった、彼が助かった事を知り、安心した少女はそのまま眠ってしまったのだ。

「そう、よね……延珠ちゃんも心配してたのよね」

「後、言っておきたい事が一つ。私達は暫く、貴女方、天童民間警備会社の護衛とサポートに回ります」

「……護衛？ どうして」

「蛭子影胤の動向は現在、全くと言っていい程掴めていません、多田島警部曰く、奴の情報も警察には存在せず、幽霊と言っても過言ではない、そんな中でここに居る私と彼は既に数度、奴と接触しています。次が無いとは思えません」

「つまり、狙われているって事？」

アイゼンは首を縦に振る。

「そうですね、しかし、警察は積極的には協力しないでしよう……あまり信じたくは無いのですが、私達警察の中ではどうやら蛭子影胤の捜査に対する、“謎の圧力”があると、多田島警部から聞いたんです」

木更は驚愕すると同時に納得もしていた、こんな凶悪犯が東京エリアを彷徨っていると外部に漏れれば、パニックは必至、いつそ見ないフリをして、裏で民警に全てを任せ、責任を押し付ければ良い、そう思う上層部の者が居てもおかしくはない、と。

更に、聖天子による箝口令がそれに拍車をかけている側面もあった、聖天子によってあの会議の場に居た民警達に彼女直々に影胤捜索の命が与えられた以上、この事件に介入しなければ、例外的に動くアイゼンと多田島警部以外の警察は皆、責任を問われても、知らなかったとシラを切れる。だから警察は尚更に首を突っ込まないでいる。そう言う事なのだろう、と木更は結論付けた。

「ですから、彼と彼女、貴女の内誰かが行動する時は、多田島警部か私が付き添います。圧力があるとは言え、他ならぬ蛭子親子の手によって警察官2名が既に殉職しています。警察も面子を保つ為に、私達に多少の力は貸すと思いますから、何かあれば知らせて下さい」

「……ええ、分かったわ、よろしくね、アイゼンちゃん」

「はい、こちらこそ宜しくお願いします」

握手を交わした二人、その後木更はソファに横たわり、すっかり寝てしまっていた。彼女にも少なからずの心労があったのだ。

アイゼンはその後暫く起きていたが、休暇届を出したばかりの多田島警部が合流し、今日の分の侵食抑制剤を射つと同時に事切れた様に眠りについた。身体は既に再生の為に膨大な体力を消費していたのだ。

??

目が覚めると、頭に響きそうな程の日差しが窓辺から差し込んでい

た。

対面の里見君は……居ない。

「なっ、里見君は！」

「大丈夫よ、里見君ならもう回復して、多田島警部と一緒に延珠ちゃんを学校に送ってるわ」

「……そうでしたか」

声の主を探つて横を見れば、そこには黒がよく似合う美人、天童木更が居た。……こうして近くでまじまじと見ても、引く手数多の美貌である事は疑いようが無い。

「貴女は学校に行かなくても良いのですか？」

「私は今日は休む事にしたわ、前からちよくちよく透析で休んでたから、不審がられる事もないし、いざと言う時に動ける人は多い方が良いでしょう？」

そう言うと、彼女は病室の隅に立て掛けた楽器ケースの隣にある細長い袋に目をやる、恐らくあれに彼女の武器が入っているのだろう。

「二応、聞いておきたいのですが、彼の回復力……実は呪われた子供なんて事は……？」

彼はあの負傷から丸一日も必要とせず回復したのには驚きを超えて呆れもあつたが、俺は何故か理由が気になった。

「ないない、あり得ないわよ、そんな事、確かに昔から丈夫だとは思つたけれど」

彼女は手をひらひらと扇ぐようにはためかせる。これ以上の事は何も得られないだろう。諦めた俺は身支度を始める。

「なら、私がここに居る意味ありませんね、両足も治りましたし」

両足を固定するギブスは既に無く、そこには昨日の傷など忘れてしまった両足があつた。侵食率は十分に回復出来るのは驚異的だ。筈だが、それでも一晩寝れば十分に回復出来るのは驚異的だ。

「そうね、……それなら、これからアイゼンちゃんは私の警護に就く事になるのかしら」

「はい、里見君達には警部がついていきますから、余り物な私達はそうな

りますね」

「余り物って……」

「別に女性としてそうなるとは言ってませんよ、それに貴女はすぐ近くに良い人がいるようですし」

「だつ、だからそれは、その……なんて言うか、長く一緒にいればそうなって当たり前と言うか……」

……俺はこの女子の扱い方を理解したのかもしれない、昨日と同じ意地悪な笑みが溢れる。

「応援してますよ、木更君」

「……あれ、私、下の名前で呼んで欲しいって言ったかしら？」

彼女が首を傾げる。やはり、彼女は訳有りらしい、こんな女子が、会社の社長と言う時点で奇妙だとは思っていたが。

今の反応からして「天童」この苗字が一番の問題なのだろう。

「まあ、これは子供の、と言うよりは狩人の直感ですよ、地雷は勘で避けてきましたし」

これが無ければ、恐らく俺は今の二十倍は死んでいただろう、それでも結局死んだ訳だが、あの最期の時はほぼ覆しようが無かったので仕方がない。

「……？」

彼女の首が限界を超えて傾こうとし始めたので、揶揄うのはここまですておこう。

「さて、冗談はここまでにしておいて、何処へ行くんですか？」

「……それなら、遊びに行きましょう」

「——ええ？」

俺は酷い馬鹿面を晒してしまう。……しまった、彼女に笑われた、まさかやり返されるとは。

「これは貴女のプロモーターからのお願いなのよ」

——多田島警部が？……どう言う事だ？

「昨日今日で全く貴女に構えてないから、代わりに構ってやって欲しい、歳も同じくらいの方が良いだろう、ってね。本当、あの人みたい

な、呪われた子供たちにも偏見無く接してくれる人が増えたら嬉しいのだけれど」

「……どちらかと言えば、中身の年齢は多田島警部の方が近いと思うのだが。全く、見た目の厳つさに似合わない繊細な配慮だ。しかし、そんな警部が俺に気兼ねなく遊んで欲しいと言うならば、俺もその言葉に甘んじよう。」

「——分かりましたよ、しげとくん、今日が本当の休暇って事ですね」
誰に言う訳でもなく、ただ思考をそのままポツリとこぼす。

窓の外の曇り空からは、強い日差しが差し込んでいた。

心は大人、身体は子供

——東京エリア 内地

「東京エリアの中でも、ここは一際賑やかですね」

車道の方を見れば、吊り下げられた列車が走っている、一体何故列車を吊り下げようなどと思っただろうか。

「アイゼンちゃん、あれはモノレールって言うのよ」

「モノレール……一本線のレールとは、凄まじい技術です」

夢中になって走るモノレールを目で追っていると、戻した視線の先には微笑む木更君が居た。頭を傾げていると、彼女がその訳を話してくれた。

「いや、変な話だけれど……アイゼンちゃんもやっぱ子供なのよね」
「子供は大人になれませんけど、大人は子供になれます、大は小を兼ねると言う東洋の諺を聞いたこともありますよ、だから子供らしくない私だからこそ、いつでも子供になれるんです」

「ふふっ、多分そう言う所が子供らしくないって言われちゃうんじゃないかしら？」

俺は楽器ケースを背負っている所為で人並みをかき分けるのも一苦労だ。

俺たちは歩き疲れる前に、近場のカフェに入る事にした。

落ち着いた雰囲気のかなカフェは、俺たちの様な子供が来るにはいささか大人び過ぎているだろうか。席に着くと、木更君は俺に薄いメニューを手渡してくれたが、俺はまだ日本語を読む事が出来ない。「……すみません、私、文字が読めないのです」

木更君は少し申し訳なさそうな顔をしたが、別に重い事情は無いのだ、だが、言った所で理解出来るわけがない、俺は元々日本の人間ではないから日本語を読めないなど、しかもこうして日本語は喋れているのだから尚更に信じられない筈だ。

——ご注文はお決まりでしょうか？

「なら、この苺のパフェが良いんじゃないかしら」

「お金は私が出しますよ」

「いいえ、大丈夫よ、多田島さんからその為のお金も貰ってるの」
「……なら、貴女も何か頼んだらどうですか？」

母。パフェを勧めてくれた彼女は既にメニューを閉じ、テーブルの端に立てかけていた。彼女は恐らく何も頼まないつもりだったのだろう。

「私は別に気にしなくて良いのよ」

そう言った彼女は、次の瞬間、地響きの様な音を腹から流す。彼女は赤面を覆い隠そうとするが、隠せていない。

「多田島警部もその程度の手間賃は折込み済みだと思えますよ？」

彼女が財布を覗いては閉じ、を繰り返す事数度、迫る空腹に諦めた様に彼女も注文する。

「うう、なら、私はナポリタンをお願いします」

——はい、かしこまりました。

「いやはや、身体は正直ですね、木更君」

テーブルに突っ伏した彼女は腕の隙間から恨めしそうに此方を覗く。

「ここ最近はまともにご飯も食べれてないんだから仕方ないのよ……」

随分と切実な懐事情の様だ、ゾンビの腐肉や雑草を食う羽目にならない様に祈っておこう。

後、折角の民警の社長と語らえるのだから、聞けることは聞いておこう。

「民警って言うのはそこまで稼ぎに困る物なんですか？」

「東京エリアトップクラスの民警になれば稼げるんでしょうけどね、私達みたいな下層の民警はネームバリューが低過ぎて仕事が全く回って来ないのよ」

そう言えば、里見君はもやしを一袋6円で買いに行っていたな、若いのに……いや、これ以上考えるのは悲しくなる、やめておこう。

「ですけど、あの会議の場には呼ばれてましたよね？」

確かあの会議は東京エリアでも指折りの民警が集まっていたと聞くのだが、そこはどう言う事なのだろうか。

「それについては分からないわ、何故私達が呼ばれたのか、誰の指図か、全部突然だったのよ」

「なるほど、まだ分からない事だらけですね」

お手上げのポーズを交え大袈裟に語る。

——お待たせいたしました、苺のパフェとナポリタンになります。

「思い出しましたけど、私達は遊びに来たんです、仕事脳は捨てましょうよ」

「ええ、そうね、今日は存分に楽しんで英気を養いましょう」

長く細いスプーンを突き通る赤が流れる白い山へと突き刺す。

今まで結構なゲテモノを食べて来たせいかわ、初めての食べ物でもすんなりと口に入れられた。いや、流石に食えない物を出す店は少ないだろうが。

「苺パフェの味はどうかしら？」

「ひんやりしてて甘いですけど、苺のおかげで甘過ぎません、これは良く考えられた一品ですね」

「何か、品評めいた言葉遣いね……」

それを聞いてか、彼女は呆れた後に軽く微笑む。俺は無意識に見た事もない筈の母の微笑みと重ねて彼女を見ていた。

俺はふと夢想した。

朝日の下、里見君と木更君が両脇に立ち、その間に両手を繋いだ藍原君が居る、そんな光景をだ。

似合いの姿ではないだろうか。

……ん。

何故かその夢想が勝手に動き出し、いつの間にか正妻を争う藍原君と木更君に里見君が両腕を引っ張られている画に変わっていた。

何故だろうか、里見君はこっちの方がらしく見えるのは。

いつの間にか俺は笑みを溢していた。

「アイゼンちゃん？」

ナポリタンとやらを黙々と食っていた彼女がふと顔を上げる。

「いえ、貴女と里見君が夫婦で、藍原君が娘なら良い家族になりそうだなと」

「……私が、お母さん、ね」

今までとは違った、妙にしんみりとした反応、釣られて俺も口が開いてしまった。

「——私は、物心付いた時から血の繋がった家族が居ませんでした、だから、どうしても人の繋がりを見ると、それを家族に当て嵌めて考えってしまうんです、私の家族がどんなものだったのか、理想の家族って何だろうかとか、色々考える為に」

話している彼女は、少し困った顔をしている。……おっと、暗い話になってしまった、話を変えよう。

「あの、すみませんでした、暗い話になって……え？」

ぽんと頭の上に手を置かれる、温もりがじんわりと伝わって行く。ゆっくり、ゆっくりと、氷を溶かす様に撫でてくれる手は、彼女の物だった。

「大丈夫よ、子供なんだから、言いたい事を言っても」

「……でも、そんな貴女も子供です」

私は……私は、「俺」を思い出し、それで急に恥ずかしくなってきた、ヤケクソで子供染みた返事では、彼女の微笑みを崩せない。

「はい、あくんして、ほら」

すると、彼女は俺のスプーンを手に取り、白と赤の螺旋を切り取った物を差し出して来た。

「と言うか何ですかその『あくん』ツ!？」

後によく言葉を言い切る前に、口の中に甘味が放り込まれる。

「どうかしら?」

彼女はしてやったりと言う風に口角を上げる。

冷たかった筈のクリームは、彼女の手の様に、じんわりと何かを温めてくれた。

「おいしい……ですよ」

僅かながらの抵抗として、彼女から目線を逸らしながら言ったが、

逸らした先に何故か彼女のニヤついた顔が見えていた。

「ふふっ、子供らしくて大変よろしい」

昨日、小比奈と戦う為に子供の意地を引っ張り出したせいとか、どうも冷静ではいらぬ、まるで時が巻き戻された様な……ありもしない懐かしさが込み上げる。

俺の生きていた時代が違えば、世界が違えば、他の子供と喧嘩して、泥だらけになった俺を迎えてくれる家族が居たのだろうか……いや、結局、家族を作ろうなんて考えなかったじゃないか。俺が何もしなかったただけだ。

——郷愁の念など、

——幼年期への憧れなど、

——とうの昔に捨てた筈なんだ。

「……昨日の仕返しにしては随分と念入りですね」

「倍返しって奴よ。私がやられっぱなしじゃないって事を胸に刻み込みなさい、仏の顔も三度までなんですから」

彼女は、そのお淑やかな風貌にあまりに似つかわしくない、悪戯好きの妖精の様な笑顔を見せていた。

はあ、全く、この日の内に何度彼女に仕返しされるのか、俺は頭を抱えたくなくて来た。

??

「ここは？」

「ここはショッピングモールよ、ブティックや雑貨店、ゲームセンターや、他にも色々なお店があるの」

商店街とは趣向が違うのか、ショッピングモールの内装自体も華やかで、中心にある吹き抜けの空間にはベンチやなどが並び、人々はそこで休憩したり、ロマンスを感じていたり——ここはフランスか？

「こ、子供は見ちゃいけません！」

「もう手遅れですし、免疫もありますよ」

師匠にサキユバスを始めとした魅了に対する訓練として、ただ一人歓楽街に金渡して放置されたのは酷かった、そもそも誘惑に負けず誰ともする事無く帰ってこい、なのか、店に入って性への免疫を高めろ、なのか、師匠が教えもしなかった所為で酷い目にあつた、訓練中に本物かつ男色のインキュバスに襲われた時は、師匠の事を殺そうかとも思ったな。

……思い出したら一気に気分が悪くなって来た。不味い、吐きそう。

「——それって、まさか」

頭上を見上げれば、木更の顔は僅かに動揺していた、どうしたのだろうか。……ああ、なるほど、彼女は俺が「そう言う事」をされたと勘違いしているのか。それぐらいの訂正なら簡単に出来る。

「大丈夫ですよ、私、」そう言う事「された訳じゃありませんから」

「——」そう言う事「って……あ、わ、私、変な事聞いちゃったわね」

彼女の言動は更にしどろもどろになっていく。俺は何か間違った事を言ったのだろうか、先の発言を振り返り、気付いた。

——しまった、墓穴を掘った。俺は大人のノリで答えてしまったが、普通子供が、「そう言う事」なんて知っていたらおかしい筈だ、どうした俺は？ 間食したばかりなのに頭が回ってないぞ。

……まさか、思考能力までガストロウイルスの減少で落ちているなんて事ないだろうな。

起きてしまった事故は仕方ない、この事を無理に否定しようとしても傷がどんどん深くなっていくだけだ、流してしまおう。

「あ……木更君、どこへ行きますか？」

「……アイゼンちゃん」

木更君は俺の手を不意に掴む。

「どうしたんですか、木更君？」

「シヨッピングモールは人が多いから迷子にならない様に、ほら、手を繋いで居たら迷子になるなんて事ないでしょう？ さあ、行くわよ、

アイゼンちゃん！」

すると、彼女は俺が返答する前に動き出し始める、掴まれた手が引つ張られる前に、俺は小走りで彼女の隣につく、彼女は先と変わらない微笑みを此方に向けているが、俺は子供扱いされるのが妙に恥ずかしく、顔が熱くなっていた。

つくづくらしくない、俺はいつからこんな歳盛りの娘っ子の様になっちゃったのだろうか。

「——いや、なっちゃったね」

「ほらアイゼンちゃん、あのお店、私の高校でも有名なブティックなのよ、見てみましょう」

……もしかすると、これも神秘の一種かもしれない。俺の身体に起こっている事を、狩人の時代の常識に当てはめる。

現世における存在の比重で言えば、基本的に"完全な肉体"、"魂"、"常人の肉体"の順で存在が重くなる。例えば、魂を無くせば、常人の肉体は動かないが、完全な肉体と言うのは動き続ける。

ガストレアウィルスは、人間の肉体を常に健康的な状態にすると言うが、それによって、この身体は不老不死、又はそれに準ずる能力を持った完全な肉体となり、その完全な肉体の中に居る俺の魂の存在の比重が、肉体の存在の比重へ寄り始めている、と言った所か。子供の頃を置き忘れた俺に、誰かが、あつたかもしれない昔日を運んで来たと言う事なのだろう、全く、余計な事をしてくれたものだ。

だが、今日くらいは、

「木更君」

「ん、何かしら？」

「そこまで貴女が楽しませてくれると言うなら、私も全力で楽しみますから、覚悟してくださいよ？」

「それじゃ、遠慮は無しね。嬉し泣きするまで遊んであげるわ！」

俺が私に合わせるのも、悪くないか。

??

(……変わった子ね)

天童木更が、あの会議室で、アイゼン・バンカーに会った時の第一印象がこれだった。

基本的に、イニシエーターとは、プロモーターを司令塔としたスタイルで運用される事が多い、中には知能派のイニシエーターの指示により動くプロモーターも居るが、それは少数派となる。

その為、仕事の現場で誰の指示も仰がず、一人で考えて動くイニシエーターと言うのが、木更には珍しく見えていた。

(……どうして貴女は、そんなにも平気そうにしているの?)

アイゼンが倒れ、そして復活した時に、木更の心の底から湧き上がったのは疑問だった。

何故、あそこまで痛めつけられ、平然としているのか、呪われた子供たちは最年長でも十歳以下の少女なのにも関わらず、その様な苦痛を容易く飲み込めるのか、木更はその時はまだ、理解出来なかった。

「——私は、物心付いた時から血の繋がった家族が居ませんでした、だから、どうしても人の繋がりをを見ると、それを家族に当て嵌めて考えってしまうんです、私の家族がどんなものだったのか、理想の家族って何だろうかとか、色々考える為に」

この時、木更は察した。

(この子は、きつと、身体の痛みじゃなくて、心の痛みを知り過ぎたのね)

アイゼンがまともな教育も受けず育った為に、言葉の読み書きが出来ないのだと彼女の前の言葉で察してはいたが、両親が居ない、その事を知り、木更は、自身の境遇と重ね合わせ、より同情的に彼女を見ていた。だから頭を撫でた、もしも亡くなった両親が、まだ生きていたらどうするのだろうかと考えて。

「大丈夫ですよ、私、」そう言う事「された訳じゃありませんから」
しかし、顔を青ざめさせた彼女が言った一言によって、今まで彼女に感じていた同情心は、別の物へと振り切れてしまった。

(……まさか、アイゼンちゃんは)

一つの暗鬼が伝播し、次々と木更の頭の中で、事実と想像が線で結ばれる。

言葉の読み書きが出来ないのも、そう言う目的で「使われて」いれば、わざわざ読み書きを覚えさせる必要が無いから。

無茶をするのも、物として使われた結果、自分の価値を下に見ているから。

飄々としていて、冗談をよく言うのは、自身の暗い部分を隠そうとしているから。

彼女の笑顔だってもしかすると………考えればキリが無い。

(私は、この子の為に、何が出来るの……?)

彼女が元々持っていた正義を求める心根は、出来る事を探そうとする。

(君なら……里見君なら……きつとこうした筈よね)

彼女は心の中で、正義の基準を探し、そうして見つけた最も身近な正義の基準に彼女は力を貸してもらおう事にしたのだ。

木更はアイゼンの手を引き、ショッピングモールを巡り始める。

……始めは単に茂徳の依頼であったが、最早これは彼女自身の願いへと変わり始めている。

側から見れば、それは酷い勘違いなのかもしれない。

だが、その勘違いは木更の心に、両親の死から歪んでいた筈の、在りし日の正義を呼び起こしていた。

(私は、アイゼンちゃんを心の底から笑わせる。それが、きっと正しい事なのよね、里見君)

それが何を変えるか、それは木更にも、アイゼンにも、そう、誰にも分からない。

——休日はまだ、始まったばかりだ。

笑顔と少女と幸せと

——東京エリア 内地 ショッピングモール

「くっ……激しいですね」

「まだまだ、こんな所でへばってもらっちゃ困るわよ、ほら！」

「ああ……また入っちゃいましたよ。なんでそう子供に対して容赦が無いんですか貴女は！」

俺は今、けたたましい騒音で満たされたゲームセンターの中、エアホッケーと言う遊戯台で木更君と真剣勝負の真っ最中であった。

獲物を持っている時点で薄々気付いていたが、彼女は武道を修めているようで、なんとも流麗な身のこなしでパックを捌いてゆく。俺はと言うと、動きやすいTシャツとハーフパンツから、初めて着たワンピースに翻弄され、失点を重ねてしまっていた。

「ならばこちらも本気でいきますよ」

しかし、恐らく彼女は駆け引きの経験が少ない筈だ。立ち回りは良い意味でも悪い意味でも素直で、隙あらば常人離れた威力のショットを捻じ込んでくる。彼女を上手く罠に嵌めるにはどうすれば良いか、策を考えろ。

先から彼女は反射を利用する事がほぼ無く、決める時は全てストリートでパックをゴールに捻じ込んでいた、ならばそれを逆手に取るう。

露骨なまでにゴールコースを開きながら勝負していると――

「そこッ！」

「――来た」

凄まじい速さで迫るパックの真芯をスマッシュシャーで捉え、打ち返す。

「えっ、嘘！」

ゴールコースをある程度絞った状態ならば、「子供たち」としての能力無しでも軌道はある程度読める。

弾かれたパツクはスコーンと良い音を立てながら彼女のゴールに吸い込まれていった。

「ま、まさか、私の木更スペシャルが打ち返されるなんて……」

遊戯台の端に手をついた木更君が項垂れている、と言うかその名前は一切何なんだ。

「何ですかその取ってつけた様な名前は」

その後、俺と木更君は、それぞれ技と力による接戦を繰り広げ、最後には、悔しいが、木更君の勝利に終わった。

「ふっふっふ、それじゃあ、敗者のアイゼンちゃんには、私の言う事なんでも一つ聞いて貰いましょうか」

「ああ、私は一体どんな恥辱を受けてしまうのでしょうか、貴女の苛烈な責めに負けてしまった私はもう抵抗もままならないと言うのに」

大袈裟に身体を抱き、震えていると他の利用者からからの視線も集まる。

「あ、アイゼンちゃん、いくら何でも人聞きが悪過ぎるわよ!」

「……まあ、冗談ですけど、さっきの服屋で私を着せ替え人形にした事と、高値の服を買わされた恨みは忘れてませんからね?」

「えっとそれは……アイゼンちゃんに色んなファツションが似合っちゃうから……でも後半はアイゼンちゃんも悪いと思うのよ私は!」

時は遡る。

??

「アイゼンちゃん、これ着てみてくれないかしら、あ、これも良いわね」
幾つかの服を手にとった木更君は俺の手を引き、試着室と言う場所に連れて行ったのだが、そこで俺は彼女に服を脱がされ、着せ替え人形のように弄ばれたのだ。

今まで裸を見られて恥ずかしいと思った事は無かったが、こうして他人に服を脱がされたり着させられたりすると、ここまで恥ずかしいもののだと初めて知った。

「アイゼンちゃんの髪色は黒と白のシンプルなモノクロヘアーだから、パンク系のファツションも似合うし、このロングの髪に手を加えれば清楚な感じにも、後、案外シックな服装も似合いそうね」

鏡に映った赤面する自身の姿は、俺が俺と思えない程、等身大の少女そのものだった。……改めて自身が女である事を認知させられると言うのは、なんとも複雑な心境だ。

「アイゼンちゃんってクールなイメージがあっただけど、案外初心なのね」

「ぐっ……それは、貴女が積極的過ぎるからですよ、里見君にも同じ様に迫ったら直ぐに恋仲になれるんじゃないんですか？」

「さ、里見君は関係無いでしょう?！」

とは言え、彼女は元男の俺の目線で見れば、世の男からしてとても魅力的なのは違いない、飾らない美しさでも言えようか。里見君も、流石に何か思う所はあるのではないだろうか。……いや、年頃の男の子がこの雄大な二つの霊峰を見て浪漫に打ち震えない訳が無い。

……そう言えば、狩人の時分、ヨーロッパで惚れ薬が流行っていた頃、アジアでは相手との縁を結ぶ呪術とやらが既に流行っていたな。相手の髪を使った方法は一部の惚れ薬の製法に通じる物があったが、名前を使った呪術と言うのには驚かされたものだ。日本にもあった筈だが、確か――

「昔からアジアには言霊ことだま信仰と言う物がありますよね」

「急にどうしたのアイゼンちゃん？」

「言葉によって存在が生まれる、生まれた存在に名を付けるのではなく……でしたっけね。そんな言葉を重要視する信仰がこの日本にだってある筈なのに、何故貴女は心の内に留めているんですか？ 言葉にすれば愛は生まれるかもしれないのに」

「……私は、そんな事出来ないわよ」

苦笑いを顔に浮かべながら否定する彼女は、何処か弱々しい雰囲気
を醸していた。

「出来る出来ないじゃなくて、やるかやらないかですよ、「幸せ」にな
る事なんてのは。言い換えればc a nかd oの違いです」

僅かな逡巡、それから木更君は、心此処にあらざと言った風に呟い
た。

「そう考えられたら、きつと楽なんでしょうね……でも、そうなるの
が、何よりも怖いのが」

彼女は自身を抱きしめるように腕を組み、制服を握り締める。

「幸せになって、「また」失ったら、今度こそ耐えられない、もう壊れ
るしかない、私は幸せになってはいけないのよ」

一度吹き出した物は止めどなく溢れ出してしまったようで。

「そうなれば、私は、失った私すらも許せなくなる」

……これが彼女の心に巣食う化け物か、あまりにもドス黒い穢れ、
こんな心のまま、今まで自壊せずに、愛情すら支えにしてこなかった
彼女は一体「ナニ」を支えに生きてきたんだ。

だが、このままだといずれは決壊する。このままの彼女と遊ぶのは
気が気じゃない。……それに、この事で折角の休日を台無しにされて
たまるものか。こちらだけが楽しんでいては気分が悪い。

「……あつ、ごめんねアイゼンちゃん、今のは忘れて……」

自身の口が勝手に動いていた事に気付いた木更君はすぐに取り繕
おうとするが、もう遅い、知った以上見逃すわけにはいかない。心の

中の化け物を見つけたからには。

「——既に貴女は、自分を赦してないじゃないですか」

彼女の瞳が大きく揺れる。

「自分は幸せになれない？ 誰が決めたんですか、運命ですか神ですか？ そんなのはアテになりませんよ」

「どうして、そう言い切れるのよ？」

彼女は気付いて居ないだろうが、声色に僅かに怒りが混じり始めた、彼女の触れて欲しく無い場所なのだろう。だから、ここで突っ込めば、下手をすると完全な決裂に繋がるかもしれない。

だとしても、劇薬でも無理くりには飲ませなければ、この化け物を多少なりとも弱らせる事は出来ないだろう。

「私は……かつて、大切な友人を殺した事があります」

「ッ……！」

「全部、勝手な決めつけでしたよ、この世に生きる化け物は皆、悪、そんな決めつけが、他ならぬ友人へと獲物を向けさせた。どうです、下らない話でしょう？」

「……ごめんなさい、嫌な事言わせちゃって」

今度は彼女が自己嫌悪に陥り始めた、ここは更に強めに行くべきだろう、ここからが正念場だ。

「嫌な事？ また貴女決め付けましたね、確かにあの時の事は辛い事

でした、けど、それが無ければ

——「俺」と言う狩人は存在していない」

「どう言う、意味、なの？」

木更君は、顔を上げ、困惑し、震えた声で問い返す。確かに、この世界の住人には訳の分からない話だろうが、それでも、俺は言うべきだと判断した。

このまま放っておけば、彼女はきつと友人達に武器を向ける事になる。その後に気付いたのでは遅すぎる。

「——あの時から、俺は本当の狩人になった。暗い過去にも、必ず光はある、例え絶望の中でも。それを手にすれば、その過去は単なる傷跡にしなくて済む、前に進む為の力へと変えられる」

「でも、私にはそんなの無理よ……」

「確かに一人じゃ無理だ、でも、君には里見君や藍原君が居る、足りないってんなら俺も居る」

へたり込んでしまった彼女の両方を掴み、顔を上げさせる。

「……里見君と……延珠ちゃんと、貴女も？」

こうして心の中に化け物を見たからには、狩人として、ヒトとしてやるべき事がある筈だ。さあ、固まった頭の彼女に言ってやろうじやないか、今日の彼女への返礼代わりだ。

「もしも、貴女のその心に巣食う闇が「化け物」ならば、狩人の「俺」が討つ。その闇が「悪」ならば、警察の「私」が逮捕します。——そして、その闇が「孤独」ならば、「私」が友達俺になってやりますよ」

そして俺はそのままの勢いで彼女の頭を掴み、自身の薄い胸板に抱き抱える。

「だから、大丈夫ですよ、人生なんだかんだあっても、最後の最期に幸

せを掴めば、笑顔でいられたら、それで勝者です。なのに、それを最初から捨てるなんて、負け犬みたいで腹が立ってきませんか？」

「……ぐすつ……つう」

俺は泣き始めた木更君の頭を、先程してくれた時みたいに撫で上げていく。

泣きじやくる少女を抱き、ひたすらに受け止める。そこにあるのは慈愛だろうか、自覚なく緩やかに口角が上がリ、微笑を帯びていた事に気づく。これが俺は知らない、父親の、母親の、心持ちなのだろうか。

「生きるなら、ただ生きるんじゃないやなくて勝者を目指せば良いんです、他の奴等の顔色を伺ってても仕方ないんですから、自分が満足出来る生き方をしましょうよ。分からなければ、信じれる誰かさんに聞けば良いんですよ、私で言えば、それは死んだ友人だった訳ですが」

彼女の泣き声を一つも漏らさない様、より力強く抱きしめる。すると彼女の両腕もまた、自身の背に手を回し、ひしと抱きしめた。

「その上で、満足出来る生き方を目指すために選択したなら、その後は、貴女が信じて進めば良いんです。自分で自分の舵を取れた時、貴女は立派な大人です」

彼女は込み上げる物全て吐き出す様に泣いて、泣いて、泣いた。

暫く、経っただろうか。

泣き止んだ彼女は、目をこすっては涙袋を真っ赤に腫らし、顔を持ち上げる。

「全く、私より幼い女の子の前でこんなに泣いちゃうなんて」

「ふふつ、貴女の言葉を借りるなら『子供らしくて大変よろしい』と言った所ですかね？」

彼女は一瞬、ポカンとしていたが、直ぐに子供そのものの様にカラカラと笑い出す。

「ええ、そうね、私はまだ私自身の舵を取れてない。アイゼンちゃんから見れば、まだまだ子供なのよね……変な話だけれど」

立ち上がった彼女の姿に先程まで射していた影は、少し晴れていた。……だがまだ完全ではない。

彼女の苗字にあった「天童」という名。恐らく彼女の闇の根本はここに通じている筈だ。彼女がその闇と真つ向から対峙すると言うならば、きつとそこが分水嶺になるだろう。

彼女が自身の中の化け物に自分の舵を明け渡して、子供のままでいるのか、それとも、彼女自身で自分の舵を取り、大人になるのか、と言う分かれ道に。

……せめて、彼女が子供の内は、見守り、手を貸そう。

化け物を狩る狩人として、

市民を守る警察として、

子供を導く大人として、

そして、隣に立つ友として。

「と、良い雰囲気なんですけど、少しだけいいですか？」

「ん、何かしら？」

「……貴女の涙で、試着していたワンピースがびしょ濡れなんですよ」

「……え？」

彼女はまず唾然とし、恐る恐る値札を手に取り、財布の中を見た彼女の目は潤み、身体はプルプル震えだす。ああ、これは駄目な奴だな。

「……買ったらどうせ私の物になりますから、私が払いますよ」

——木更は狭い試着室で土下座した。

??

「……確かに、あれは私が貴女を抱いていなければ良かった話ですけど、あのまま泣いていたら音が漏れ出して公開処刑される所だったんですよ？　そこまで羞恥に悶えたいと言うならさっきの事を里見君に全部話して」

「わ、悪かったわよ、だからそれだけは止めて切実に！　里見君に暫く椰揄われるから！」

「——子供らしくて素直でよろしい」

ニヤリと意趣返しにVサインと笑顔を作る。

「……アイゼンちゃんもさっきから仕返しししに來てるわね」

「当たり前です、あんなにも弄り倒されたら弄り返すのが礼儀なんですよ」

無い胸を張りながら両手を腰に当て、威嚇する様に背を反らせる。

「なら、ちゃんと礼儀に則ってお返ししないといけないわね」

そう言っ指差したのは、裏地が緑色をした箱型の何か。

「あれは？」

「あれはプリクラって言うのよ、簡単に言えば、加工した写真をその場で作れる機械ね」

「なるほど、そこで私のあられもない写真を撮って脅迫し、言いなりの少女に仕立て上げる気ですね？」

俺はわざとらしく肩を抱き、身をよじる。

「なんで写真撮ろうとしただけでそこまで悪く言われるのよ!？」

「おっと、違いましたか、それなら早く行きましょう、木更君」

隣の彼女が急に足を止めた為に、俺は繋いでいた手に引っ張られる様に振り向いた。

「……」

彼女は右手を繋いだまま、何かを言いたそうにもじもじとしている。言いにくいならこつちから発破をかけてしまおう。

「どうしたんですか、そんな生娘の様な恥じらいは似合いませんよ？」

「うう、一言多いわよ……その、あのね、私の事、もっと別の呼び方で

呼んで欲しいのよ」

彼女の呼び方……か、なんと呼ぼうか、そうだな、彼女の鋭さと柔らかかき、この二つを合わせて——

「……きさりん」

「何でそこでおかしな方向に飛ぶのよ!? 普通に木更ちゃんでも良いわよね!」

鋭いツツコミだ、確かに俺のネーミングセンスは悪いとよく言われたが、それでも思いがある。

「——私は貴女の事を、大事な友人だと思っています。親愛の証ですよ。多田島警部の事だって、下の名前は茂徳、ですけど、しげとくんって家では呼んでますからね。あ、後これは他の皆さんには内緒ですからね」

「……し、しげとくん……」

漏れそうになる笑いを抑える彼女の右手に両手を添え、一呼吸置き、彼女の目を真っ直ぐと見据える。途端、彼女はハツとしては、その表情を凜とさせる。

「そこで、私がきさりんと呼ぶ代わりに、貴女は私の事をバンカと呼んで欲しいんです」

彼女は瞠目しつつも黙ったまま、話を聞いている。

「私がこの世界に生まれて、初めて呼ばれた愛称ですよ、呼び捨てかつ、バンカーと伸ばさないのがポイントです」

「……それは、貴女の友達の話かしら」

問いかける彼女の目の色に微かな憐憫が差し込んでいたが、少なくともピーはまだ生きている筈だ。少なくとも、呪われた子供たちに関連した事件なら対ガストレア課にも情報は入るだろう、しかしながら、そんな情報は茂徳君から聞いていない。

「はい、と言っても、その子の方はまだ生きている筈ですから、別に重

い過去なんてのはありませんよ、また会いたいとは思ってますけど」

俺の言葉を聞いた彼女は、少し合間を開け、緊張に引きつる唇をゆっくりと開いた。

「……なら、えっと、バンカ」

「はい、きさりん」

「……やっぱり少し恥ずかしいわね」

お互いに呼び合い、彼女は少し照れているが、俺はそれが何故か面白くて少しだけ笑ってしまった。彼女がいじらしくも睨み付けてきたが、美人は幾ら睨んでも美人なだけだ。

「なら、この呼び方は二人だけの秘密にしましょうか」

彼女にウインクを飛ばせば、彼女は素直にそれを返してくれた。……思えば、今日の内に、ほぼ他人から色んな意味で歳の離れた友人になってしまうとは、人の縁とは奇妙な物だ。

友人の様な、姉妹の様な、それでいて親子の様な、緩やかで暖かな雰囲気の中、俺達は目的地へと向かった。

??

「これがプリクラの中ですか、案外広いような狭いような……」

「バンカは初めてよね？　なら、ちゃんと写るようにしてあげないといけないわね」

彼女がまたあの意地悪な笑顔を見せると、不可視の速さで俺の両脇に手を添え持ち上げ、更に互いの頬がぴったりと引っ付くほど、きつく抱き締められる。

「ま、まさか、きさりん！　謀りましたね！」

「ふふっ、私の恥ずかしい所を見たんだからこれでおあいこよ」

「やっぱりあられもない写真を撮ろうとしてたじゃないですか！」

「もうカウントダウン始まってるわよ、あのカメラに向かって笑顔よ、

バンカ、ほら早く！」

過ぎゆく休日、その中で彼女は、今日一番の笑顔を見せていた。強さと優しさの交じりあった笑顔だ。

「……貴女には泣き顔なんかよりも、その格好の良い笑顔が似合いです。あの不幸面の里見君と、弾ける笑顔の藍原君達にぴったりですね」

「貴女も、無邪気な笑顔が一番似合ってるわ。あのむすつとしたお巡りさんの隣にぴったり。初めて会った時よりずっと可愛げがあるわよ?。」

掛け合った言葉に思わずお互いに吹き出し、全く同じタイミングで一言。

「余計なお世話です（よ）！」

失われた子供の頃を、少しずつ取り戻そうとする二人、得たそれらを、当たり前前の日常として、フラッシュと共に記憶に焼き付ける。

お互いの最高の笑顔も一枚に焼き入れて。

??

プリクラを終えた二人は写真取り出し口から出来立ての写真を取り出し、まじまじと眺めていた。

「……目が大きくなってますね、これはこのプリクラの機能なんですか?。」

「そうよ、これ以外にも機能はあるけど、今回は敢えて使わなかったわ、ほら、これはバンカの分」

シンプルな二人の写真、しかしながら写真に写る子供二人は、飾らずとも美しくそこに在った。ギョツと顔を寄せ合ったその姿は、親子

の様な、姉妹のような、不思議な感を二人に覚えさせる。

「これはシールにもなっているんですね」

「好きな所に貼ったり、台紙に貼ったままカードとして使う人もいるわよ」

バンカが写真を掲げながら眺めていると、木更の携帯電話から着信音が響く。

「……もしもし、どうかしたのかしら、里見君？」

携帯電話に耳を傾けた彼女だが、次の瞬間、彼女の口から驚きの言葉が飛び出した。

「延珠ちゃんが行方不明……それは本当なの!？」

隣で声を荒げる木更の様子を見たバンカは、驚きをよそに静かに考えを巡らせる。

そして彼らへの試練と、次なる演目が今、始まろうとしていた。

??

……舞台は恙無く進行し、絶望の足音は彼らのすぐ側にまで来ていた。

勿論、それに争う者たちも存在している。

定められた滅びの運命を変える……それは正に、神を目指す行いに他ならない。

しかし、運命を変えるには代償が必要で、人はそもそも神になどなれはしない。

だが、そんな運命を、神をも撃ち抜く魔弾達は、彼らの手元にある。

さあ、銃を構えろ、撃鉄を起こせ、引き金を引け。

我々を散々弄んでくれた無慈悲な運命と神へ、紫煙と共に述べ上げろ。

復讐するは我にあり、と。

蓮とボウフラ

「お前は周りに気を遣い過ぎだ、いいか、狩場において戦うのは小僧一人だ。周りを観察するのは良いが、我を押しださなければ。何も出来なくなるぞ?」

昔、師匠が言っていた。

「たまには自分の為だけに戦ってみろ、生き延びる為とかでも何でも良い、それが無ければ遅かれ早かれお前は死ぬ」

その通りだった。二度の大戦を経て、歳をとっていく内に、俺は生きたいと思える若さを切り捨てて行った。その結果、死んだ。

生きようと思えなくなったのか……いや、これは違うな。

尽きない人の悪意に、絶望していたんだ。流れ行く川が果てなき地平に敗れ、海へと至る前に足を止めて池になる様に、緩やかに……かつ静かに。

だが、死に際にあの走馬灯に映った影を思い起こした途端、それは燃え上がり出した、まだ成せてない事がある、と。

俺は亡霊だ。

未練を抱えて、再び世界に生まれ落ちた。

それは更に増えた。

また会いたい奴らが居る、見ていて危なっかしい奴が居る、世界を超えても追い求めた正義の在り方がある。

一つ一つ増えていく度に、何かが大きくなっていく。

それは繋ぎ止める楔か、はたまた押し止める柵か。

??

「……申し訳ねえ、お前の相棒のイニシエーターが学校を裏口から抜け出すのを想定してなかった俺の不幸際だ」

小学校の校門の前で頭を下げる茂徳、彼は延珠を見送り、蓮太郎が

別件で動いている間、校門付近を見張っていた、が。

「いや、あんたが謝る事じゃねえ、俺の携帯に連絡が入るまであんたが知れる情報は0だったんだからな」

そう言う蓮太郎であったが、その表情には影が射している、どうやっても拭ききれない不安が彼の胸中を埋め尽くしていたのだ。

「多田島さんは内地の方を探して欲しい、頼めるか？」

何とか心中の焦りを握りつぶし、冷静さの仮面を被る、それは年頃の少年にしてはあまりにも大人びたやり口だ。

「……お前さんは外周区を当てる気か？」

「ああ、そのつもりだ。その……多田島さんが悪い訳じゃないが、外周区の子供の中には警察を嫌う奴も居るからな」

当然ながら外周区の子供達は裕福ではない、故に犯罪にも染まり易く、公権力を嫌う子供たちのグループもあるのだから仕方ない。

「……分かった、お前さんが納得行くまで探してこい、ただし、もし奴に遭ったなら、こつちに連絡を寄せ、いいな？」

「ああ、分かってる」

蓮太郎は反転してママチャリに跨り、力一杯にペダルを踏みつける。

そして、多田島が瞬きを数度する間に視界からすっかり消え去った。

??

少ししてその逆方向から二つの影、連絡を受け、シヨツピングモールから直行したアイゼンと木更が現れた。

「多田島警部、藍原君が行方不明とはどう言う事ですか？」

一つ目の影、アイゼンが茂徳に問うと、彼は渋面を作りながら、ガードレールに腰掛け、話し出した。

「どうやら、里見蓮太郎は藍原延珠の事を普通の子供として小学校に入れていたらしいな、その所はお前さんも知っていたのか？」

茂徳はそのグリズリーにも似た強面のまま木更へと視線を飛ばす。

しかし、微動だにしない木更のその姿はやはり武人と言った所だろうか。

「ええ、それは知っていたけど……」

木更はそう言いかけた所で、ハッと息を飲み、目の前の茂徳と同じ様に渋面を示す。

「ああ、バレた、藍原延珠が『呪われた子供たち』だと。クラスどころか学校全体にな」

木更の肩は僅かに震える。アイゼンは校舎へと視線を向け、そのまま口を開く。

「……誰が彼女を追い出したんですか？」

「——少なくとも、今お前が想定しているだろう『最悪』通りだな」

あまりにも行間を飛ばしたアイゼンと茂徳の会話であったが、木更は即座に理解した。

「教師も、他の子も……延珠ちゃんの事を……」

それ以上を言うのは憚られたか、木更は言い切らずに閉口する。内に秘めたるは瑞々しい義憤、握り締められた拳は白んでいる。

「……昨日まで普通の人間だと思っていた子供が呪われた子供たちだと分かれれば、そうもなるだろうよ」

「だからと言って、そんな事をしていい理由にはならないわ。それをして何の得になるの？」

「そこまで先を見据えて行動出来るのが人間なら、過去の過ちは全て手の込んだ喜劇に出来るんですがね、でもそうじゃない、怖いものは遠ざけようとする、それは本能なんですよ」

当然ながら、今この場に居る者は皆、延珠を化け物として排斥した事を唯一の正義だったとは思っていない。

仕方ない事だと言えども、そこには少なからずの憤懣があった。

それでもこの世界はそうして回っている、ありとあらゆる怒りの矛先をガストレアに与する物全てに向ける事によって。そうする他に

恐怖に勝つ方法は無いと盲信して。

「こうして駄弁つていてもキリがありません、この後は藍原君を見つけた後にでもすれば良いですよ？ さあ、とつとと行きましよう」
沸き立つ行き場の無い感情を各々の心の底に沈め、パンと手を叩いたアイゼンを筆頭に彼らは彼女の搜索に足を向けた。

??

——結論から言えば、彼等は藍原延珠を見つけ出せなかった。

土地勘のある茂徳の力を借りて内地に聞き込み調査を敢行した彼女らだったが、延珠の目撃情報は全くと言っていい程出なかった。

雨も降り始め、それが酷くなるにつれ人が少なくなったのも災いし、内地での聞き込みは頓挫してしまった。

最後の希望となった外周区に向かった蓮太郎の空いた手には開かれていない黄色い傘が握られていたのを見た彼女らに、取れる手段はなかった。

??

——東京エリア 内地

「で、何で木更さんが俺の家に泊まるなんて事になるんだよ？」

疲れ切った様子の蓮太郎は、草臥れたTシャツ姿で座布団に胡座をかいていた。声にはやや投げやりな不満の感情も見え隠れしている。

「それは里見君が今にも首を吊りそうな顔で帰ってきたからでしょう？」

「今の俺、そんなにも酷い顔か？」

皮肉か天然か、もはや空元気以外に出せる物もない様で、自身への嘲りにも聞こえるその冗談染みた台詞は、狭い部屋に響いて消える。

「多田島さん曰く、『笑う気にもなれん不幸面』だそうよ」

木更は台所に向かったまま、その台詞を流す事も無く拾う。せめて、ただこの一時だけでも、日常を取り戻す為に。

しかし、そんな日常は余りにも、悪意には脆い。

「……」

不貞腐れた子供の様に、蓮太郎はそっぽを向く。

二人の居る寂れた外見の二階建てアパートの中はひび割れた壁と言う外見に恥じぬ寂れ具合で、室内には確かな生活感の染み込んだ家具がとぼとぼと並ぶ。

そして、それらは寂しさの満ちた室内に微かな温かみを齎していた。

「外ではアイゼンちゃん達が車の中に待機してるから、黙って抜け出したりしても直ぐにバレるわよ」

その声には、やんちゃな子供を嗜める母の様な優しさが籠っていた。

「……しねえよ」

それに釣られてか、蓮太郎の口調も当人らの知らぬ間にそうなっていく。

そして、露骨なまでに口数を減らして行く蓮太郎の側に、エプロンを付けた木更が台所から語りかける。

「延珠ちゃんは強い子よ。……きつと無事に戻ってくるわ」

その言霊は、自身に言い聞かせる様に、深く重く響く。

「……確かに、延珠は強い。でも延珠は人間だ、強くても、無理をすればどんどん削れて行く。そんな事を『でも仕方ありませんよね』なんて曖昧な言葉で蓋したくねえんだよ」

まるで世界への訴えのようなその言霊は、何時もより静かな部屋にしんと響く。

やがて、二人の言葉の出がぶつかり、部屋には僅かな静謐が訪れた。油の弾ける音と香ばしい香りが部屋に満ちる。沈黙は二人の心を

ジリジリと焦がしていく。

「木更さん、俺達は延珠たちだけじゃない、彼女たちの強さに頼り切り過ぎたんだ、なのに俺達は彼女たちに何も出来てない……んなの、おかしいじゃねえか……いつそ、延珠の幸せの為には……」

その先に何かがあるか、木更は聞きたくなかった、いや、言わせたくなかった、他ならぬ蓮太郎の口からは。

「里見君、それ以上は言わないの」

静かな怒声と共に大皿がテーブルの上に差し出される。

皿の上には湯気か登り立つ木更謹製の山盛りもやし炒め。

黒焦げのもやしが散見されるそれを、間髪入れず「いただきます」と言って木更は口へと運ぶ。

「えほっ！」

「木更さん!?!」

むせ返りながら、蓮太郎に差し出された茶を呷った木更は、ポツリと口を開く。

「こほっ！ んん、里見君の料理の美味しさが身に染みるわね……」

先程の粗相を恥ずかしく思ったか、咳ひとつ、空気を切り替えても尚木更の頬はほんのり赤く染まっている。

「何やってんだよ木更さん……」

呆れる蓮太郎を他所に、木更は大きく息を吸い込み、頭の中で整理してからつらつらと言霊を述べ上げる。

「里見君は……延珠ちゃんに、これよりもずっと美味しい、もやし料理を作ってきた……」

始めに紡いだ言葉は、美味しい料理。

出来立ての料理は、身も、心も温める、それだけでも、木更の中では彼をヒーローと呼ぶに相応しい尊い行いなのだ。

木更の目には確固たる意志が宿っている。それは、蓮太郎の紡ぎ上げた物を、彼自身に否定させるものかと言う意思である。

「延珠ちゃんが笑顔で小学校に通えたのも、お金だけの話じゃないわ。里見君、君が毎日送り迎えして来たからよ……」

二言目には送り迎え、この言葉は言外に、蓮太郎は延珠に外の世界への繋がりを与えたと言う事を示していた。

学校に呪われた子供、結果はこうだったとしても、友達が出来た事を誇らしげに語っていた延珠の笑顔には、きっと毎日送り迎えしてくれている蓮太郎への感謝もあつた筈だと、木更は考えていた。

一言一言に力を込める。肺に込めた空気を押し出す様に、皿から蓮太郎へ視線を移した木更は胸に手を当てる。

「それに……里見君、君は延珠ちゃんと言う存在をとつても、とつても大切に思ってるじゃないの」

最早、言うまでもない事だ、蓮太郎が今、胸に抱く無力感も怒りも、全てはどこかで悲しみに暮れているだろう延珠を思うが故なのだから。

その思いは、父子にも、兄妹にも、友人にも、恋人との間にも似た物だ。里見蓮太郎だけでない、藍原延珠にとつても彼は、父であり、兄であり、友であり、無二の『ふいあんせ』でもある。

彼らの思いは繋がっている、それは、間違いなく救いなのだ、お互いにとつて。

「……！」

対面に座す蓮太郎は瞠目する。

「……里見君が何も出来てないなんて、延珠ちゃんも……私も、思っていないのよ?」

思いの丈を語り上げた木更は、少し息を荒げながら席に着く。

自分を卑下する事の是非は、当人には分からないもの、だから、木

更は気付いた。

木更は昨日、それに陥った時、自分を諫めてくれた存在に会ったばかりだったのだから。

過小評価と自己嫌悪の化け物に木更が気付く、これはアイゼンも想像だにしていない、まったく偶然の産物であった。

そして、その一皮剥けた様な木更を眺めていた蓮太郎は、観念した様な……納得した様な風に、黒焦げのもやしを箸にとり――

「――いただきます」

そう言つて口に入れると、蓮太郎は先の木更の様に勢いよくむせ返った。

蓮太郎の口の中に広がった苦味と焦げの匂いは、初めて延珠が家に来た時の記憶を鮮烈に思い起こさせた。

まだ料理に不慣れだったその時の蓮太郎は、黒焦げのもやし炒めを作ってしまった、イニシエーターになったばかりの延珠にまともに手も付けてもらえなかった。

それから料理の腕を磨いて行きながら、蓮太郎は延珠の信頼を勝ち取つていったのだ。

そんな懐かしい日々が、蓮太郎の視界の中、延珠の姿を象りながら陽炎の様に揺らめき立つ。

どれだけ遅くとも、前に進んでいる、それは事実であり、確かな現実である。

「――木更さん、俺は、延珠に何か返せてるのかな」

翳りを帯びた漆黒の瞳に光が宿る。

燻る火種は燃え上がる、彼女の、延珠の救いキローになるのだと、己を鼓舞するように。

「ええ、私が保証するわ……だから、しゃんとしなさい、そんな情けない姿を延珠ちゃんに見せる気？」

木更は、翳りを照らすように、日の光の様な微笑で蓮太郎を見つめた。

「ああ……俺が延珠に心配かけてたら世話ねえしな」

ここで少年は、己を締め直す。

湿気た不幸面は、僅かに乾いていた。

??

街灯に照らされても尚仄暗い夜。

少し遠くのアパートの二階の角の一室からは白い光と微かに耳に入る団欒の音が漏れていた

「若い衆で宜しくやってるんでしようかね？」

「いや、お前もガキだろうがよ」

住宅街の路地に堂々と駐車を決めこむセダンの中、俺と多田島警部は彼らの住むアパートの部屋をジツと観察していた。

これは、1箇所蛭子影胤に集まるよりも、こうして分かれて過ごす事で、夜半にどちらかが例の奴の奇襲を受けたとしても、最悪、被害を半分に抑えられるだろうと言う考えから俺が提案した事だ。彼女の背を押そうと言う下世話な考えもない事はない。

冷めた弁当を黙々と食べ続けていると、警部が俺が座る助手席の前の空いたスペースに携帯電話を置いた。

「これは？」

「新しいスマートフォンだ。お前が電流を体に通すなんて無茶したお陰でぶっ壊れた事をだな、マークスマンの奴に伝えたらこれを渡されたんだよ」

一見すると、前のスマートフォンに似たような姿だが、触ってみると、全体がゴムの様な物で覆われていた。この世界で一週間ほどしか生活していない俺はまだ、この世界の科学技術に明るくない、だから、この中には他に仕掛けがあるのかもしれないが、使ってみれば分かる

ことだろう。

「……少し重くなってますね」

「んで、こっちは代えのハーブーンガン用のバッテリーだ、こっちも壊れてたからな」

「ありがとうございます、警部」

俺は後部座席を占領する楽器ケースの中に受け取った物を詰め込んだ。後部座席には、一応必要になる可能性を考えて、こうして観察に移る前に、一旦警部のアパートに戻り、制服やAGV試験薬などの道具類を全てこの車には積み込んである。……はつきり言ってしまうと、再三不意を突かれた後の対策がたったこれだけと言うのは、後手に回っているとかわざるを得ないが。

「そしてしげとくん、ありがとうございます」

「何で二回言ったんだ？」

「木更君に私と一緒に休暇を過ごせと言ったのはしげとくんでしょう？ 木更君から聞きましたよ」

「……俺は何も思いつかずに丸投げしただけだ」

ハンドルに両腕を預けた彼はだらしなく身体を倒す。草臥れたモスグリーンのジャンパーと合わせて、まるで岩に張り付く湿った苔の様だ。

「もしかして、私が警察官に撃たれた事、気にしてますか？」

彼は優れない顔色のまま口籠っていた。

俺は彼等に銃を撃たれた事よりも、彼等が殺された事の方が気掛かりだった、目の前に奴が居て、それでいて何も手を出せなかったのは、俺の手落ちだ。

「……警察官に撃たれた事より、彼等を助けられなかった事の方が、私としては重いですね。実のところ、警部もそう思っているんじゃないですか？」

「馬鹿野郎、優劣なんかつけられるモンかよ、お前が同僚に撃たれた事も、奴等にまた同僚を殺された事もな」

若干の怒気と無力を表したかの様な脱力感を孕んだその返答には、彼の鬱憤の様な物を感じる、彼の方が、この世界で生きてきた年数は

長い、この世界では若輩者の俺よりも、遥かにこの世界の事を詳しく知っているのだろう。

所でまたとは何だろうか、俺と会う前にそんな事が……そう言えば、会議の時にも、奴を知っている様な素振りを見せていたが——
「まさか、面識があるんですか、影胤に？」

「そういうえば、お前さんにはまだ言っただけじゃなかったな。お前さんと会う少しばかり前に遭遇してたんだよ。その時、里見蓮太郎も居た」

「いやはや、それは……とても面白い偶然ですね」

「俺はその時、五人の警官隊に指示を出す立場にあつた。俺はガストレア絡みの事件である可能性が高かつた為に、民警が来るまで待機する様に指示を出した……だが、俺が目を離している内に、警官隊の内二人が痺れを切らして突入しちまつた」

悔恨する様に語る彼、この話の起こりから察するに、この先は……
「——そして、何故か部屋に居た影胤に殺された、と」

「そう、それで後から里見蓮太郎と共に突入した残る三人も奴に撃たれた。病院には運ばれたが、結局死んじまつた」

俯く彼のその姿に、俺の脳裏には無力という言葉が過つた、俺の生きた時代に何度も見た姿だ。

「なるほど……そういえば、ガストレア絡みの事件と言いましたが、まさか、私があの時戦つたガストレア、関係していたんですか？」

俺の頭の中には住宅街で狩つたあのクモのガストレア、俺が警察になる遠因となつた存在が思い浮かぶ。

「……お前と戦つた被害者がガストレア化した原因、つまり『感染源』となつたガストレアは恐らくだが、聖天子様の依頼にあつた例の箱を取り込んでいると言うガストレアだ」

なるほどどうして、こうも奇妙に道筋が繋がって来ているのか、こゝうもあらゆる点と線が繋がって来るならば、影胤ですらない誰かが裏で糸を引いていても驚きはしないな。いや、むしろそう考えるべきなのだろうか。

「その根拠は？」

「あの日の事件の感染源ガストレアは未だに行方知れず、更に事件の

翌日、例の会議で取り上げられた逃亡中のガストレアの話、そして取り込まれているそのブツ、『七星の遺産』を狙っている影胤、感染源ガストレアが七星の遺産を取り込んだガストレアと同一個体ならば、あの日、影胤が事件の現場に居た事も納得出来る」

彼は推察を言っているだけだ、しかし、その確かな物言いには確信めいた物が宿っていた。

なるほど確かに、彼の言い分には筋が通っている。そもそも内地で騒ぎにもならず暴れられるガストレアが複数体もいれば、とつくに東京エリアここは滅んでいる。彼の仮説に致命的なミスは無さそうさ。

「……特に（仮説には）問題は無さそうですね」

「いや、問題大アリだろうが」

俺は弁当を食べ終え、箸を置くと同時に口を開く。

「それにしても、藍原君は無事でしようか」

「……並大抵の事じゃ死にやしねえだろうさ」

「物理的には、そうでしょうね」

少し彼の言葉を皮肉った台詞を言うと、彼は呆れた様に首を縦に振った。彼は懐を弄り小箱を取り出すと、その中から錠剤の様な物を数錠手に取り、口の中に放り込んだ。

俺が眺めていると、彼はその小箱を差し出す。掌を出し錠剤を受け取り、口に入れて噛めば、口の中にハーブの様な匂いが広がり、スーツとする。……いや、弁当に合わないな、これは。

恐らく、これは彼が辞めたタバコ代わりの代物なのだろう。

彼もまた、今の状況に少なからず苛立っていると言う事だ。

「……全く、誰があんな美少女をよつて集つて追い出そうとするんでしょうかね」

俺がそう言うと、彼は大きなため息を吐き、窓の外を眺めながら呟いた。

「忘れるには、真新し過ぎたんだよ、ガストレア大戦ってのは」

「……」

「ガストレアとの大規模な戦闘はこの東京エリアではガストレア大戦
含め過去に二度あったが、後者は自衛隊とバラニウム弾頭の開発に
よって犠牲はほぼ出なかった」

「ガストレアを打ち倒した前例はあれど、ファーストコンタクト初対面の傷が癒える訳で
はないと言う事ですか」

「……十年前のガストレア大戦を区切りに、大戦前に生まれていた人
間は『奪われた世代』と呼ばれ、大戦後に生まれた子供たちは『無垢
の世代』と呼ばれた……呪われた子供たちはここに入る。藍原延珠と
同年年の子供たちもほとんどが無垢の世代の筈だ」

「なるほど、何も知らない存在だったから、無垢。しかし、藍原君のク
ラスメイト達が彼女を追い出したと言う事は、ガストレアへの恨みは
しつかり受け継がれているんですよね、無垢な子供の心を、一体誰が
黒く染め上げたんでしようかねえ」

「それもそうだろうな、あれからまだ十年しか経っていいえ、家族をガ
ストレアに殺された親世代も当然いる。……その恨みと恐怖に囚わ
れた親が子を育てれば、ガストレアへの恨みと恐怖は子供へ受け継が
れるだろうさ」

「親から子へ受け継がれる物は決して良い物だけではないと言う事で
すか……いやまあ、ガストレアを脅威とする社会で、ガストレアに関
連する物を排他する人間が生まれるのは正常な事です。ガストレ
アがウイルス、病気の様な存在と広く認知されているなら、尚更にそ
れは真つ当な反応だと言えます」

彼はこの言葉に何も返す事は無く、アパートの方を眺め続けてい
る。

「ですが、もしそれが続けば、ガストレアと戦争する前に呪われた子供
たちと戦争する事になるでしょうね。それから、私みたいな外周区か
らの出のイニシエーター達からの信用は完全に失われ、民警と言うシ
ステムも成り立たなくなる、今そんな状態になっていないのは、偏に
彼女達もまた何も知らない『無垢』だからこそ。皮肉なものですね、ど
んな子供も無垢だからこそ、より状況は悪化する」

座席に背を預ける、少しばかり、昔を思い出す。

子供の頃、俺に化け物に対する恨み辛みなんて感情は無かった。だが、周りはそうじゃなかった、自分がそう認識していなくても、周囲の人間と言う狭い世界の常識ってもんが化け物への恨み辛みでごつた返してたんだ。そして、愚かな俺は、そんな感情を持った村民の考えすら理解出来ないまま流され続けた。その結果が、友人の死だ。

だからこそ、俺は言う、ありふれた言葉でも、それを誰もが心の中に抱いていても、口に出さなければ忘れてしまうものだから、ヒトつて生き物は。

——『憎しみに目を曇らせてはいけない』

「……月並みな言葉ですが、それ程繰り返し語られたと言う実績があると云う事です。憎しみのあまり、親の宿業を子に背負わせるなんてのはその最たる過ちですよ」

そう俺が言い切ると、腕を組みながら、ゆっくりと彼が振り向いた。

「あのな、子供ってのは精神的にも肉体的にもまっさらな存在だ、ましてや、外周区育ちなら知らない事ばかりの筈。……確かにお前さんは、今の世の中に無知ではあったが、無垢な存在には思えない……はつきり言えば——記憶喪失にもな」

驚く程に、熱くて冷めた声。真っ直ぐに向けられた意識に思わず俺は、彼の目から視線を逸らせなくなった。

「——お前さんは、いったい何なんだ？」

俺は、後にも先にも、あそこまで悲しそうな「眼」を見ることはないだろうと、そう確信した。

??

「多田島さん！ もっと飛ばしてくれッ！」

「馬鹿野郎！ 通学路沿いの道路でこれ以上速度出せるわけねえだろうが！ ガキが飛び出した瞬間終わりだぞ！」

翌日の朝を迎えた蓮太郎達の元へ、学校側から驚くべき一報が入ってきた。

学校へ延珠が戻ってきたと言う情報である。

これを聞いた蓮太郎と木更は急ぎ茂徳達のセダンに乗り込み、こうして学校へ向け車を走らせていた。

「延珠ちゃん、どうして学校に……」

「分かんねえ、でもそこに延珠が居るなら行くしかねえ、そうだろ？」

木更さん」

「……そうね、考えるのは延珠ちゃんに会えてからにしましょうか」

後部座席には蓮太郎と木更、その様子を眺めるアイゼンはただひたすらに、延珠を逮捕しなくて済む事を祈っていた。

排斥を受けた子供の化け物がその後、復讐に来说う事態も、彼の経験から考えられる事だったからだ。

同じく過程こそ違うが、茂徳もまたそう思っていた。

「逸るなよ……！」

絶妙な加減でアクセルを踏んでいた茂徳は、無意識に言葉を発していた。

??

俺達が小学校に辿り着き、目撃したのは、オレンジ色の髪の少女が、周りに立つ子供達に石を投げられたり、罵られている様子だった。

それを見て真っ先に降りた里見君は、なりふり構わずに少女の元へ駆け出した、木更君と俺もそれに続く。

「多田島警部、もしも何かあった時の為にハンドルは握り続けておいて貰えますか」

「分かってる、また逃げられたら流石に困るからな」

俺は降りる前に一言多田島警部をお願いし、運転席で待機してもらう。

そして車を降り、門を抜け、近付けば近付く程に、その光景に混じり合う感情が身体中に染み込んで来た……恐怖、怒り、困惑、まだ幼い子供達は、目の前に立つ存在に、それらの感情をぶつけていた。

「オレはガストレアにお母さんを殺されたんだ！ お母さんを返せ！」

特に、彼女の前に立つ子供達は、三角形の定規や鋏などを持って威嚇の様な行為をしている。

そんな中、矢面に立つ藍原君の心象は計り知れない、しかしながら、誰もこの状況に異を唱える者は居なかった。

いや、唱えられなかったのだろう、例えそれが自身の道徳に反する行為であろうと、そこに正しさであろうと、既に生まれた流れに逆らう事は、少なからずの苦痛を伴う。それを覚悟した上で物を言う子供が居たとすれば、普通の大人と比べても余程人間が出来ている、出来過ぎている。

気付けば、藍原君の側には里見君が居た。一度だけ、たった一度、子供達の顔を見渡し、彼女の肩を叩く。

「――帰ろう、延珠」

こちらへ戻る里見君達と合流した木更君は、そのまま学校の門の方へ戻って行く。しかし、俺の足は一向に後ろを向かない。

「これで、良いんですか？」

「……」

心の中に潜む化け物を見た、動く理由ならそれだけで良い。

俺は真っ直ぐに子供達を見据えながら、進む。

「……初めまして、皆さん、私は『呪われた子供』です」

僅か10ヤードの距離、更に俺は子供達の方へ踏み出していく、殆

どの子供達は退いていたが、武器代わりの三角定規や箒と言った道具を持つ子供達は震える足を堪えていた。

この光景は正に、今この世界に蔓延る闇を表していた。

当たり前に転がる日常すらも、心を切り刻む剥き身の刃として少女達に襲いかかる。

俺は素直にこう思う。

「糞食らえ」と。

「な、何だよ、急に出て来て！」

「まずは自己紹介を、名前はアイゼン・バンカー、歳は分かりませんが、多分同い年くらいですかね」

更に一步、対して彼等は手に持った道具類、それらをこちらに向けてる、まるでフアランクスのような布陣だ。

「アイゼン……」

里見君は俺が矢面に立つ事に対して心配なのだろう、しかしこれでも俺はそれなりにギリギリを生きてきた、今更何という事はない。

「里見君、私はやるべき事を見つけたからやっていくんですよ」

背後に立つ里見君を振り切り、俺は進む。

「――間違った事をしている子供を叱るのは……大人の仕事の筈でしよう？」

誰にも聞こえない位に小さな声で呟いた言葉は、あの世界でまともに果たせなかった役割を自身に問い直す言葉だった。

「――大人？ アイゼン、そんな見た目のお前がそう言うなら俺はもっと大人だろうか」

そんな俺の言葉に怯まず答え、隣に立ったのは、黒尽くめの少年、振り返れば、木更君が藍原君の両肩に手を置いて此方を見守っていた。

「おや、失礼、聞こえてましたか」

「……俺だって、良くねえよ。なのに、昨日までの俺は何もかも諦めた……延珠の事すらも。情けない話だけどな」

その声は、自罰的な念を含んでいた。己の罪を振り返るにはまだ若

いとも思えるが、里見君がそう決めたなら私は何も言う必要はないだろう。

「……」

「でも、思い出したんだよ、俺は何をしたいのか」

昨日の死にそんな顔付きとは全く違う、ギラついた、未来に突き進む少年の目だ。俺には眩し過ぎる位の。

「それで、私に何を？」

「ここは、俺に任せてくれないか？」

頼もしさ、その一言が頭を過ぎる。

東洋には確かこんな言葉があつた筈だ。

『男子、三日あわざれば刮目して見よ』……里見君の目は随分と良いものになった。きつと木更君が発破をかけてくれたのだろう、何となく判る。

会って僅か数日、しかしながら確かに二人の成長を開幕見た俺はすっかりおかしくなつて笑つてしまった。全く、コレだから若者と言うのは面白い。

「ふふっ、ええ、子供を見守るのも大人の仕事ですからね」

「つたく、釈然としねえ」

里見君から溢れる年相応の若い生意気さを含んだ愚痴に更に俺の口端が上がってしまう。石油色の瞳に赫赫と燃える火の姿が見える様だ。

俺は踵を返し後ろへ下がる。特等席から彼の独壇場を眺める為に。

車の側面に背を預ける多田島警部の隣に立ったとき、丁度里見君も喋り始めた。

「俺の名前は里見蓮太郎、分かつてはいると思うが、ここにいる藍原延珠の保護者代わりで、プロモーターだ」

里見君がまず口にしたのは、自己紹介。何をしでかすかと困惑していた子供達が更に困惑し始めた。

「皆、ここに居る皆に聞いてほしい事がある」

不意打ち染みた先手を打つてその先に繋げる、なるほどどうして、中々見事な手腕だ。

その証拠に、不意打ちをモロに受けた子供達は啞然としたまま里見君の言葉に耳を傾けざるを得ない。

「俺達は戦っている、ガストレアと」

……話の流れが読めて来た、まだ俺は里見君の事を詳しくは知らないが、俺を追って署にやって来たり、警察に連れて行かれた俺を追って来たり、妙な所で踏ん切りが良い若者なのはよく分かる、きっとコレもそうなのだろう。

「ここに居る延珠も同じだ。でも、彼女達にはもう一つ、戦っている『敵』が居る。見えも触れもしない、ある意味で言えばガストレアと同じ位に恐ろしいもの……」

真に迫る里見君の物言いに、場の空気は静まり返る。

「……それは、世界からの『偏見』だ」

「へん、けん？」

里見君の言葉に頭を傾げる子供。

「偏見って言うのは、アレはこう、コレはこうって一方的に決め付けていく考えだ。……彼女達はガストレアと同じ、そんな偏見で多くの子供たちが、今も苦しんでいる」

……生き残る為に異物を排除する、何処の世界にも似通った思想は転がっているが、結局は過度なファシズムや全体主義を生み出し、戦火を熾した。

しかし、その事実を、団結力と言う物の力が時に戦争すら巻き起こすと言う力の証左でもある。

「だから、頼みがある」

なればこそ、その力は向けるべき所へ向けるべきだ、例えそれが吹けば飛ぶ様な理想論であっても。

「……全部を受け入れてくれとは言わない、関わりを持つとうとしても良い、ただ――」

――ただ、見守って欲しいんだ」

泥の様な世界の暗い現実、腹に美しくも脆い硝子の理想論をくくり付けて毅然と挑むその姿。

「彼女達が産まれて十年、まだ分からない事だらけ、怖いのは分かる、

でも、それでもまだ決め付けるには早過ぎる……だから、何も言わなくても良い、ただ、静かに見ていて欲しいんだ。きつとそこからでも遅くはない、だろう？」

泥の中に咲く蓮Lotusの様な在り方は、俺の心に確かな熱を生む。

子供達はただ、里見君の言葉を黙って聞いていた。

しかし、その内の一人は違う様だ。

「じゃあ、じゃあオレはどうすりや良いんだよ！」

ガストレアに母を殺された子の心の奥からの慟哭。

……どちらが残酷だろうか、理不尽に奪われ、抗う力も無く、ただ無力さを噛み締めて生きる幼年期か、無双の力を手に入れ、周りに畏怖や憎悪を向けられながら過ごす幼年期か。

どちらがマシか、なんて考えではきつと心の化け物を殺す『理想』銀の弾丸にはならない。

俺もどうやらまだまだ青いようで、微かに顔を覗かせた激情のままに彼らの言葉を間違いだと断じようとしたが、それすらも間違いだつた事に今更に気付いた。

……少しくらいは欲張ってしまったても構わないだろうか。

見守ると言ったそばからこうするのは無粋の極みだろうか……

「言ったそばから出しゃばるのは許して下さいね、里見君？」

顔を僅かに歪ませていた里見君の脇から俺は顔を出す。

「なっ……見守るって言ったじゃ……」

「確かに、子供を見守り諭すのは大人の仕事ですが、里見君が私を子供扱いするのであれば話は別です、子供が子供と仲良く語り合おうが文句はありませんよね？」

「っ……本当に子供かお前？」

そんな捨て台詞を吐く里見君の隣を通り抜け、俺は泣きそうな表情を見せている先の少年の前に立つ。

「さて……自己紹介はもういいですね、私が『呪われた子供たち』なのも知っている、貴方は普通の男の子、ガストレアを捻り潰せる程の力など無い、ただの人」

「……」

ぐつと口端を巻き込む彼の表情はただ一言、悔恨。

無力な自分への、力を持つ子供たちへのそれだと言う事は言わなくても分かった。

そう、端^{はな}から考えるべきだった。

呪われた子供たちは多数の一般人には恐怖の対象であり、憎悪の対象だ。

しかし、『率先して戦う対象』ではない。現に商店街の事件では周りの人々が彼女をランチにかけたりしなかった様に。

なのに、彼はガストレアと呪われた子供たちを同一視しているにも関わらず、延珠や俺にも怯えこそ見せたものの、三角定規を片手に一歩も退かなかった。

虚勢とは言い難い闘志のようなもの、狩人としての俺が感じた物はそれだ。

そこで俺は気付いた。彼の心中を占めていたのは恐怖や憎悪だけじゃ無い。

無力感と怒りだ、母をガストレアに殺されても尚、何もできない自身への。

何もかも、歪んでいたのだ。

社会が、世界が、歪ませていたのだ。

俺は、ただその少年の元まで歩き、グツと両手で彼の頭を胸元に抱き込む。

昨日今日と、続けてこの手を使うとは思いもしなかった。

俺が昔の姿だったらただむさ苦しいだけだが、幸いにもこの見た目だ、敵意を削ぎ落とすのは簡単だ。化け物なんかには程遠い、この身体は殆ど人間と変わりやしない身体なのだから。

「何も出来ないのは……悔しいですよね」

「……」

俺の胸にすっぽりと収まった彼からは先程までビシビシと此方に向けられていた敵意は感じられない。

怒りを支えに張ったであろう、先程までの威勢はすっかり消え失せていた。

きつと、怒りの矛先を失ってしまったからなのだろう、そして、これが彼の本当の姿だ。

……呪われた子供たちは、救われるべきだ、報われるべきだ。生まれなど選べないのだから、だが、無垢の世代や奪われた世代はどうなのか、俺はと言えば、ここにきて数日の旅人どころか唯の通りすがりも同然、それでも、何かと思う所はある。

多田島警部の様に、ガストレア大戦を過ぎた事だと割り切れる人間はどれだけ居るか、喪つたものを抱えて先の見えない旅路を歩く人間の方が遥かに多い筈だ。

しかし、誰もそれを尊ぶ事はない。

何故なら皆、同じ目に遭ったからだ、周りにかける余裕も情けも持てやしない。

背中まで口を開いて待っている絶望から逃げおおせるために、誰かの荷を分け持つ事もなく。

そうして抱え切れなくなった重荷は何処へ行くか……そう、無垢弱者たちの世代へだ。

……思えば、何処も彼処もそうだ。

戦火に焼かれ、朽ちた土地に起きるのは必ずしも希望への萌芽だけではなかった。

弱い者は心を無くした化け物達に真つ先に蹂躪され、消耗して行くだけ。

俺は見て聞いてその時代の中で生きて来た——だから、諦めたくない。硝煙の匂いと共に訪れる見えない化け物どもに、彼らが蹂躪される未来などにさせてたまるか。

外から来たからこそ、俺が戦う者であるからこそ、掛けられる言葉がある筈だ、絞り出せ。

「——だったのなら、その恨み辛み全部私にぶつけて下さい。それ全部、ガストレアの奴らにぶち込んで来ますから」

「そ、それって……」

里見君の見守って欲しいと言う言葉は、解釈次第では魅力的だ、恐怖することなく、恨むことなく生きれるのなら、そっちの方が遥かに

楽なんだから。

しかし、それこそが生きる理由となる場合もある、ならば運ぼう、俺がメツセンジャーとして、全ての苦しみと共に歩み、奴らの眉間と心臓に撃ち出してやろう。

「私はやると言ったらやる奴ですから」

『呪われた子供たち』も『奪われた世代』も『無垢の世代』も、全員が心の中に飼っている化け物を撃ち抜く、やってやるさ。

「貴方の全てを私に預けて下さい、胸に詰まったその泥の様な言葉を全部吐き出したら、今度は私の言葉を飲み込んで貰いますからね」

刹那の静謐、俺の意図を理解したのか、すうと息を吸い込んだ彼が口を開く。

何時もの癖で回りくどく言ってしまった台詞だが、彼が聴くて助かった。

「……っ、悔しいッ！ 悔しい悔しい悔しいッ！ ガストレアが憎いッ！ でも何も出来ないオレが一番悔しくて憎いッ！」

堰を切った様に溢れ出す言葉と涙は、彼だけの物ではない、ガストレアに何かを奪われた者達皆の言葉だ。

きつと、彼だけじゃない。

微かに振り返れば、里見君を始めとした比較的年長者達も、俯き何かを考えている。

同じ言葉の連呼、しかし一つ一つの言葉には子供の言葉とは思えない重さが宿っている。

そうして暫く叫び通した彼は息も絶え絶えになっていた。

「……よく分かりました、後は私に任せて下さい。次は私が伝える番ですね」

そう言っただけは、もう一度彼の背に手をかけ、思い切り抱きしめた。

俺の肋骨と彼の頭蓋骨がドンと鈍い振動を起こす。

今着ている服は薄手のワンピース、きつと聞こえる筈だ。

「聞こえますか？ 私の鼓動が」

胸に抱いた彼の方からくぐもった声がする。

「……聞こえる」

「まず一つ、忘れないで下さい。『彼女たち』はここに生きているって事を」

「うん……」

「約束ですよ？ ほらもう泣かない泣かない……よし、もう大丈夫ですぬ」

泣き止んですっかりしおらしくなった彼を離し、俺は未だに静まり返ったままの周りへ視線を向ける。

理不尽な排他と言うのは褒められた事じゃない。だがそれを行った側にも理不尽な排他があつたのなら話は別だ。

単純で困難だが、その根本を取り除かなければならない。

「皆さん、私と約束してくれませんか」

少し間を起きながら、一言一言を噛み締めるように放つ。

「私が、戦う事が叶わない皆さんの思いを受け継いでガストレアを討つ」

——その代わりに、皆さんは、私と同じようにガストレアと戦う人達を『応援』してくれませんか」

我慢は体に毒だと言う、良い年した俺には今更応援なんて言葉はこそばゆい物だが、本来貰いたい声位、貰ったっていい筈だ、若い頑張り屋達なんかは特に。

「それだけ、それだけです」

やっと満足した俺は再び元来た道を戻る。

周りの反応は見えない、言いたい事は言った、それが届かなければ次にどう釈明しようが今ここで語り続ける事に意味はない。

自身が警察官だと言う事もあえて言う必要は無い、権力で言葉を通すべき時とそうじゃない時があるが、今は後者だ。

ただ、背に感じる言い表し難い感情の塊に無反応を貫くのはいささかむず痒いが、何とか表情を崩さずに校門まで辿り着く。

目の前にある車の前には呆れた顔をした多田島警部、微笑を浮かべる木更君と里見君、そして満面の笑みの藍原君が居た。

少し待たせ過ぎただろうか、だけでも俺にとっては貴重な時間だった、だから切り捨てろと言われて捨てられる物ではないが……

「アイゼンちゃん」

と、門を出た所で、里見君に謝っていた藍原君が近付くこちらに氣付き、声をかけてきた。

「ん、何です……」

「ありがとう」

この時の俺の様子を東国に伝わる諺で言い表すならば、きつとこうだ、『鳩が豆鉄砲でも食らった様だ』と。

「あの、何故ですか」

「どう言うことなのだ？」

「私は、どちらかと言えば藍原君を追い出した彼の側に立って物を言っただけですよ？ 私は呪われた子供なのに。ですから蝙蝠野郎と言われても文句は言えないと思っただけなのですが」

それに、何となく判る事もある。

藍原君は、人間である事を望んでいる、信じている、平和の中になりたい事も。

なのに俺はあろう事かそんな藍原君の前で呪われた子供が化け物染みた力を持つ事を肯定し、戦う事を宿命であるかの様に受け入れた。

それは藍原君にとって、心穏やかに眺められるものでもないだろうに。

「……でも、それこそが『ヒーロー』ではないのか？」

「ヒーロー……ですか」

『みんな』を守るために戦う、それが妾の憧れたヒーローの姿！ 天誅ガールズは人生の教科書なのじゃ！」

あまりに心が純粹過ぎて汚れた俺には眩しすぎる、目が痛くなりそうだ。

「……どうしたのだ、目でも痛いのか？」

「いや、綺麗だと思っただけです、オマケにとっても格好良くて、惚れてしまいそうですよ」

あれだけの暗い感情の渦に晒されても尚、輝きを絶やささない心。

その心根は尊ばれるべきだろう。

「あ、アイゼンちゃん?!」

横で木更君が顔を赤くして驚き、里見君に白い目で見られている。「ま、待つのだ! 気持ち嬉しいが、妾には既に将来を誓い合ったふいあんせが……」

こちらでも顔を赤くしてしどろもどろになる藍原君を横目に里見君が俺の言葉を注釈する。

「なあ延珠、多分こいつの言ってる事、そう言うんじゃないと思うんだが……」

「ああ、またアイツの悪い癖が出てるな」

「ええ……ただただ、綺麗と思っただけです……心のありようが」

心を曝け出すのが恥ずかしくて、とぼけた言葉を繋げた俺は、頬が熱くなるのを感じて、最後に本音を小さく呟いてそっぽを向いた。

??

藍原君を無事に保護した後、多田島警部のセダンで里見君、木更君、藍原君の三人はアパートと自宅に送り、警部と二人きりの車内。

俺は窓に肘をつき、青空の下に広がる人の営みを眺めていた。

「アイゼン、昨日の言葉の答え、聞かせて貰えるよな?」

「遠回しなプロポーズですか?」

「違う、お前は何者かって事だよ。お前結局、明日まで保留するって言ってきたよな?」

「ああ、そう言えば!」

「最近、お前さんがふざけてるのかが分かってくる様になってきたぞ」

一切間を置かずに切り返す多田島警部に、俺は旧い友人の面影を無意識に重ねる。

アイツは随分真面目な奴だった、俺はふざけ倒してばかり。

「それで結局……私は何者なんでしょうね」

「そこで悩むのか? お前さんなら魔王の娘とか言うと思ってたが」

それでもって俺が真面目になった時はふざけた答えを返してくれ

る。

「心の中に化け物が居る」なんて本当にふざけてる。

「ただ、一つわかる事はありますよ」

「なんだ？ 美少女イニシエーターとかは無しだぞ？」

「警部、私の事何だと思ってるんですか……でもまあ、ある意味それっぽい言葉ですけど……」

窓の外では道行く人が様々な顔をして歩いている。

そこにあるのは悲しみだけだろうか、怒りだけだろうか。

いや、そんな事は無い。

彼らにもきつと、心の底から笑顔になる事を許される日が来るはずだ。

だから、その為に俺は……

「——みんなの平和を望み戦う街角のヒーローってのはどうですか？」

「それは……くっ……ぷふっ。ああ全く、お前らしいな、何故かヒーローって柄でもない癖に……ぷっ、あのアニメに影響されでもしたか？」

「ふふっ、すみません、今のは流石に私自身でもアレな発言だと思いませんね……と言うか天誅ガールズの内容は物騒な感じだったと思うんですけど、あんなに真っ直ぐな藍原君が見ても良いものなのではないか」

お互いにクスクスと笑いながら、警部は俺達の家へと車を走らせる。

??

そして、俺達の元へ「蛭子影胤追撃戦」の情報が入ったのは、その日の夜の事だった。

屍山血河の人魚姫

耳を劈くエンジンの轟音、人並み以上まで強化された五感を持つ呪われた子供たちにとってはいささかキツイものではなからうか。俺は頭を締め付けられる様な頭痛にこめかみを抑えながら周りを見回す。

一人残らず澄まし顔、誰一人として俺みたいなザマを晒す子供たちは居ない。

「流石……東京エリアの序列上位陣、慣れてる訳ですか」

「すまん、俺の配慮不足だ。耳当ての一つ位は用意しておくべきだったな」

「安心してください多田島警部、すぐ慣れます、慣れなきやいけませんから」

「……いいか？ 無理はするな、アイゼン。お前さんは俺とペアを組んで今日まで傷をこさえてばかりなんだからな」

太陽が完全に地平線に隠れた頃合い、俺と多田島警部はエンジンを温めている最中の軍用ヘリコプター群の内の一機、その中の座席に腰掛けていた。

家に帰って数時間後、蛭子影胤が七星の遺産を対象ガストレアから奪取したとの報告が入った事で、俺達は飛行場まで足を運ぶ事となった。

持って来たのは武装満載の楽器ケースとAGV試験薬と侵食抑制剤、衣服は荒事用に先程までのワンピースから多田島警部が買ってくれていた如何にも子供らしいデザインの入ったTシャツに、手錠、リボルバー、警棒を装備する為のシオルダーハーネスの上から制服のブレザーに袖だけ通し、下はシンプルなカーゴパンツに着替えている。

そして、今回の蛭子影胤追撃作戦の内容は至ってシンプル、蛭子影胤が入手した七星の遺産は世界を滅亡させしステージVガストレア、十二星座になぞらえた名前を持つゾディアックガストレアを呼び出す代物で、今、蛭子影胤はそのガストレアを呼び出す儀式か何かの真っ最中らしく、その妨害と七星の遺産を取り戻す事がこの作戦の最

終目標、だそうだ。

因みに、ステージVのガストレアにバラニウムは殆ど効果がなく、その肉体強度は現在の並の兵器群を凌駕する程らしい、そいつは本当に生物と呼んで良いものなのだろうか。

しかし『儀式』とは……比喩的な話とは分かっているけど、昔を思い出してか、ただ事でない、狩人の血が騒ぎ立てる。

それもまあ、呼び出すのは黄道十二宮の星座の名を冠したガストレアか……俺としては『スコーピオン^座』と対面するのは避けたい所だ。化け物に対抗する力を得る為、神秘を頼りとする狩人にとってサソリはそれはもう縁起のよろしく無い存在だ、何せ、あの伝説の狩人、オリオンを死に至らしめたと言う伝説もあるのだから。

伝説や伝承と言うものは不明瞭かつ幾つも枝分かれしているもので、その不可侵のミステリーは未知なる神秘へと繋がる重要な要素になる。

ただ、それ故に不便な所なのが、良くも悪くも関係性の成立がトリガーとなり神秘が働く場合がある事だ。

例えば、狩人はサソリに遭うと大概ロクな目に合わない、サソリ座の見える夜に外を出歩くななんてのはもってのほか、^{日本}ここでは、運勢の事をツキと呼ぶ事もあるらしいが、ツキに見放された狩人など……余りにも縁起が悪いではないか。

こうして考えれば分かる事だが、未知と宇宙との間柄に何かしらの関連性を求めるのは神秘的な考えに近い所がある、例えば星座占いや占星術はもっぱらその類。

……そう言えば、黄道十二宮と占星術という言葉で思い出したが、本来黄道、太陽の通り道には十三番目の星座が存在する。

かの医術の神と所縁のある星座なのだが、この時代でも十二星座と呼ばれているという事は、結局の所、有名にはなれずじまいだったらしい。

ガストレアが有する一種の『不死性』はあの星座にさぞぴったりだろうに。

ガストレアウイルスが持つその高い再生能力、肉体の強化と恒常性

の強化……ガストレアウイルスも始めは人間にとって希望となる可能性だつてあつたのかもしれない、しかし蓋を開けてみればそれは人間の存続を脅かす絶望だつた。

これがヨーロッパやアメリカならば、継るべき宗教の柱がある事からも鑑みて、この絶望を試練と受け取るだろう。

逆に、ここではどうだろうか、この絶望は抗いようなない災いとなるのだろうか。

「ガストレアウイルスは試練か災いか、天使か悪魔か……」

「何言ってるんだ？」

「独り言ですよ、気にせずどうぞ」

そう言つて俺は家から持つて来たビニール袋を取り出し、ラップで包んだシュガーラスクを多田島警部にプレゼントする。

「……てつきりそれに吐くのかと思つたんだが」

「はあ……デリカシーがありませんね」

「おい、今本気で呆れてなかつたか？」

暇があれば俺はシュガーラスクを作っている、こうしてセロファンラッに巻いておけば手を汚す事もなく持ち運びが出来て便利に食える。

昔は疲れたらこうして自分でこさえた甘味の味で疲れを癒していたものだ。

「お前なあ、こんなものわざわざ……」

「多田島警部、これ、他の人に渡しても良いでしょうかね？」

俺はシュガーラスクを眼前で振る。

「……警察官は公務員、つまり公正さが問われる職業だ。公務員ではない民警に菓子一つ贈つても賄賂扱いとまでは行かないが、逆は収賄しゅうわいの罪に問われる可能性がある。公務員以外に贈り物をするならそう咎めやしないが……警察官として動く時も、そうで無い時も、例え善意からの物であっても、貰い物は基本的に全て断れ、金銭に直結するものは特にだ。いいな？」

「確かに、公正さを求められる職で貰い物は不味いですね。それに、贈る分には問題無いのであれば、勿論遵守しますよ」

まだまだ数があるので、暇そうに座っている他のプロモーターやイ

ニシエーターにもお裾分けしていく。

わざわざ他の民警商売敵にこんな事をするのが余程珍しく見えたのか、大概の人は驚きを顔に表す。

後で俺が警察だと説明すると露骨に嫌な顔を見せるのと余計に困惑していたので半々に分かれる、やはり民警と警察との仲はのつぴきならない事になっていくらしい。

冷やかな視線を集めるのには慣れていく。

俺がやっていた狩人の実態を包み隠さず言ってしまうえば、戦時中に国境線を跨いでやって来て化け物を殺すだけ殺して帰って行く謎の武装組織だ、不気味に思われても仕方ない。

敵兵は自分達から全てを奪う化け物なのだから、お前が殺してくれ、と言われたりもした。

今の俺なら穏当に事が運ぶように口先位は貸していたかもしれないが、昔の俺は仕事馬鹿だ。当然聞き入れる事もなく、怒らせてしまった住人に石を投げられながら帰ったものだ。

それに比べれば、立ち位置が比較的はつきりしている警察は、俺には丁度いい。

警察の元で働く俺にはきちんと給金も出るそうだし、警察にとつて、同じ市民に手を出さない限りは彼ら民警もまた、守るべき市民の一人でもあると胸を張って言える。

「……大阪のおばちゃんみたいだな」

「オーサカ？ それは地名の事ですか？」

「日本の大都市の一つだ、今も大阪エリアとしてその名を残している。昔は食い倒れの街って呼ばれててな、美味しい食い物が沢山あったのさ、で、そこではな、おばちゃんが飴を配り歩いてたんだよ」

オバチャン……なんとも興味深い、美味しいものだらけの街で飴を配り歩く謎の存在か。

「……それは、聞き捨てなりませんね。飴の配り歩き、美味しい食い物、そんなのがあると聞いて、黙っていられる人はいませんよ」

「なんだ、カップラーメンじゃ不満か？」

「あれはあれで美味しいですが、また別口の物です」

「へいへい、随分と肥えた舌のようで」

「おっと、美食家と言つて下さいよ」

気の抜けた会話をしているのは何も俺達だけではなく、周りもまた同じように雑談で気を紛らわしている。

今から向かう森林地帯は、未踏査領域と呼ばれるガストレア大戦以後まともに人類の手が入れられて来なかった場所だ。

蛭子影胤と言う障害を抜きにしても、そこを闊歩するガストレアの大群により見事な殺し間キルツーンとなったその場所に向かう覚悟とは相応に必要なもの、語らいの一つや二つで気を紛らわせたいのは当然だ。

しかし、時間とは冷徹なもの。

—— 現時刻、マルマルサンマル〇〇三〇を以て、『蛭子影胤追撃作戦』を開始する。各員、健闘を祈る。

多田島警部と談笑を交わしていたその時、ヘリの中に響く不意のアナウンス。

誰も知らない男の一声、それが、俺達の命をチップにしたファイナルラウンドのゴングだった。

??

周囲を見渡せば森、森、森、砕けたコンクリートを足蹴にする木々を見れば、人類が地球の支配者などと言う傲りは過ちと知る。

真の支配者たる自然は、いとも容易く街を丸呑みにしてしまったらしい。

トーチカのように一階だけにその身を残したかつての文明の骸からは、ただならぬ哀愁が漂っている。

他の民警は、そんな物に目もくれず一目散に森の奥を目掛けてひた走っていく、早い者勝ちである以上、仕方のない事だが。

しかし、こう言うのは焦って獲りにいくよりかは、じっくりと押さええていく方が却って早く終わるもの、急がば回れと言うやつだ。

「アイゼン、俺達は事前に決めたルートに従って、この山を超えて旧市

街地に向かう、良いな?」

「はい、遠回りな旧国道ルートではなく、山を超えて一直線に向かうルートですね」

「ならなぜ、俺達も急ぎのルートを使うのか。」

「それは簡単な事で、今ここに居ても尚、俺達が単なる民警ではない『警察』と言う立場も持つ存在だからだ。」

「障害物の少ない旧国道で遠回りする奴は基本的には理性的、まあ、それでも遅く来てから後から横取りを考える奴が居ないとは言わないが、急ぎの用だと考えると、視界不良などのリスクがある代わりに現地へ一直線に進む事の出来るメリットがある山ルートについては話が別。」

「蛭子影胤をとつ捕まえがっぽりと稼ぎたい奴らならその程度のリスクなど採算には入れない、おまけに、そう言った奴らに限って荒くれ者も多い。」

「これから起きるのはゴロツキだらけの障害物競走——当然、民警同士での刃傷沙汰が起こり得る、と言う訳だ。」

「しかし、幾ら稼ぎが掛かっているとは言え、他者を殺すのは問題ですね」

「しかし現実問題、街中ですら民警同士の発砲事件なんてのも起こっているからな。民警の奴らにはゴロツキ上がりや元組員なんて奴らも多い。銃の扱いをこれまで禁じられていた日本で、何の躊躇いもなくそれを扱える奴らと言え、そうなるのも必然かもしれないが」

「アウトローの受け皿と呼ぶには、些かザルでは?」

「だがまあ、ガストレア大戦で何もかも小さくなっちゃったからな、使えるものは全て使うつもりだろうさ、不発弾でもな」

「で、その不発弾の処理をするのが……」

「ああ……俺達^{警察}だな」

「ですね」

俺は多田島警部と目配せして、丘を進むペースを少し上げた。

??

ガストレアウイルスにより強化された五感のおかげで周りの気配も手に取るように分かるのだが、俺は昔の癖で、獣道や分泌物などの有無や、枝の折れた方向などをついつい確認し、多田島警部に不思議がられたりしながらも、山の稜線にあと一步、と言う所まで辿り着いた。

ガストレアとは何度かすれ違ったものの、何とかやり過ごしつつ、弾薬や道具類も温存する事が出来た。

民警同士の諍いの気配も無く、これは喜ばしい事だ。

「今の所、検挙者0、平和過ぎて嬉しくなりますね」

「全く、普段もこれくらいお行儀良くしてほしいもんだがな」

「そうですね。出来れば……誰にも死んで欲しくはありませんし」

俺は心の底からそう思う。

狩人の本懐は獣、化け物を狩る事に違いないが、何のためにそうするかと言えば、そりゃあ、人を守る為だ。

少なくともこの世界では化け物ガストレアに向けられるべき弾丸パラニウムを人に向けて、と言うのは些か気分が宜しくない。

「……」

「何ですか？」

「いや、中々可愛げのある事を言うもんだとな」

突然吐かれた浮ついた言葉に、俺は唾然とした。なんとたつて泣く子も発狂するような強面の多田島警部から、可愛げ、なんてオウガ鬼が大人しく渦巻きキャンディを舐めてる位似合わない。

「……なんですかそれ、個人的には昨日の言葉の方が子供らしくてそれっぽいやないですか」

「分かってねえな、お前さんみたいな気取った奴がふつと本音を溢すのが良いんだろうがよ」

一瞬、多田島警部に幼い子供を手籠にする趣味でもあるのかと思っただが、これは違う、純粹に揶揄われているのだ。

正直、昨日まではまだ俺との間に壁が残っているような様子だった。

だが今日になって、いや、正確には昨日の昼から、多田島警部の様子が変わっていた。具体的に言うのは難しいが、檻の中の虎を見るような様子から部屋飼いの猫を見るような感じに……そう、俺は、一種の親しみを感じている。

「ああ……ええ油断してましたよ。男は狼だつて事をすっかり忘れてました」

「はは、言っとけ」

そして、出来ればこのまま何事も……とは行かないのが、無慈悲な現実だ。

唐突に俺達の舞台の幕は上がる、こっちから求めても居ないのに。

——バシユン……

談笑の中、刹那の隙間を縫う様に森中を駆け抜けた軽い空気の抜ける様な撃発の音。

「銃声です」

今にも消えそうなこの音は、恐らく消音器付きの銃の発砲音……蝙蝠の因子無くしては聞き取れなかつただろう。

「銃声……辺りにガストレアは！」

「居ません、代わりに、複数人の気配が先頭に……これは恐らく……」
蝙蝠の因子に齎された聴覚が捉えたのは、どろりとした水が弾けるような音、走りだけ強く、後は弱まるばかりの呻き声、いやに耳に残る、俺にとつては、あまりにも慣れ過ぎた音。

——バシユン……バシユン……

状況確認の最中にも鳴り響くこの音が、著しい事態の悪化を物語る。

その二撃目の音がスイッチとなり、俺と多田島警部は即座に仕事の準備に入る。

多田島警部は、ジャンパーの下の防弾服の上から身に付けたシヨル

ダーホルスターから銃を一丁引き抜き、俺は楽器ケースから銃口の両サイドにストック代わりのハンドガンが二丁取り付けられた一本のショットガンを楽器ケースから引き抜き、二丁のハンドガンにはバラムニウム弾を、ショットガンにはビーンバグ弾を装填。

「……やつてくれたな、こん畜生！」

若干の怒気を滲ませる多田島警部に内心同調しながらも、俺は素面を保ちながら銃声の寢床へ向かって走る。

もし、刃傷沙汰が起きるとすれば、この蛭子影胤を追っている民警の内の先頭グループではなく、後方グループの中で足の引つ張り合いい、と言った風に事件が起きるものとした多田島警部の考えに賛同し、後方グループの後ろに居たのが失敗だった。多田島警部は悪くないのだが。

俺が多田島警部に同調したのも、わざわざ蛭子影胤を倒す前に裏切るよりかは、蛭子影胤に嫉けるなり、協力して倒したりした後なりに、消耗した対象か討伐者を裏切って報酬を独り占めにした方がまだ分からなくもない、と言ったところからだ。

先頭グループは少なくとも先に蛭子影胤に遭遇する筈、当然、欲深な奴が居たとすればそこが落とし所。だからこそ、誰も蛭子影胤と衝突していない今事件が起きるとすれば、後方グループの筈、だったのだが。

「まさか、最前線でやらかしてくれるとは……理性を捨てているとは思えませんね」

「起きちまったもんは仕方がねえ、とにかく走るぞ！」

走り出した俺の鼻腔を、夥しい血と硝煙の臭いが埋め尽くしたのは、それから少ししてからだ。

??

「これで、邪魔者は居なくなっただな」

「……将監さん」

「ん？ なんだ、夏世^{かよ}」

辺りに散らばっているのは、私の銃弾と将監さんの大剣に命を絶たれた1組のペア。

「いえ、なんでもありません」

将監さんは、きつと、これが当たり前だと思っている。

弱い者は全て失い、強い者は全てを得る。

そんな価値観を将監さんは遵守しているに過ぎないのだと。

「これで、蛭子影胤を倒す名誉は俺のもんだ」

「……」

そして、私はその為の道具。

将監さんに従い、全てを将監さんに捧げる。

これが私の汚い生き方。

将監さんの道具となるのを認める事で、罪の意識から逃れようとしているだけ。

将監さんは人として罪を犯し、私は道具として罪を作る。

全ては将監さんがやった事だと。

怖いから、私が血の池に沈んでいくのが。

怖いのに、将監さんに全てを押し付けるのが。

矛盾した感情を押しえ付けて引き金を引いた、その人差し指の震えが止まらない。

「私は……私が嫌いです」

「はあ？ 何言ってるんだ。お前は俺の道具だ、だから黙って従えば良いんだよ」

だから、私は今日も将監さんが背負う罪を作る。

将監さんの、道具・として。

「武器を捨てて手を後ろに組め！」

私と将監さんが先へ進むとした時、将監さんよりも男臭い声程まで死体の山の方向から聞こえて来たので、私はそちらへこのフルオートショットガンを構えようとして……

……頭の後ろに添えられたひやりとした感触に手を止める。

「お嬢さん、ホールドアップです。そんな物騒な物……多田島警部に
向けたら承知しませんよ」

気配を殺していたのか、私の意識の外から飛び出した……恐らく
は、私と同じ存在呪われた子供の声に、微かに悲しみを感じたのは、きっと私が銃
口を向けようとした相手がこの人にとって大切なものだったから。

——また、殺すのでしょうか。

「その物騒な奴を捨てて、背中で手を組んで下さい。早くしてくだ
……って、多田島警部っ」

——それとも私は、悲しんでいるフリをしているだけなのでしょう
か。

私が視線を移した先では、黒色の大剣を盾にして突撃する将監さん
と、辛うじてそれを回避した男の人の姿。顔までは見えませんでした
が、将監さんに負けず劣らずの恰幅をしていました。

「夏世ッ！」

そうして生まれた隙を将監さんは逃しませんでした。

脳まで筋肉の様な将監さんですが、ここぞと言う時の野生の感には
いつも助けられます。

「つとー！ バラニウム弾を呪われた子供に撃ち込むとは、血も涙もな
いんですか、全く……」

将監さんはズボンに挟んだハンドガンを引き抜き、私の後ろに立つ
人に向かって三連射すると、私の後ろの人はそれを回避する為に後退
して距離を取るしかありません。

そうして、私は銃を構えながら反転し、後ろに立っていたその人の
顔を正面に捉えた時。

「あなたは……」

「……奇縁ってやつですかね」

——白髪混じりの黒髪と、深く黒い瞳、そしてこのふざけた口調。

「……アイゼン、そつちは任せただぞ！」

あの恰幅の良い警察官と共にあの会議に参加していた、あのイニシエーターの名前は、確か……。

「……それでは、彼は多田島警部に任せるとして、此方は私が、……その前に、お嬢さんに改めて自己紹介を——

——勾田署対ガストレア課所属、アイゼン・バンカー警部補です。以後お見知り置きを」

胸ポケットから取り出した警察手帳を私に見せるその人は、私の後ろに横たわる死体を見て何も言わずに警察手帳をしまうと、無言で、私が殺したのか、と問うように目を向けてきた。

私は将監さんの道具として、何も返さず、命令を待つ。

将監さんは迷わない。

「夏世……殺るぞ！」

震える指を押さえ付け、銃を構える。

血と硝煙の香りはもうきつと離れない。

だから……私は。

こんな私を必要としてくれる将監さんに、私は付いていく。

「I P 序列1584位……モデル・ドルフィン……千寿夏世^{せんじゆかよ}」

「……やはり、そうなりますか」

少し悲しげに目を伏せたてそう言ったその人は、私に向けて緩く銃を構え直す。

「……私は、将監さんの道具として、最期まで戦います」

「覚悟は……と聞くのは無粋ですかね」

「私は、将監さんの後ろに何処までもついて行きます。それが例え——」

——地獄の底であったとしても。